

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書XV

泉南市文化財調査報告書 第三十一集

1998. 3

泉南市教育委員会



## 序 文

大阪府南部に位置します泉南市は、南に緑豊かな和泉山脈、北に波静かな大阪湾に接し、古代より豊かな自然環境に恵まれた結果、数多くの遺跡が残されています。

現在泉南市内には、90箇所にもものぼる旧石器時代から江戸時代までの様々な時代の貴重な遺跡が確認されており、その数は年々増加しております。

一方、市域の開発は依然として活発に行なわれ、常に破壊の危機にさらされておりますのも事実であります。これら先人の残した貴重な歴史的遺産を後世に伝え、保護を講じることは、現在に生きる我々に与えられた義務であります。

本調査報告書により、文化財に対する理解を深めて頂くと同時に、文化財保護・研究に対しての一助となることで、この重責の一端を果たすことができたら幸いに存じます。

また、今年度は、昨年、史跡海会寺跡広場に隣接して完成いたしました埋蔵文化財センターが、「古代史博物館」として一般開放が開始され、本市文化財行政において最も大きな転換点と言える年となりました。

今後は、埋蔵文化財センター部門において、より綿密な埋蔵文化財の調査研究、文化財保護を進めて行くと同時に、博物館部門においては、歴史・文化の中心的存在として海会寺跡広場と一体となった「歴史の風薫るまち・せんなん」のイメージづくり、まちづくりに活かす所存であります。

最後になりましたが、調査にご協力を頂きました地元地権者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々に深く感謝の意を述べさせていただきますと同時に、今後とも本市の文化財行政により一層のご理解、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成10年3月

泉南市教育委員会  
教育長 赤 井 悟

## 例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成9年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当・実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡 一彦・城野博文・河田泰之・大野路彦を担当者として、平成9年4月1日に着手し、平成10年3月31日に終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、植田哲也、上田差知代、江尻美代子、大多和恵、岡井和彦、奥田桂、片木直幸、蒲生徹幸、河村公美子、熊田聖子、蔵田弘幸、沢野高広、島津真理、下尻順子、鈴木正裕、竹内伸一郎、竹中智子、富愛、谷本典子、谷本竜太郎、中谷めぐみ、広岡隆憲、福井元氣、藤野渉、松見敬子、松本久実、松本真実、真鍋紀美子、向林智与、村上佳子、村田純一諸君らの協力を得た。  
また、広瀬和雄、向井俊生、三好義三、木立雅朗らの各氏からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は、石橋・岡・城野・河田・大野が行なった。執筆の分担は目次に記した。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行ない、出土遺物の写真撮影は岡・河田が行なった。
6. 遺物実測は、江尻美代子、真鍋紀美子、大多和恵、河村公美子が行ない、トレースは、江尻・河村が行った。図版・挿図作成は、主に岡・河田が行なった。
7. 本書の編集は石橋・岡が中心となり行なったが、一部仮屋・岡田が補佐した。
8. 調査にあたっては、写真・スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。
9. 本調査における出土遺物及び諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 凡 例

1. 各調査区には、個別の番号をつけている。番号の基本構成は、「遺跡略称（記号）－年度－通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、光平寺跡－KH、戎畑遺跡－EB、天神ノ森遺跡－TN、専徳寺遺跡－ST、幡代遺跡－HT、岡中遺跡－OK、長山遺跡－NG、上代石塚遺跡－JD、岡田遺跡－OKD、兎田遺跡－US、新家遺跡－SNである。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現した。

なお本報告書では、報告文は遺跡毎に章だてしているため、基本的に各章中では遺跡名称を省略している。

2. 図中の方位は、P L. 1・2では真北を、各調査区位置図・地形図及びP L. 3では座標北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。
3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+(m)の数値を使用しているが、T.P.+は省略している。
4. 遺構名称は、アルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットは、SB－掘立柱建物、SD－溝、SK－土坑、SX－性格不明遺構、Pit－柱穴をそれぞれ表す。遺構番号は、2桁を原則として、1桁の数字の場合は、その前に0を付している。また、調査区毎に、遺構の種類別に通し番号を付している。
5. 土層断面の一部および掘立柱建物等の柱列の断面位置は、平面図中に指示線とアルファベットによって示され、その場所が一致する。
6. 遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、須恵器－黒塗り、弥生土器・土師器・陶磁器・土製品－白抜き、瓦器・瓦質土器－トーン、瓦（転用品を含む）－斜線のように塗り分けた。
7. 出土遺物の番号は、遺跡毎に土器、瓦の区別無しに通し番号を付した。なお、遺物実測図版および挿図と写真図版では、遺物番号は統一している。また、同一写真図版内で複数の遺跡の遺物が存在する場合、番号の前に遺跡の略称を付している。
8. 遺物の出土量を表すのに用いたコンテナは、容積約27.5ℓのものである。

# 目 次

第1章 調査の経過	(石橋)	1
第2章 男里遺跡の調査		6
第1節 既往の調査	(城野)	6
第2節 97-1区の調査	(大野)	7
第3節 97-2区の調査	(岡)	8
第4節 97-3区の調査	(岡)	9
第5節 97-4区の調査	(城野)	10
第6節 97-5区の調査	(城野)	12
第7節 96-17区の調査	(石橋)	12
第8節 96-18区の調査	(大野)	14
第9節 96-19区の調査	(大野)	15
第3章 光平寺跡の調査	(大野)	16
第1節 既往の調査		16
第2節 96-1区の調査		16
第4章 戎畑遺跡の調査		17
第1節 既往の調査	(城野)	17
第2節 97-1区の調査	(岡)	18
第3節 97-2区の調査	(岡)	19
第4節 97-3区の調査	(城野)	19
第5節 97-4区の調査	(城野)	22
第6節 97-5区の調査	(城野)	23
第7節 97-6区の調査	(城野)	24
第8節 97-7区の調査	(大野)	24
第9節 97-8区の調査	(大野)	25
第10節 97-9区の調査	(大野)	25
第11節 97-10区の調査	(大野)	26
第12節 97-11区の調査	(大野)	26
第13節 97-12区の調査	(岡)	27
第14節 97-13区の調査	(大野)	28
第15節 97-14区の調査	(大野)	28
第16節 97-15区の調査	(岡)	28
第17節 97-16区の調査	(岡)	29
第5章 天神ノ森遺跡の調査	(大野)	30
第1節 既往の調査		30

第2節	97-1区の調査	.....	30
第6章	専徳寺遺跡の調査	..... (大野)	31
第1節	既往の調査	.....	31
第2節	97-1区の調査	.....	31
第7章	幡代遺跡の調査	.....	33
第1節	既往の調査	..... (大野)	33
第2節	97-1区の調査	..... (城野)	33
第3節	96-1区の調査	..... (河田)	34
第4節	96-2区の調査	..... (岡)	35
第8章	岡中遺跡の調査	..... (城野)	37
第1節	既往の調査	.....	37
第2節	97-1区の調査	.....	37
第9章	長山遺跡の調査	..... (河田)	39
第1節	既往の調査	.....	39
第2節	96-1区の調査	.....	39
第10章	上代石塚遺跡の調査	.....	41
第1節	既往の調査	..... (河田)	41
第2節	97-1区の調査	..... (城野)	42
第11章	岡田遺跡の調査	.....	43
第1節	既往の調査	..... (岡)	43
第2節	97-1区の調査	..... (石橋)	44
第3節	97-2区の調査	..... (城野)	46
第4節	97-3区の調査	..... (岡)	49
第5節	97-4区の調査	..... (大野)	49
第6節	97-5区の調査	..... (石橋)	50
第7節	97-6区の調査	..... (岡)	51
第8節	96-8区の調査	..... (岡)	51
第12章	兎田遺跡の調査	.....	53
第1節	既往の調査	..... (大野)	53
第2節	96-1区の調査	..... (岡)	53
第13章	新家遺跡の調査	..... (大野)	55
第1節	既往の調査	.....	55
第2節	96-2区の調査	.....	55
第14章	まとめ	..... (岡)	59
報告書抄録	.....		巻末

## 挿 図 目 次

第1図	男里遺跡97-1・96-19区地形図	7
第2図	男里遺跡97-1・4区、96-17・18区出土の遺物	8
第3図	男里遺跡97-2区地形図	8
第4図	男里遺跡97-2区出土の土器	9
第5図	男里遺跡97-3区地形図	10
第6図	男里遺跡97-4区地形図	10
第7図	男里遺跡97-5区地形図	12
第8図	男里遺跡96-17区地形図	13
第9図	男里遺跡96-18区地形図	14
第10図	光平寺跡96-1区地形図	16
第11図	戎畑遺跡・天神ノ森遺跡・専徳寺遺跡調査区位置図	17
第12図	戎畑遺跡97-1区地形図	18
第13図	戎畑遺跡97-2～16区地形図	20
第14図	戎畑遺跡97-3・15区出土の土器	22
第15図	天神ノ森遺跡97-1区地形図	30
第16図	専徳寺遺跡97-1区地形図	31
第17図	専徳寺遺跡97-1区出土の遺物	32
第18図	幡代遺跡調査区位置図	33
第19図	幡代遺跡97-1・96-1区地形図	34
第20図	幡代遺跡96-2区地形図	35
第21図	岡中遺跡調査区位置図	37
第22図	岡中遺跡97-1区地形図	37
第23図	長山遺跡96-1区地形図	39
第24図	上代石塚遺跡調査区位置図	41
第25図	上代石塚遺跡97-1区地形図	42
第26図	岡田遺跡調査区位置図	43
第27図	岡田遺跡97-1～3区地形図	44
第28図	岡田遺跡97-2区出土の遺物	49
第29図	岡田遺跡97-4区地形図	50
第30図	岡田遺跡97-5区地形図	50
第31図	岡田遺跡97-6区地形図	51
第32図	岡田遺跡96-8区地形図	52
第33図	禿田遺跡調査区位置図	53
第34図	禿田遺跡96-1区地形図	53



第35図	兎田遺跡96-1区出土の遺物	54
第36図	新家遺跡調査区位置図	55
第37図	新家遺跡96-2区地形図	55
第38図	新家遺跡96-2区出土の弥生土器	57

## 表 目 次

第1表	平成9年度発掘および試掘調査届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	4
第4表	立会調査一覧表	5
第5表	文化財一覧表	62

## 図 版 目 次

PL. 1	泉南地域の文化財
PL. 2	泉南地域の地形分類
PL. 3	男里遺跡・光平寺跡・長山遺跡調査区位置図
PL. 4	男里遺跡調査区
PL. 5	男里遺跡96-17区調査区
PL. 6	戎畑遺跡97-1区調査区
PL. 7	戎畑遺跡調査区①
PL. 8	戎畑遺跡調査区②
PL. 9	戎畑遺跡調査区③
PL. 10	光平寺跡・天神ノ森遺跡・専徳寺遺跡・幡代遺跡・岡中遺跡・長山遺跡調査区
PL. 11	岡田遺跡調査区
PL. 12	岡田遺跡97-2区調査区
PL. 13	岡田遺跡・上代石塚遺跡・兎田遺跡・新家遺跡調査区
PL. 14	岡田遺跡97-1・2区出土の遺物
PL. 15	男里遺跡97-1・2区
PL. 16	男里遺跡97-3・4・5区
PL. 17	男里遺跡96-17区
PL. 18	男里遺跡96-18・19区・光平寺跡96-1区
PL. 19	戎畑遺跡97-1・2区
PL. 20	戎畑遺跡97-3・4区
PL. 21	戎畑遺跡97-5・6・7区
PL. 22	戎畑遺跡97-8・9・10区

- PL. 23 戎畑遺跡97-11・12・13区
- PL. 24 戎畑遺跡97-14・15・16区
- PL. 25 天神ノ森遺跡97-1区・専徳寺遺跡97-1区・幡代遺跡97-1区
- PL. 26 幡代遺跡96-1・2区
- PL. 27 岡中遺跡97-1区・長山遺跡96-1区
- PL. 28 上代石塚遺跡97-1区・岡田遺跡97-1区
- PL. 29 岡田遺跡97-2区
- PL. 30 岡田遺跡97-3・4・5区
- PL. 31 岡田遺跡97-6区、96-8区・兎田遺跡96-1区
- PL. 32 新家遺跡96-2区
- PL. 33 男里遺跡97-1・2区・専徳寺遺跡97-1区出土の遺物
- PL. 34 男里遺跡97-4区、96-17区・戎畑遺跡97-15区出土の遺物
- PL. 35 戎畑遺跡97-3区出土の土器
- PL. 36 岡田遺跡97-1・2区出土の遺物①
- PL. 37 岡田遺跡97-1・2区出土の遺物②
- PL. 38 新家遺跡96-2区・兎田遺跡96-1区出土の遺物

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅤ

## 第1章 調査の経過

泉南市は、大阪府南部に位置する。北西は大阪湾に面し、南は和泉山脈で区切られ和歌山県に接し、北東、南西側は樫井川、男里川の両河川に囲まれている。このため市域は、海岸、沖積地、洪積段丘から山間部に至るまでの様々に変化に富んだ地形を有しているといえる。

従来、市域において遺跡が多く確認されていたのは、主に男里川流域に限られていた。その後、関西国際空港建設とバブル経済による開発の波によって、一挙に遺跡の発見が相次いだ。特に、樫井川左岸の洪積段丘面上において多くの成果があった。さらに近年では、両河川地域以外の市域中央部や、遺跡の存在がほとんど予想できなかった地域においても遺跡が発見される様になっている。今後、関西国際空港の全体計画の具体化など開発の増加が予想される事象は数多くあり、さらに様々な時代、性格を持った遺跡が発見される可能性があるだろう。

このようなもとで今年度、本市において第2表のと通りの発掘調査が行なわれた。このうち本書の本文中において報告する遺跡数は12遺跡で、調査件数は、全部で42件である。

毎年の傾向であるものの、今年度は特に、小規模な調査が数多くの遺跡で行なわれる結果となった。以下、それぞれの遺跡の調査について経過をみてみたい。

男里遺跡は、今年度は6件の調査が行なわれ、昨年度未報告分を合わせて8件を報告している。昨年度と比較してやや減少したものの、依然として毎年多くの調査が行なわれる遺跡の一つである。今年度はすべての調査が遺跡の北半分に集中し、現在の男里集落内での調査も目立った。

光平寺跡は、男里遺跡の中に含まれる遺跡である。件数は少ないものの、ほぼ毎年調査が行なわれている。今年度は、昨年度未報告分1件の調査を報告している。

戎畑遺跡は、全部で16件と今年度最も多くの調査が行なわれた。この調査件数の増加は、平成7年度から8年度にかけて大規模な区画整理が行なわれた後の住宅等の建築に起因するものである。また、97-1区は、遺跡外であったが、試掘調査により遺構・遺物が確認され、遺跡の拡大が行なわれ調査に至った。

天神ノ森遺跡も件数は少ないものの、1、2年おきに調査が行なわれている。現在、遺跡の大半は神社地となっているため、いずれも遺跡の縁辺部の調査に限られているが、今年度もこの遺跡の縁辺部で1件の調査が行なわれた。

専徳寺遺跡は、試掘調査によって新たに周知され、調査が行なわれた遺跡である。現在の樽井集落のほぼ中心で、付近は宅地となっているためごくわずかな面積の周知にとどまったが、これまで予想だにできなかった地域での遺跡発見となった。

幡代遺跡は、男里遺跡に次ぐ調査件数の多い遺跡であったが、近年は減少傾向にあるといえる。今年度は2件の調査が行なわれ、昨年度未報告分と合わせて3件を報告している。

岡中遺跡は市域南部に位置する遺跡である。今年度は現在の岡中集落のやや南よりの地点において1

件の調査が行われた。

長山遺跡は、南北に細長い形をした遺跡である。当該地では数年前から宅地造成や住宅建築があいついでいる。昨年度未報告の1件の調査を報告している。

上代石塚遺跡は、平成7年度に大規模店舗建設に伴いかなり大規模な調査が行なわれて以来2度目の調査となった。今年度は、遺跡の縁辺部でかなり小規模な調査が1件行なわれた。

岡田遺跡は、昨年度から急激に調査件数が増大した。今年度は6件の調査が行なわれ、昨年度未報告分と合わせて7件の調査を報告している。今年度は、現在の岡田集落に最も近い南海本線岡田浦駅付近の調査が目立った上に、比較的規模の大きなものもあった。

兎田遺跡は、遺跡の大半が現在の兎田集落と重なるため、調査はある程度行なわれているにも関わらずほとんど全容は知られていない。今年度は、昨年度未報告分の現在の兎田集落の中心部の調査1件を報告している。

新家遺跡も、昨年度未報告分の調査である。調査地は、遺跡の縁辺部にあたる現在の新家中村集落の一部に含まれる地点の調査である。

第1表 平成9年度発掘及び試掘調査届出一覧表

平成9年12月31日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面積(m <sup>2</sup> )	件 数	面積(m <sup>2</sup> )	件 数	面積(m <sup>2</sup> )
9年・2	3	810.04	3	2,607.96	6	3,418.00
3	2	597.22	5	6,169.79	7	6,767.01
4	2	2,755.48	3	6,207.75	5	8,963.23
5	5	1,765.07	5	7,033.80	10	8,798.87
6	1	527.00	1	346.98	2	873.98
7	3	1,402.44	9	19,380.02	12	20,782.46
8	20	8,174.76	5	82,023.20	25	90,197.96
9	8	77,067.15	6	29,981.33	14	107,048.48
10	3	374.07	1	1,819.22	4	2,193.29
11	9	1,068.53	1	2,195.88	10	3,264.41
12	9	1,834.21	4	17,691.35	13	19,525.56
合 計	65	96,375.97	43	175,457.28	108	271,833.25

第2表 発掘調査一覧表

平成9年12月31日現在

No.	遺跡名	地区名	位 置	申 請 者	面積(m <sup>2</sup> )	用 途	調査年月	備 考
1	男里遺跡	97-1区	男里		98.12	住宅新築	9年5月	本書掲載
2	男里遺跡	97-2区	男里		218.29	住宅新築	9年12月	同上
3	男里遺跡	97-3区	男里		189.62	住宅新築	9年9月	同上
4	男里遺跡	97-4区	男里		154.59	住宅新築	9年7月	同上
5	男里遺跡	97-5区	樽井		83.94	住宅新築	9年12月	同上
6	男里遺跡	97-6区	男里		470.00	堤体改修	9年12月～ 10年3月	別書掲載
7	男里遺跡	96-16区	男里		80.00	農業関連	9年2月	同上
8	男里遺跡	96-17区	男里		1,655.24	給油所	9年2月	本書掲載
9	男里遺跡	96-18区	男里		321.03	共同住宅	9年2月	同上
10	男里遺跡	96-19区	男里		231.41	住宅新築	9年3月	同上
11	光平寺跡	96-1区	男里		104.75	住宅新築	9年3月	同上
12	戎畑遺跡	97-1区	男里		1,181.00	工場及び倉庫	9年7月	同上
13	戎畑遺跡	97-2区	樽井		390.00	住宅新築	9年10月	同上
14	戎畑遺跡	97-3区	樽井		179.19	住宅新築	9年8月	同上
15	戎畑遺跡	97-4区	樽井		218.66	住宅新築	9年8月	同上
16	戎畑遺跡	97-5区	樽井		214.09	住宅新築	9年8月	同上
17	戎畑遺跡	97-6区	樽井		181.39	住宅新築	9年8月	同上
18	戎畑遺跡	97-7区	樽井		152.92	住宅新築	9年9月	同上
19	戎畑遺跡	97-8区	樽井		176.71	住宅新築	9年9月	同上
20	戎畑遺跡	97-9区	樽井		196.43	住宅新築	9年9月	同上
21	戎畑遺跡	97-10区	樽井		196.45	住宅新築	9年9月	同上
22	戎畑遺跡	97-11区	樽井		354.02	住宅兼店舗	9年10月	同上
23	戎畑遺跡	97-12区	樽井		150.43	住宅新築	9年10月	同上
24	戎畑遺跡	97-13区	樽井		150.00	住宅新築	9年10月	同上
25	戎畑遺跡	97-14区	樽井		150.00	住宅新築	9年10月	同上
26	戎畑遺跡	97-15区	樽井		207.26	住宅新築	9年10月	同上
27	戎畑遺跡	97-16区	樽井		149.98	住宅新築	9年10月	同上
28	天神ノ森遺跡	97-1区	男里		141.41	住宅新築	9年5月	同上
29	専徳寺遺跡	97-1区	樽井		373.49	分譲住宅	9年4月	同上
30	幡代遺跡	97-1区	幡代		434.11	住宅新築	9年6月	同上
31	幡代遺跡	97-2区	幡代		280.59	倉庫	9年5月	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認することができなかった。(第18図)
32	幡代遺跡	96-1区	幡代		209.42	住宅新築	9年2月	本書掲載
33	幡代遺跡	96-2区	幡代		104.75	住宅新築	9年3月	同上
34	岡中遺跡	97-1区	信達岡中		614.61	住宅新築	9年12月	同上
35	長山遺跡	96-1区	馬場		1,042.55	宅地造成	9年2月	同上
36	上代石塚遺跡	97-1区	馬場		497.21	住宅新築	9年2月	同上
37	岡田遺跡	97-1区	岡田		1,799.44	共同住宅	9年11月	同上
38	岡田遺跡	97-2区	岡田		1,625.20	宅地造成	9年5月～ 6月	同上
39	岡田遺跡	97-3区	岡田		202.24	住宅新築	9年12月	同上
40	岡田遺跡	97-4区	岡田		330.72	住宅新築	9年5月	同上
41	岡田遺跡	97-5区	岡田		160.63	住宅新築	9年8月	同上
42	岡田遺跡	97-6区	岡田		131.00	住宅新築	9年9月	同上
43	岡田遺跡	96-8区	岡田		346.30	住宅新築	9年3月	同上
44	兎田遺跡	96-1区	兎田		354.74	住宅新築	9年3月	同上
45	新家遺跡	96-2区	新家		272.18	住宅新築	9年1月	同上

第3表 試掘調査一覧表

平成9年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	申請者	面積(m <sup>2</sup> )	用途	調査年月日	備考
1	範囲外	樽井		1,036.42	倉庫	9年2月6日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	新家		520.00	青少年の森施設整備	9年2月26日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	信達市場		498.70	共同住宅	9年3月3日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	男里		2,085.73	共同住宅	9年3月11日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	樽井		1,177.42	宅地造成	9年4月2日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	樽井		975.22	共同住宅	9年4月8日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	樽井		1,295.24	車庫	9年4月14日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	信達市場		1,713.47	宅地造成	9年4月15日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	樽井		374.49	宅地造成	9年4月16日	近世の遺構・遺物を検出し、発掘調査を実施した。(新規発見遺跡 専徳寺遺跡)
10	範囲外	岡田		367.95	分譲住宅	9年5月2日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	信達市場		4,602.95	宗教施設	9年5月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	信達牧野		411.52	共同住宅	9年5月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	樽井		391.92	分譲住宅	9年5月27日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	信達牧野		2,769.00	共同住宅	9年6月5日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	岡田		346.98	分譲住宅	9年6月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	栗田		2,768.76	宅地造成	9年6月17日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	男里		497.66	共同住宅	9年6月20日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	信達金熊寺		2,104.65	特別養護老人ホーム	9年6月24日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
19	範囲外	信達牧野		497.64	店舗	9年7月9日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	新家		435.02	宅地造成	9年7月22日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	男里		1,181.00	工場及び倉庫	9年7月23日	中世の遺構・遺物を確認し、発掘調査を実施した。(戎組遺跡の拡大)
22	範囲外	中小路		2,646.81	事務所	9年7月25日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
23	範囲外	樽井		1,830.75	宅地造成	9年7月25日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
24	範囲外	樽井		6,657.00	宅地造成	9年8月1日	トレンチ4カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
25	範囲外	樽井		1,236.85	共同住宅	9年8月7日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
26	範囲外	樽井		1,188.10	工場建設	9年8月22日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
27	範囲外	樽井		481.36	宅地造成	9年9月1日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
28	範囲外	信達牧野		1,419.28	宅地造成	9年9月11日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
29	範囲外	幡代		655.36	倉庫及び住宅	9年9月12日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
30	範囲外	樽井		1,343.76	共同住宅	9年9月17日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
31	範囲外	樽井		729.89	共同住宅	9年9月19日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
32	範囲外	信達牧野		1,294.63	倉庫	9年10月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
33	範囲外	新家		79,200.00	休憩所施設	9年10月31日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
34	範囲外	樽井		6,007.22	病院	9年10月31日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
35	範囲外	信達牧野		1,819.22	店舗	9年11月12日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
36	範囲外	信達市場		423.85	分譲住宅	9年11月13日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
37	範囲外	樽井		1,527.54	分譲住宅	9年12月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成9年12月31日現在

No.	遺跡名	位 置	申 請 者	面積(m <sup>2</sup> )	用 途	調査年月日	備 考
1	六 尾 遺 跡	信達六尾		60.00	農業関連	9年4月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	海 宮 宮 池 遺 跡	信達大苗代		3,931.61	分譲住宅	9年9月～10月	遺構・遺物は確認されなかった。
3	男 里 遺 跡	男里		2.00	ガス管埋設	9年11月5日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	君 ケ 池	樽井		20,100.00	農業関連	9年10月～11月	遺構・遺物は確認されなかった。
5	鬼 木 池	信達岡中		120.00	農業関連	9年10月～11月	遺構・遺物は確認されなかった。
6	座 頭 池	岡田		40,100.00	農業関連	9年10月～11月	遺構・遺物は確認されなかった。
7	イ ヤ カ サ 池	新家		15,000.00	農業関連	9年10月～12月	遺構・遺物は確認されなかった。
8	男里遺跡 光平寺跡	男里		992.70	下水道	9年11月～12月	遺構・遺物は確認されなかった。
9	新 家 古 墳 群	新家		255.15	教会	9年11月11日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	高 田 山 古 墳 群	幡代		255.15	住宅新築	9年12月24日	遺構・遺物は確認されなかった。

## 第2章 男里遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1～3）

男里川の右岸に発達した沖積地を中心に広がる男里遺跡は市域最大の面積を誇ると同時に市域でも最も早い段階より周知されてきた遺跡である。昭和初期に発見された弥生土器を契機として、それ以降今日まで多くの地点で調査が実施されている。また近年は遺跡を南北に縦貫する形で道路が新設され、それともなう事前調査に代表される大規模な発掘調査が増加してきた。このような状況の下、現在までに多くのデータが蓄積され、おおむね遺跡の変遷を復元することも可能となってきた。以下に概略を述べたい。

現在、最古の例としては遺跡の北西部において溝状の落ち込みより縄紋時代晩期の滋賀里Ⅲ～Ⅳ式の土器がまとまって出土している<sup>①</sup>。また近年では双子下池から北へ20～30mの地点においてピットなどとともに突帯紋土器が比較的まとまって出土した<sup>②</sup>。中には線刻を有するものも含まれており、共に遺構ともなう資料として注目される。これらのことから考えると当該期の活動の中心は遺跡の北方に求めることができよう。

弥生時代では前期の遺物は散見されるものの遺構や遺物が爆発的に増加する中期と比べると内容ははっきりとはしない。前代と同様、遺跡の北部にその中心が求められる程度である。つづく中期には遺跡の南東部に明確な活動の中心が現れる。先述した大規模な道路部分の調査によって十数棟の竪穴住居や掘立柱建物からなる集落<sup>③</sup>や複数の木棺墓<sup>④</sup>なども確認されており、地域の拠点的な集落であったと考えられている。今後生産域などが発見されれば更に精密な復元が可能となるであろう。しかしこの集落も存続期間は限られていたようで、後期になると遺構や遺物は見いだされなくなる。男里遺跡から南東方向へ約2km離れた独立丘陵上に展開され、高地性集落とされる滑瀬遺跡などとの関連が注目される。

近年継続的に実施されている双子下池の堤体改修に伴う調査では多量の庄内式併行期から布留式期の遺物を含む流路が検出され、周辺に同時期の集落が展開されることが確実となった。

6世紀や7世紀代には遺跡の北西部を中心に遺構や遺物が見られるようになることから古墳時代を通じて遺跡の中央から北西方向が活動の範囲と捉えることができよう。双子池西側では奈良時代の掘立柱建物が検出されており<sup>⑤</sup>、また先の双子池の調査においてはやや下った飛鳥、奈良時代の流路も同時に検出されている<sup>⑥</sup>。昨年度は双子池から東北東へ約200mの地点から飛鳥時代の竪穴住居と掘立柱建物が隣接して検出された<sup>⑦</sup>。旧流路をはさんで両岸に集落が展開されていたとも考えられる。

平安時代には遺跡の北東部の比較的広範囲において複数の掘立柱建物や廃棄土坑などが確認されており<sup>⑧</sup>、活動範囲の拡大が窺える。

平安時代末期から中世にかけては遺構や遺物の分布が遺跡全域へと拡大する。特に生産域の拡大には目を見張るものがあり、大規模な耕地開発が行われたことが明白である。同時に現在も見られるような集落の集村化が始まり、生産域と集落との明確な区別化がはかられている。遺跡の西端に光平寺が建立されるのもこの時期であり、拡大する生産力に支えられた民衆の仏教への帰依の現れと捉えることができよう。

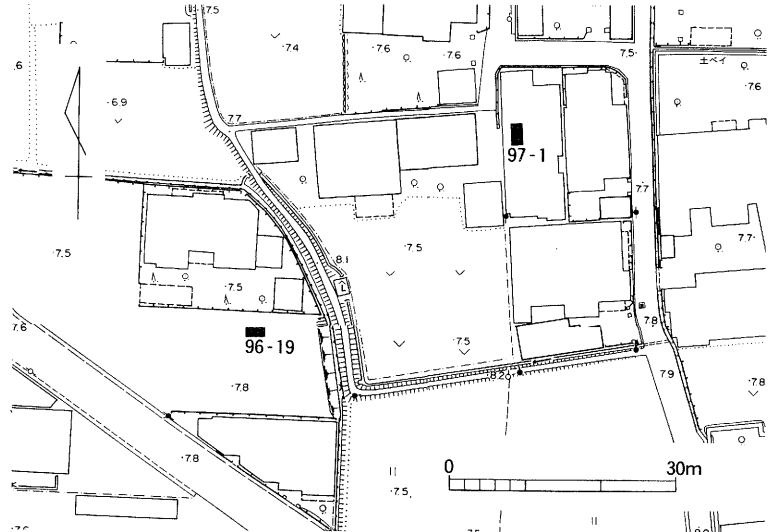
近世から近代には大きな変革は窺えないものの、本報文にもあるように製糖など当時の庶民生活の一端を知ることができる資料が増加してきている。



## 第2節 97-1区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第1図)

調査地は、府道堺阪南線「男里川」交差点から北側に約100mの地点で、現在の男里集落中心部にあたる。地形分類上には男里川の氾濫原に立地していると考えられる。調査地北側の隣接地では昨年度調査がおこなわれた96-4区が位置している。トレンチは1カ所を設定した。



第1図 男里遺跡97-1・96-19区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 4・15)

基本層序は、盛土 (約20cm・I層) を除くと、II層・灰白色砂質シルト (約5~20cm)、III層・褐色砂質シルト (約20cm)、IV層・灰褐色シルト (約10cm)、V層・茶褐色粘質土 (約10cm)、VI層・黒褐色粘土 (約40cm) VII層・褐色粘質シルト (約20cm) とつづき地山である褐色砂礫に至った。遺物はIV層より瓦器や瓦の小片が、VI層より庄内式併行期の遺物が出土している。

### 3. 遺構 (P.L. 4・15)

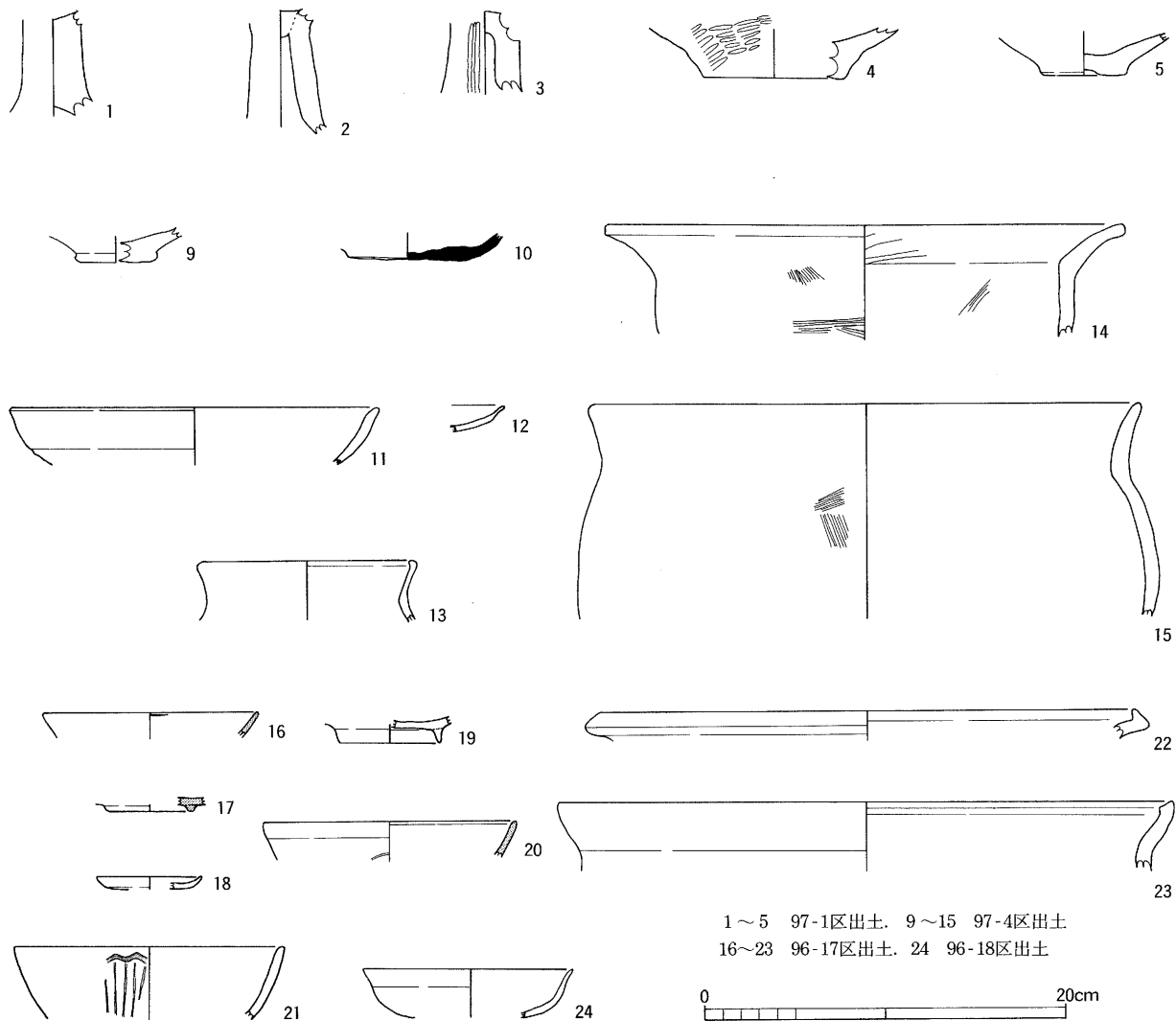
VII層上面で暗黒褐色粘質土の埋土をもつ溝 (S D01) を検出した。S D01はトレンチの大半が攪乱によって削平をうけているため、平面では東西方向の肩を確認したのみである。断面から判断すると幅約1m、深さ32cmを測り、断面は皿状を呈している。また、96-4区の調査で検出された遺構とほぼ同レベルで確認されたことや、埋土の状況から、その遺構と一連のものとの可能性がある。埋土からは庄内式併行期の遺物が出土しており、調査区周辺に当該期の集落の存在が推測される。

### 4. 遺物 (P.L. 33、第2図)

VI層とS D01から合わせてコンテナ約1箱の庄内式併行期を中心とする遺物が出土しているが、いずれも小片が多くまた、摩耗も激しい。

1~3は高坏の脚部である。1の柱状部は裾部から上部にかけて緩やかに立ち上がり、杯部との接合は粘土円板充填技法である。外面はヘラミガキが施されており、内面には絞り目がみられる。残存器高は6.5cmである。2は中実の柱状部を持ち、裾部から上部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。調整方法は摩耗のために不明である。残存器高は約5.4cmである。3の柱状部は裾部から上部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。外面にはヘラミガキが施されている。残存器高は4.1cmである。

4・5は甕の底部である。4は平底を呈し、外面にタキが施されている。復元底径は8.2cmである。5は中央に凹みを有している。調整方法は摩耗のために不明である。復元底径は4.5cmである。



第2図 男里遺跡97-1・4、96-17・18区出土の遺物

### 第3節 97-2区の調査

#### 1. 位置 (P.L. 3、第3図)

調査区は男里遺跡の北西部、現在の男里集落の北端付近に位置する。周辺の調査例では北東約50mの地点において、蛸壺などの中世の所産となる遺物が出土している<sup>⑩</sup>ほか、調査区の南側では室町期の土坑墓などが確認されている<sup>⑪</sup>。地形分類上では男里川の自然堤防上に立地している。

トレンチは1カ所設定した。



第3図 男里遺跡97-2区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・15)

約20cmの表土を除去すると、トレンチ南側に明黄褐色土が一部認められ、続いて褐色砂礫層が露呈する。当層上面において落ち込み (S X01) を検出した。また落ち込みの埋土から近世の瓦片や土師質土器が多量に出土した。

## 3. 遺構 (P L. 4・15)

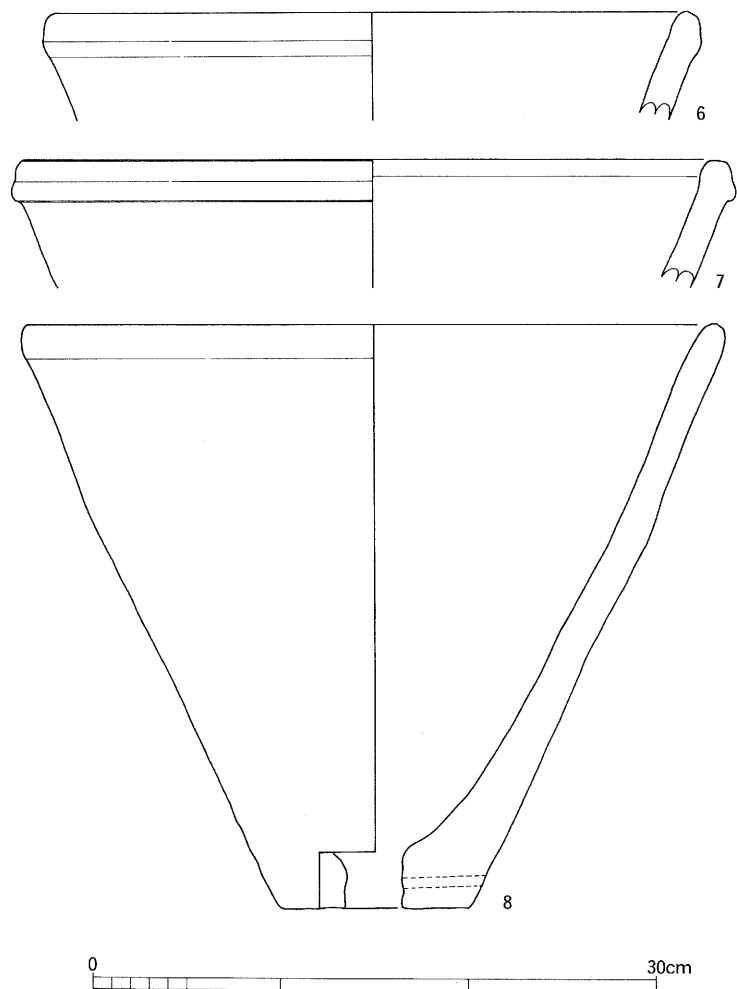
S X01はトレンチの南から北にむかって緩やかに落ちる肩をもち、深さ約50cmを測る。埋土は礫を多量に含んだ暗灰色土である。当遺構の性格であるが、表土直下で確認されたことや、出土した遺物が破片が大部分を占めることなどから1世代前の建物解体に伴う廃棄用として掘削された可能性が考えられる。

## 4. 遺物 (P L. 33、第4図)

S X01から土師質土器 (6～8) や瓦片が出土した。

8は復元口径36.6cm、器高31cm、底径10cmを測る。底部から上外方に直線的にのびる体部をもち、口縁端部は丸くおさめる。底部には径約10cm、体部の底部際から中央にむかって径5mmの孔を穿つ。内外面ともに橙色を呈し、胎土は1mm程度の砂粒を含む。

その他、口縁部が肥厚するもの (6)、肥厚しやや垂下するもの (7) がある。これらの土器は、市内では幡代遺跡で出土しており、その用途として、製糖の際に用いられた瓦漏と考えられる<sup>⑧</sup>。時期的には18世紀後半から19世紀前半の所産であろう。



第4図 男里遺跡97-2区出土の土器

## 第4節 97-3区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第5図)

今回の調査地は男里遺跡の北端部、現在の男里集落からやや北にはずれた地点に位置する。当地は周辺の過去の調査から旧河道と推測される地点に相当する。トレンチは1カ所設定した。



橙褐色シルトが全面に広がる。以下には第4層・橙色混じり灰褐色土と第5層・灰褐色土の2層をはさんで、旧耕作土である第6層・淡灰褐色土および第6層に伴う床土層である第7層・橙色混じり淡灰褐色土および第8層・淡灰褐色混じり橙褐色土の2層が認められる。続いて第9層・淡灰白色混じり明橙色シルト、第10層・暗黄褐色混じり灰褐色粘土の2層があり、旧耕作土である第11層・暗灰褐色粘土と床土である第12層・暗橙色混じり暗灰褐色粘土がある。以上の各層については出土遺物がなく、時期的には判然としないが既往の調査より第11層については中世の耕作面である可能性が高く、以降の土地利用には大きな変化はなかったようである。

続いて厚さ約5cmの第13層・暗褐色粘土をはさんで第14層・淡黒褐色粘土があり第15層・淡黒灰褐色砂質土へといたる。これらの各層は先述したように上位の層とは様相が異なっている。特に第15層が砂層でかつ、非常に多くの湧水があることから第13層以下については双子池より北側に伸びると考えられている旧流路の一部である可能性が高いものと思われる。当調査区では流路の肩部は確認されておらず、その規模は明らかではないが、埋土の状況からかなり大規模な流路であると考えられる。

調査では第11層以下の各層について精査を行ったが明確な遺構は確認されなかった。また第14層、第15層からは多くの遺物が出土した。

### 3. 遺物 (P.L. 34、第2図)

以下に図示した遺物はすべて第14・15層より出土したものである。出土した遺物は土師器を中心とするが、須恵器などもわずかに含まれている。

9は甕の底部である。復元底径4.2cmを測る。焼成は良好であるが、胎土には多量のクサリレキを含む。内外面ともに摩滅が激しく、調整等は不明である。橙色を呈し、一部に黒斑が認められる。10は須恵器杯の底部である。底径6.6cmを測る。底部はヘラ切り後、粗いナデによって仕上げている。また内外面ともにヨコナデを施す。また、外面には自然釉がかかる。焼成は良好で、灰白色を呈する。

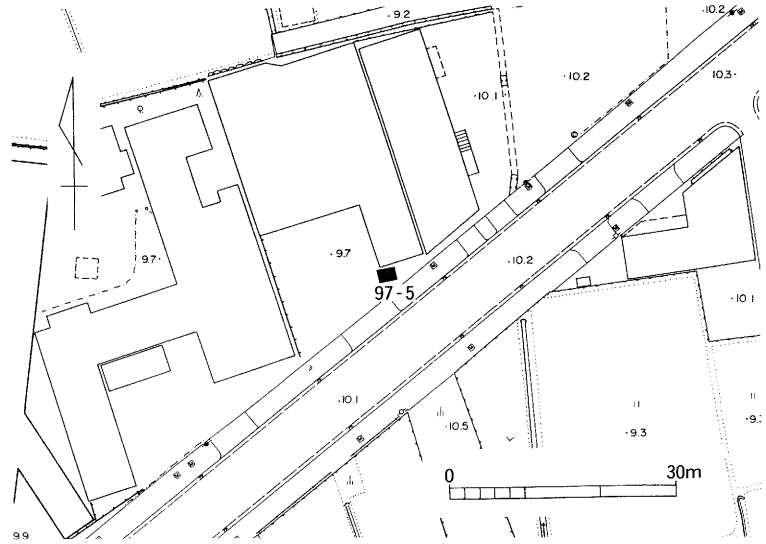
11～15は土師器である。11・12は皿である。11は復元口径20.1cmを測り、やや外反する口縁を持つものである。全体に摩滅が激しく細部の調整は判別できないが、内外面ともにヨコナデが施される。焼成は良好で、胎土にはわずかにクサリレキを含む。外面は橙色を呈し、内面は灰白色を呈する。12は外反する口縁部を持つ。全体に摩滅が著しいが、内外面ともにヨコナデが施される。焼成は良好であり、胎土にはクサリレキの他、径1mmの白色砂粒を含む。13は薄手の製品で製塩土器と考えられる。体部から緩やかに立ち上がる口縁を持ち、口縁端部は外傾する平坦面に仕上げられ、端部内面は突起する。復元口径11.4cmを測る。全体に摩滅が激しい。内外面ともにナデが施される。焼成は良好であり、胎土は粗く径0.5～1mmの砂粒やクサリレキを多く含む。淡赤橙色の製品である。

14は甕である。復元口径は28.6cmを測る。全体に摩滅が著しいが内外面ともにナデが施され、体部内外面、口縁内面には部分的にハケ目が残る。口縁端部は平坦に仕上げられ、肩部にはゆるい稜線が走る。焼成は良好で胎土には径0.1mm以下の白色砂粒を多量に含み、わずかにクサリレキも含まれる。褐灰色の製品。15は壺である。丸みを帯びた体部に緩やかに外反しながら開く口縁部を持ち、口縁端部は丸く収められている。復元口径は30.2cmを測る。全体に摩滅が激しいが、体部の一部にハケ目が残る。焼成は良好で、胎土には多くのクサリレキを含む。赤褐色の製品である。

## 第6節 97-5区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第7図)

調査地は遺跡の中央部やや北よりに位置し、府道堺阪南線に南接し、「双子池北」交差点より東側に約100m進んだ地点である。周辺では平成4年度に府道樽井男里線建設に伴う大規模な発掘調査が財団法人大阪府埋蔵文化財協会によって実施され、中世から近世にわたる複数の耕作面などが確認されている<sup>18)</sup>。地形的には氾濫原及び谷底低地に立地しているものと考えられている。トレンチは1カ所設定した。



第7図 男里遺跡97-5区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・16)

厚さ約70cmの盛土を除去すると現代の耕作土である灰色シルト(約15cm)および赤褐色混じり灰褐色土(現代の床土・約5cm)が認められる。つづいて暗灰黄褐色土(約15cm)と赤褐色混じり灰褐色土(約5cm)が水平に堆積しており、これらは旧耕作土および床土層と捉えることができる。さらにその下には暗灰褐色土(約15cm)があり、さらに古い時期の耕作土と捉えることができるものである。その下には暗褐色粘土(約25cm)が認められるが、この層は男里川の旧河道とされる双子池の北側を中心に広範囲に分布していることが確認されているものである。暗褐色粘土の直下には部分的に地山である暗黄褐色粘土が見える部分もあるがトレンチの東半には暗褐色混じり暗黄褐色土(約10cm)がある。これは上層の暗褐色粘土の浸透作用によって部分的に変質した地山層であろうと捉えられるもので、本質的には地山と変わらないものと思われる。確認された地山面はおおむね平坦で標高は8.40mを測る。

以上、現代を含めて異なる3時期の耕作面が確認されたが、いずれの面においても顕著な遺構は確認されず、地割りの方向などを確認することはできなかった。また遺物の出土も希薄であり、わずかに暗灰褐色土の下位より土師器が出土したが、いずれも細片であり詳細を明らかにできるものではなかった。

## 第7節 96-17区の調査

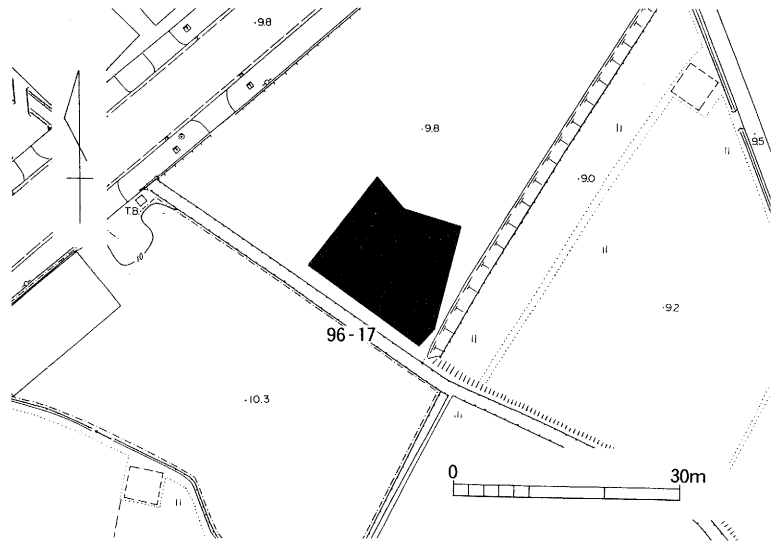
### 1. 位置 (P L. 3、第8図)

調査区は、府道堺阪南線と府道金熊寺男里線が交差する「双子池北」交差点から南西に約80mの地点に位置する。地形的には、男里川の沖積段丘面上に立地するものと考えられる。周辺は、近年かなりの調査が行なわれている。特に、南西約30mの95-2区における調査では、遺跡北部から東部に広く分布する黒褐色粘性シルト層の上面で平安時代の掘立柱建物を確認しており、本調査区にも当該期の集落の拡がり期待された。

## 2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 5・17)

80～150cmの盛土を除去すると、現代の滋味土（黒灰色シルト）が約15cm、また部分的であるが現代の床土（橙色シルト）が認められた。これらの下層には旧耕作土と考えられるにぶい黄褐色砂質シルト（約10cm）、灰褐色砂質シルト（約10cm）、にぶい黄褐色粘性シルト（約10cm）などが確認され、暗黄褐色粘性シルトの地山に至る。遺構は、すべて暗黄褐色粘性シルト層の上面で検出された。



第8図 男里遺跡96-17区地形図

またトレンチの西側部分には、にぶい黄褐色粘性シルト層の下層にさらにもう一層の旧耕作土（灰褐色粘性シルト・約10cm）が存在した。

一方、トレンチの南端の一部で、暗黄褐色粘性シルト層の上層に黒褐色粘性シルト層が約20cm認められた。断面の観察からこの黒褐色粘性シルト層は急激に落ち込み、暗黄褐色粘性シルトの上面まで削り込まれており、この後に旧耕作土が堆積している。このことから本調査区においては、旧耕作土層の形成以前に黒褐色粘性シルト層の大規模な削平が確認できるだろう。

遺物は、旧耕作土層から瓦器、中世の土師器、青磁、白磁などの他に、黒色土器片もわずかながら出土しており、当該期の遺構は検出されなかったものの、かつては95-2区で検出された集落が及んでいた可能性もある。

## 3. 遺構 (P.L. 5・17)

遺構は、溝やピットなどが検出された。

S D01は、調査区の中央南西よりを北東から南西に縦断する溝である。検出長約15m、幅10～50cm、深さ5～26cmを測り、断面は緩やかな逆台形を呈する。埋土は上層は灰黄褐色の粘性シルト、下層は砂質シルトである。遺物は瓦器片、中世の土師器片などが少量出土している。

一方、S D01北東側に平行して全長8～10m、幅50cm前後の溝が数条検出されている。埋土は灰褐色砂質シルトまたはにぶい褐色砂質シルトで、断面はいずれも緩やかな凹面形を呈し、いずれも鋤溝と考えられる。また、トレンチ北部ではこれらの鋤溝の間に全長0.5～1.8m、幅10～30cm、深さ5cm前後の小規模な鋤溝も検出されている。遺物は、瓦器片や中世の土師器片が出土しているが、図化できたのはS D02から出土したもの（16・17）だけである。

ピットは、南西部でいくつか検出されている。いずれも径20cm前後の円形または楕円形を呈し、深さは10cm前後と浅いものばかりである。いずれも掘立柱建物としては確認することができなかった。遺物は出土しなかった。

この他、トレンチ南部に鋤溝に切られる形で径約30～50cm、深さ約50cm前後の不整形の土坑が数基検出されている。埋土はいずれも褐色シルトで、下層は灰色の粗砂となる。いずれも遺構の内部は凹凸

が著しく柱穴とは考えられず、植物痕である可能性が高い。遺物は、瓦器片や中世の土師器片が出土しているが、図化できたのはS X01から出土したもの（18）だけである。

#### 4. 遺物（P L. 34、第2図）

16・17は、S D02から出土した瓦器碗である。

16は、「ハ」の字にやや大きく開く口縁部でヨコナデによって仕上げられ、口縁端部にはわずかにヘラミガキが認められる。17は、底部である。かなりしっかりとした高台部分を持ち、断面は逆台形を呈している。

18は、S X01から出土した土師器の皿である。平らな底部から口縁部に向かってやや屈曲する。口縁部はヨコナデによって仕上げられる。雲母をわずかに含み褐色を呈する。

19～23は旧耕作土からの出土である。

19は、黒色土器の底部である。全体に摩滅が著しいが、内面だけが黒色化するA類である。ほぼまっすぐに立ち上がる高台で先端部はやや尖り気味である。

20は、瓦器碗である。「ハ」の字に開く口縁部で、ヨコナデによって仕上げられる。外面にはわずかにヘラミガキが施される。

21は、青磁碗である。ヘラ状の工具によって蓮弁文が描かれる。釉は緑灰色を呈する。

22・23は、紀州系の土師器の甕である。22は幅の狭い口縁部で、体部から強く外側へ屈曲するものと考えられる。端部は大きく上方につまみあげられ、外面は平端をなしている。23は幅の広い口縁部で、22よりはやや緩やかに立ち上がる、端部はわずかにつまみあげられている。いずれも砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。

### 第8節 96-18区の調査

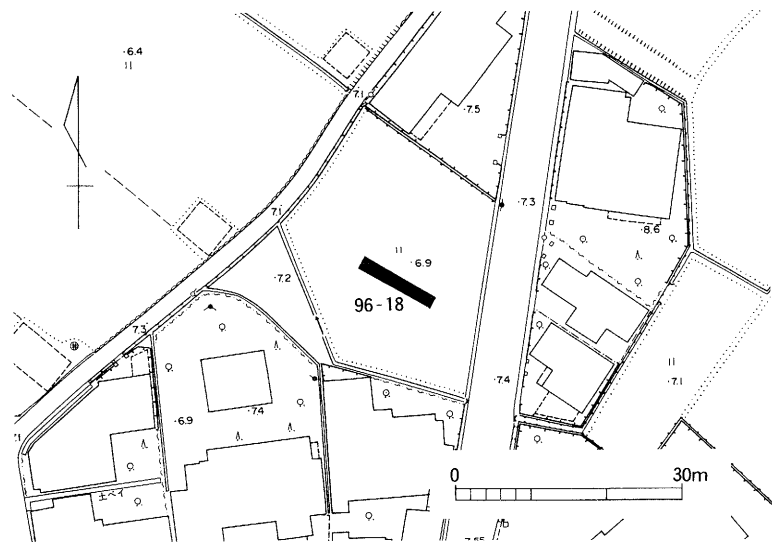
#### 1. 位置（P L. 3、第9図）

調査区は、遺跡の中央部北縁に位置し、地形分類上には男里川によって形成された氾濫原上に立地している。隣接地の調査では明確な遺構は検出されていないが、多くの弥生土器が出土している<sup>⑩</sup>。

#### 2. 層位と遺物の出土状況

（P L. 4・18）

基本層序は、滋味土を除くと、約30cmにわたり、にぶい茶褐色シルト、にぶい灰褐色シルトなどの旧耕作土がほぼ水平に堆積しており、その直下に床土層であるにぶい黄褐色シルト（約10cm）、灰色粘土（約35cm）とつづき地山である茶褐色礫混じりシルトに至る。遺物はにぶい黄褐色シルト層で瓦器皿の小片（24）が出土した。



第9図 男里遺跡96-18区地形図



### 3. 遺構 (P L. 4・18)

地山上面で落ち込み状の遺構 (S X01) を検出した。

S X01はトレンチの東端から約4 mの地点で検出された。埋土は上層から黄褐色粘質シルト (約10cm)、褐色粘質シルト (約10cm)、淡い褐色粘質シルト (約10cm) 黒褐色粘質土 (約10cm)、灰褐色粘土 (約10 cm) がほぼ水平に堆積する。遺物は黄褐色粘質シルトより土師器、褐色粘質シルトと青灰色粘土層で弥生土器の小片が出土しているが図化はできなかった。この遺構の性格は、周辺の地形が調査区の西側において約1 mほど低くなっていることや、90-12区の調査において、この遺構の埋土と同様な地層がかなりの厚さで確認されていることなどから、自然地形の一部と考えられる。

### 4. 遺物 (第2図)

図化できた遺物は瓦器皿 (24) 1点のみである。口縁部にヨコナデを施し、口縁端部は丸くおさめる。全体の色調は灰白色を呈している。復元口径は11.6cmを測る。

## 第9節 96-19区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第1図)

調査区は府道堺阪南線「男里川」交差点から北東に約50mほど入った地点で、現在の男里集落の中央部にあたる。地形分類上では男里川によって形成された氾濫原にあたると思われる。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・18)

層位は約30cmの盛土を除くと、構造物の基礎が露呈し、その直下にI層・旧盛土が約30cmほど認められ、II層・灰色粘質土 (約20cm)、III層・灰色混じり褐色シルト (約1 m)、IV層・褐色砂層 (地山) とつづく。遺構・遺物は認められなかった。

- 註 ① 泉南市教育委員会「男里遺跡・II」『泉南市文化財年報No.1』(1995)  
② 泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)  
泉南市教育委員会「男里遺跡96-6・7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)  
③ 1994年度(財)大阪府埋蔵文化財協会、1995年度(財)大阪府文化財調査研究センターの調査による。  
④ 泉南市史編纂委員会「第2章 古代の泉南」『泉南市史一通史編一』(1987)  
⑤ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・I』(1997)  
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・II』(1997)  
⑥ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1987)  
⑦ ⑤と同じ。  
⑧ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)  
⑨ (財)大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1993)  
⑩ 泉南市教育委員会「男里遺跡90-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』(1988)  
⑪ 泉南市教育委員会「男里遺跡第1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』(1988)  
⑫ 泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)  
⑬ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-8区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1997)  
⑭ ⑤と同じ。  
⑮ ⑨と同じ。  
⑯ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)  
⑰ 泉南市教育委員会「男里遺跡90-12区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)

### 第3章 光平寺跡の調査

#### 第1節 既往の調査（P.L. 1～3）

市域の西部を流れる金熊寺川は、その下流で阪南市の東部を流れる菟砥川と合流し川幅を拡げる。ここから河川の名称が変わり、大阪湾までの約2kmの範囲が男里川と呼ばれている。光平寺跡はちょうどこの河川合流地点の右岸に位置し、地形的分類上ではこれらが形成した自然堤防上に立地している。現在の光平寺境内には、大阪府の重要有形文化財に指定されている正平24（1369）年の銘をもつ石製五輪塔が所在している<sup>①</sup>。

当遺跡の調査は、1977年に大阪府教育委員会がおこなったものがあり、この調査では平安時代後期を中心とする瓦群が検出されている。特にこの瓦群より出土した仏像紋軒丸瓦は府下最南端の出土例として注目される。当該期は泉南市域で寺院が急増する時期にあたり、光平寺跡もそのひとつであると考えられるが、遺跡の範囲が長径約250m、短径約200mと絶対面積が小さいためか、調査がさほどおこなわれていなかった。

しかし、数少ない調査でも、中世を中心とした遺構が検出されており<sup>②</sup>、特に、94年度には中世以降の火災に伴う整地層や中世の瓦や焼土塊を多量に含む土坑が確認されている。このように光平寺跡ではわずかではあるが、その内容が明らかになりつつある。

#### 第2節 96-1区の調査

##### 1. 位置（P.L. 3、第10図）

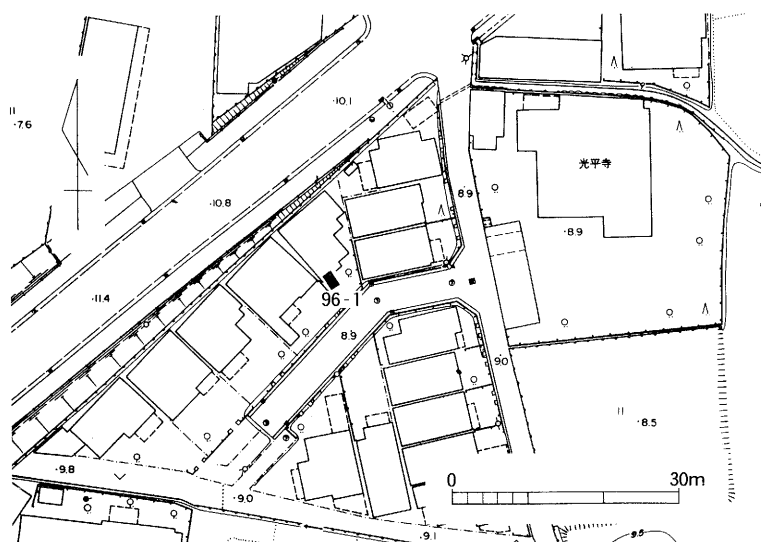
調査区は現在の光平寺の西側約30m、府道堺阪南線に面した場所に位置している。地形分類上、自然堤防上に立地している。トレンチは1カ所設定した。

##### 2. 層位と遺物の出土状況

（P.L. 10・18）

約60cmの盛土（I層）を除くと、II層・黒色粘質シルト（約20cm）、III層・黒灰色粘質シルト（約10cm）、IV層・茶褐色粘質シルト（約10cm）、V層・茶褐色礫混じりシルト（地山）とつづいた。

各層上面で遺構検出を行ったが遺構の検出にはいたらなかった。また、遺物はIII層より瓦質土器、土師質土器の小片が出土しているが、図化し得るものではなかった。



第10図 光平寺跡96-1区地形図

註 ① 泉南市史編纂委員会「考古・古代 第2章 古代の泉南」『泉南市史—通史編—』（1987）  
② 泉南市教育委員会「光平寺跡93-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XI』（1994）  
③ 泉南市教育委員会「光平寺跡94-1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）

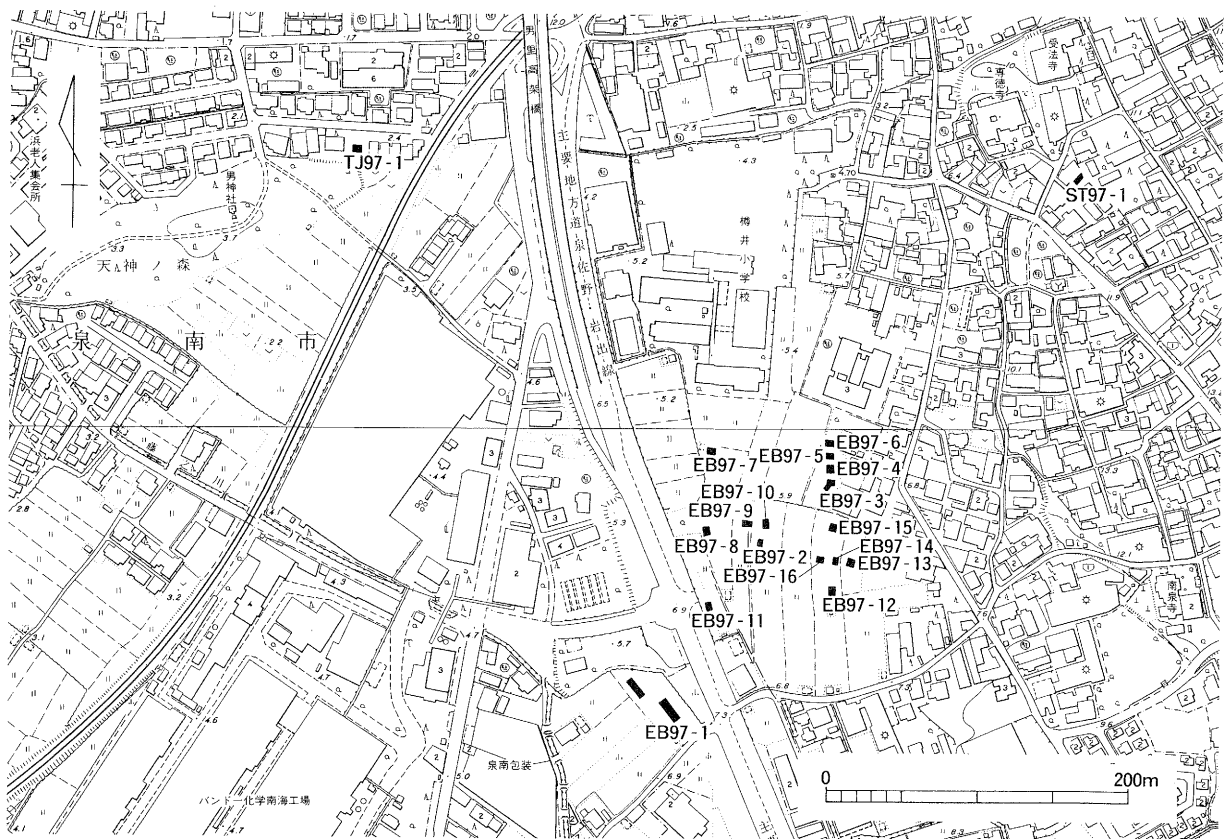
## 第4章 戎畑遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（PL. 1・2、第11図）

戎畑遺跡は市域の西端を流れる男里川の右岸にあり、男里遺跡の北方約100mに位置している。その範囲は長軸を北西方向に向けた楕円形を呈しており、長軸約300m、短軸約200mを測るものである。現行の行政区画では遺跡の大半が樽井に属しているが、一部男里に属している部分もある。地形分類上はほとんどが氾濫原および谷底低地に含まれており、また一部が丘陵裾部より舌状に伸びる沖積段丘や旧河道上に立地しているものと考えられている。

戎畑遺跡は平成元年に分布調査によって発見され、中世を中心とする遺物散布地として周知された遺跡である。しかし大半が耕作地であったこともありそれ以降顕著な調査は実施されておらず、その具体的な内容は不明と言わざるを得なかった。ところが近年、遺跡の南半部において総面積2ha以上にもおよぶ土地区画整理の計画が持ち上がり、本市教育委員会では平成6年度より対象地全域において試掘調査を実施し、続く平成7年度より8年度にかけてその一部について発掘調査（95-1区）をおこない、遺跡の内容究明に大きな成果をおさめることができた<sup>①</sup>。以下、その結果を中心に述べていきたい。

戎畑遺跡では現在のところ平安時代以前の明確な遺構や遺物は確認されておらず、古代以前の人類の活動は希薄であったようである。ところが平安時代の半ば以降には遺跡の西部において南南西から北北西方向に一直線に伸びる大溝が現われ、大規模な灌漑用水路であると考えられている。周辺では同時期の顕著な遺構は確認されなかったが、本報文にも掲載されているとおり、主幹水路に取りつく支流と捉



第11図 戎畑遺跡・天神ノ森遺跡・専徳寺遺跡調査区位置図

えられる溝（97-1区）が確認されていることから、周辺の段丘開発の開始時期をこの時期に求めることができよう。また大溝の南端より約200m南側の男里遺跡の調査では10世紀後半に属する複数の掘立柱建物が確認されている。

やや下って12世紀以降には遺跡の南部を中心として多くの掘立柱建物群や土坑墓群が形成されている。掘立柱建物には小規模なものが多いが、桁行が5間や6間になるものもある。また土坑墓には瓦器椀などを伴うもののほか、和鏡や灰釉陶器が出土するものもあり、集落内での身分差を示すものと考えられる。また埋葬に関する遺構として泉州地域では2例目となる特殊な構造を持つ火葬施設も確認されており注目される。これらの集落に関する遺構はおおむね12世紀後半から15世紀代に属しており、その期間はほぼ継続して人々が活動していたものと考えられる。

そのほか特筆される成果として、20基にもおよぶ真蛸壺の焼成坑や窯が確認されたことが挙げられよう。そのほとんどが「野焼き」用の施設と捉えられるものであるが、中にはいわゆるロストルを有するタイプのものも含まれており、蛸壺の焼成といえども、その焼成技術には多様な内容があったことを物語る貴重な資料である。

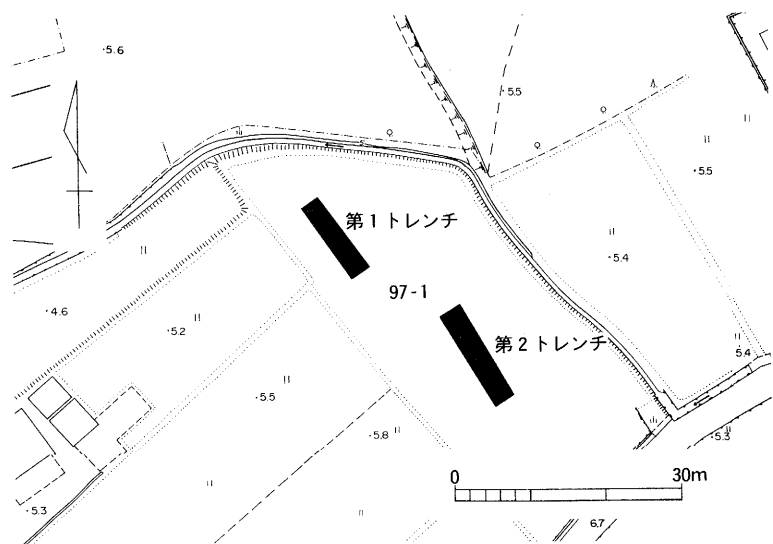
また昨年度の報告にあるように戎畑遺跡の南東約400mに所在する樽井南遺跡においても戎畑遺跡と同様の土器焼成坑が確認されていることや、遺跡の西縁を通る府道樽井男里線に伴う試掘調査でも焼土坑などが報告されていることから、同様の生産体系は周囲にも拡がりを見せるものであったと考えられ、蛸壺生産や漁業を生業としていた集落の実態が明らかに成りつつある。

以上、戎畑遺跡においては実に多くの情報が得られることとなったが、今後は各時期の集落の消長やそれぞれの範囲の確定、また集落における大量の真蛸壺の生産方法の復元、帰属先の究明などが課題となろう。

## 第2節 97-1区の調査

### 1. 位置（第11・12図）

調査区は95-1区から府道泉佐野岩出線をはさんだ西側に位置している。当調査区周辺は遺跡外であったが、試掘調査をおこなった結果、遺構・遺物が確認されたことによって、遺跡の範囲が拡大され、本調査がおこなわれることとなった。調査地の現況は休耕田となっており、周辺は海岸線にむかって北西方向に緩やかにレベルを下げている。トレンチは2カ所を設定した。



第12図 戎畑遺跡97-1区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 6・19）

第1トレンチの層序は第1層・耕作土（約10cm）、第2層・明黄褐色土（約10cm）、第3層・褐色土

(約10cm)、第4層・暗黄褐色土(約5cm)、第5層・明褐色土(約5cm)、第6層・明黄褐色混じり黒褐色土(約20cm)、第7層・黒褐色混じり黄褐色土(約20cm)、第8層が黒褐色混じり暗黄褐色土の地山である。第5層から少量の土師質土器の細片が出土している。

第2トレンチの層序は第1層・耕作土(約10cm)、第2層・暗黄褐色土(約20cm)、第3層・暗褐色土(約5cm)、第4層・灰色混じり黒褐色粘質土(約30cm)、第5層が黒褐色粘質土(約20cm)、第6層が拳大～親指大の礫混じり暗黄褐色土の地山である。各層からの遺物の出土はなかった。

### 3. 遺構 (P.L. 6・19)

第1トレンチでは第6層上面で東西方向に延びる溝2条(SD01・02)とピット1基を検出した。SD01は幅約60cm、深さ約50cm、SD02は幅約70cm、深さ約10cmを測り、埋土はそれぞれ黒褐色粘質土で、SD02では拳大程度の礫を含んでいる。遺物の出土はない。

第2トレンチでは第4層上面で掘立柱建物(SB01)が1棟と溝1条(SD03)、その他土坑などを確認した。

SB01の柱間は東西方向1.3m、南北方向1.8mを測り、柱筋はほぼ北を示す。各ピットの平面は円形を呈し、径約30cm、深さ10～15cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

SD03は東西方向に延び、幅約1m、深さ50cmを測る。断面はU字状を呈し、埋土は黒褐色粘質土である。遺物の出土はない。

各遺構の形成時期は、遺物の出土が認められないため不明な点が多いが、SD01～03は95-1区の調査において検出された大溝を本流とした灌漑水路の支流の一部である可能性が考えられる。

## 第3節 97-2区の調査

### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は遺跡のほぼ中央部に位置し、今年度の調査では北西約15mに97-9区、北約10mに97-10区が位置している。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 7・19)

層位は約1.2mの盛土の下に、第2層・暗褐色ブロック混じり灰色土が約10cm、第3層・黒褐色粘質土が約30cm堆積し、第4層の暗黄褐色粘質土の地山へ至る。地山面の標高は7.3m前後である。遺構・遺物は全く確認できなかった。

## 第4節 97-3区の調査

### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は遺跡の東部にあり、土地区画整理事業によって整備された南北道路の東側に面している。なお97-3～6区まではそれぞれ南北に隣接している。土地区画整理に伴う発掘調査のうち、今回の調査区に隣接する部分では中世を中心とする多くの遺構が確認されており、掘立柱建物のほか複数の土坑墓、



第13図 戎畑遺跡97-2～16区地形図

また真蛸壺を焼成したと考えられる土坑などが確認されている。

地形的には先の調査により沖積段丘面上に立地しているものと考えられる。トレンチは1カ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 7・20)

調査区全体に約60cmの厚さで施された盛土を除去すると、調査区の北側では現代の床土である暗褐色混じり淡灰褐色土(約10cm)があるが、それ以外の部分では旧耕作土である暗褐色混じり淡灰褐色砂質土(約30cm)が拡がっており、基本的に現代の耕作土およびそれに伴う床土は除去されている。旧耕作土の下には暗黒褐色粘質土(約20～40cm)が堆積しているが、その上面は耕作に伴う攪乱が著しく、旧耕作土や攪乱層と考えられる淡灰黄褐色混じり暗褐色土などによる凹凸が非常に多く見られる。

暗黒褐色粘質土の直下には基本的に地山である暗黄褐色土が拡がるが、部分的には地山との間に暗灰黄褐色土や暗黄褐色混じり暗褐色土が存在する箇所もある。これらの層は地山層の変質によるものと捉えられ、本質的には地山と同等であると考えても差し支えは無いだろう。

これらのうち、地山面において遺構が確認された。地山面の標高は6.4mを測る。

### 3. 遺構 (P.L. 7・20)

確認された遺構は、土器焼成坑2基 (S K01・02)、溝1条 (S D01)のほか、多くの小穴や植物痕などである。

S K01はトレンチの東部において確認されたもので、一部がトレンチ外へと伸びる。ここでは遺構確認面がほとんどそのまま土坑の床面となっており、赤く酸化していることによってようやく判別されたものである。上層から切りこまれている可能性が高いが、断面観察では一様な堆積状況を示しており断定できない。このため土坑の側壁の立ち上がりなどはほとんど分からないが、確認時の酸化範囲が直径約2.4mのいびつな円形を呈し、その規模は既往の調査によって確認されている例と比較しても通有のサイズと考えられることから、土器焼成坑と考えるにいたったものである。また部分的に残る覆土は上層の暗黒褐色砂質土であるが、その中から床面から数センチ浮いた形で土師質の真蛸壺が出土しているので、ここでは真蛸壺を焼成していた可能性が非常に高い。床面は多くの小穴や植物痕などによって少し破壊されているが、それ以外の部分については一様に酸化し、赤化している。また床面の断ち割りによると、赤化している床面の厚さは確認面より5cm程の厚さで、また床面は地山が直接酸化変色しており、粘土などを張った痕跡はみられなかった。

S K02はトレンチの南西隅部において一部が確認されたため、トレンチを拡張して全体を確認したものである。平面形状は長軸を南北に向けたいびつな円形を呈し、長径2.1m、短径1.8m、上面からの深さ10～15cmを測る。断面形状は浅い碗形を呈し、埋土は基本的には上下2層に分けられる。上層は黄褐色粒を多く含む暗褐色粘質土で、下層は暗褐色混じり暗灰褐色砂質土である。

S K02では遺構検出時より土坑の周縁が部分的に赤く酸化しており、またその内側に幅数センチにわたって木炭が認められる箇所もあった。また覆土内や、床面直上または木炭の上にスサを含んだ粘土塊が少なからず含まれていた。粘土塊は非常にもろく軟弱な焼成ではあったが、施設の一部を構成していた窯体であるとも考えられる。ただしすべてが内部に落ち込んだ状態での確認であったため、具体的な構造の復元は困難であるといわざるを得ない。

ここで戎畑遺跡の既往の調査に目を向けると、確認された土器焼成坑のほとんどは素掘りの土坑であって、覆土にも今回のように窯体と思われるものを含むものは確認されていない。このことからS K02の構造は非常に興味深いものがある。

床面の状況は土坑の中心から外側に向かって斑点状に赤く酸化した部分が認められるが、S K01のように床一面が一様に赤化するという状況ではない。また酸化範囲とほぼ重なるように木炭が確認された。また土坑は地山面をそのまま床面としており、床面の中心から少し西寄りには径15cmほどの自然石が2つ置かれていた。これらの石は火中して赤黒く焼けており、焼き台や窯道具として用いられたものかもしれない。

遺物の出土量は多くないが、覆土より黒色土器が比較的まとまって出土している。それに対して真蛸壺は1点も出土しておらず、真蛸壺の焼成を肯定する資料には乏しいものであった。

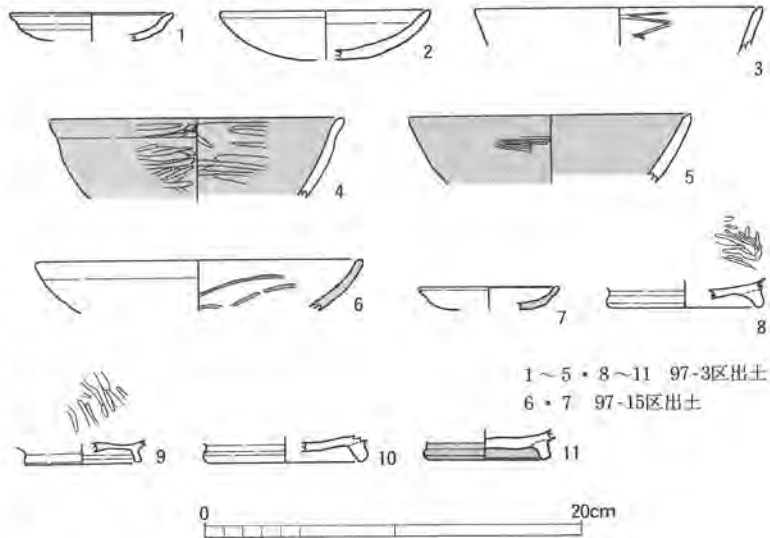
土器焼成坑以外の遺構ではほぼ東西方向に伸びる溝 (S D01) が確認された。S D01は両端がトレンチ外に伸びるため全長は不明であるが検出長5.2m、幅40cm、深さ10～15cmを測る。覆土は1層で暗褐色粘質土であり、遺物は出土しなかった。溝はS K01およびS K02にそれぞれ切られており、特にS K02の範囲においてはその痕跡すら残っていなかった。

その他、植物痕と考えられる不定形の土坑や上層からの杭穴と考えられる多くの小穴が確認された。

#### 4. 遺物 (P L. 35、第14図)

S K02から比較的まとまって土師器、黒色土器が出土した。図示したものうち1・2は土師器、3・8～10は黒色土器A類、4・5・11は黒色土器B類である。

1は皿である。復元口径8.4cmを測る。底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部ではやや強く「く」字状に屈曲するものである。底部には圧痕が残り、底部から口縁部まではヨコナデが施される。口縁端部には緩い稜線が巡る。焼成は良好であり、赤褐色を呈する。2は杯である。復元



第14図 戒畑遺跡97-3・15区出土の土器

口径11.2cmを測る。底部よりやや内湾ぎみに立ち上がる器壁を持ち、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに底部には圧痕が残り、また体部から口縁部にかけてはヨコナデが施される。全体に風化しており、詳細は不明である。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。

3は杯である。復元口径10.2cmを測る。口縁部以外を欠くが、ほぼ直線的に立ち上がるものである。内外面ともにヨコナデが施され、内面にはミガキを加える。焼成は良好であるが、外面が明橙褐色、内面が一部うすい灰褐色を呈しており、黒色土器でも炭素の吸着の弱いものである。4・5は黒色土器B類の杯である。4は復元口径15.4cmを測る。直線的に立ち上がり、口縁端部がやや外反するものである。内外面ともにヨコナデの後、丁寧なミガキが施される。焼成は良好で、胎土には0.1mm以下の白色砂粒を多く含む。内外面ともに黒色を呈する。5は復元口径14.8cmを測るもので、胴部からやや内湾しながら直線的に立ち上がる口縁を持つものである。全体に風化しているが、内外面ともにヨコナデが施され、外面にはミガキが施されている。焼成は良好で、0.1～2mmの白色砂粒を多く含む。8～10は杯の底部である。8・9は断面がやや尖り気味の高台を持つもので外面はヨコナデ、内面にはミガキが施されており、内面には炭素が吸着されている。10は断面が長方形に近い高台を持つもので、外面には粗いヨコナデが施され、また内面にはわずかにミガキの痕跡が残る。全体に器壁が厚く、かつ炭素の吸着が見込み部にまで及んでいないので、土師器である可能性もある。11は高台付きの底部である。断面は長方形に近く、内外面共に粗いヨコナデが施されるが、高台の内部については未調整である。

### 第5節 97-4区の調査

#### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は遺跡の東部にあり、97-3区からは約5m北側に位置している。トレンチは1カ所設定した。



## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 7・20)

基本的な層序は97-3区と共通している。盛土を除去すると、トレンチの北東から南側にかけては現代の床土層である橙色混じり灰白色土(約20cm)がみられるが、そのほかの部分については旧耕作土である淡灰褐色砂質土(約20~30cm)が広がっており、基本的に現代の耕作土及び床土層は除去されている。旧耕作土の下には暗黒褐色粘質土(約20~30cm)が堆積しているが、その上面は耕作に伴う攪乱が著しく、旧耕作土や耕作に伴う攪乱層と考えられる暗褐色混じり淡灰褐色砂質土などによる凹凸が非常に多くみられる。

暗黒褐色粘質土の直下には淡灰黄褐色土(約10cm)が若干の起伏を伴って堆積している。この層は先の97-3区と同様に地山の変質によるものと捉えられるものである。その下には地山である暗黄褐色土が広がる。

これらのうち地山面においてのみ遺構が確認された。標高は6.5~6.6mを測る。また暗褐色混じり淡灰褐色砂質土および暗黒褐色粘質土より遺物が出土したが、いずれも細片のため詳細は明らかでない。

## 3. 遺構 (P L. 7・20)

確認された遺構は植物痕と思われる不定形の溝や、上層からの杭穴と考えられる多くの小穴である。いずれも覆土は上層である淡黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

当調査区においては顕著な遺構が確認されなかったことで、当調査区における土地利用は余り積極的でなかったと考えられる。

## 第6節 97-5区の調査

### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は遺跡の東部にあり、97-4区から約5m北側に位置している。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 7・21)

盛土を除去すると、基本的に旧耕作土である暗褐色混じり暗灰褐色土(約20cm)がある。つづいて暗黒褐色シルトおよび暗黒褐色砂質土(約20cm)が全面に広がっているが、隣接する他の調査区と同様にその上面には耕作による凹凸が多くみられる。特にトレンチの北端部においては幅1.6mにわたって攪乱を受けている。暗黒褐色系土の下には基本的に地山である暗黄褐色土が広がっているが、間に淡灰黄褐色土をはさむところもある。

このうち地山上面において遺構が確認された。上面の標高は6.6~6.7mを測る。またいずれの層からも遺物は出土しなかった。

### 3. 遺構 (P L. 7・21)

確認された遺構は97-4区などと同じような状況であり、植物痕と思われる土坑や溝、上層からの杭穴と考えられる多くの小穴などである。いずれも覆土は上層である淡灰黄褐色土または暗黒褐色系土である。遺物は出土しなかった。

## 第7節 97-6区の調査

### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は遺跡の東部にあり、今年度の当遺跡の調査において最も北側に位置する。トレンチの位置関係では97-5区から約5m北側に位置している。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 8・21)

盛土を除去すると、基本的に旧耕作土である淡灰褐色砂質土(約15cm)が広がっているが一部に現代の耕作土や旧耕作土に伴う攪乱層が見られるところもある。つづいてトレンチの南半部においては先述の攪乱層である暗褐色ブロック混じり淡灰褐色砂質土(約20cm)が広がっている。またトレンチ北側では一部に暗黒褐色シルトが露呈している。攪乱層の下には暗黒褐色シルト(約10~20cm)があるが、当調査区においては旧耕作に伴う攪乱が面的に行なわれているため上面の凹凸は割と小さい。つづく暗黄褐色土の地山面は東から西方向へ向かって若干の起伏を持ちながら緩やかに傾斜している。上面の標高は6.5~6.7mを測る。またトレンチの南半部では地山直上に淡灰黄褐色土(約10cm)が広がっている。

これらのうち地山面において遺構が確認された。またいずれの層からも遺物は出土しなかった。

### 3. 遺構 (P.L. 8・21)

確認された遺構はほとんどが植物痕と思われる土坑や溝、上層からの杭穴と考えられる多くの小穴などであるが、トレンチの中央部においては土坑が1基(S K01)検出された。

S K01は南南西方向に先端を向けた卵形を呈しており、長径約90cm、短径約60cm、上面からの深さ約10cmを測る。断面形状は口の開いた皿形を呈している。覆土は1層で黄褐色ブロックを多く含む暗褐色土である。覆土より瓦器碗が数点出土したが、いずれも細片のため図化し得なかった。

## 第8節 97-7区の調査

### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は遺跡の北西部に位置し、今年度の当遺跡における調査では最も北西側の調査区である。トレンチの位置関係では97-5区から西へ80mの地点に位置している。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 8・21)

約1mの盛土を除くと、滋味土・床土等はすでに失われており、ごく一部で、暗黒褐色粘質土と暗褐色粘質シルトが認められ、地山である暗黄褐色粘質土が露呈する。遺物は暗黒褐色粘質土より瓦器碗などの細片が数点出土しているが、図化し得るものではなかった。

### 3. 遺構 (P.L. 8・21)

地山面で、土坑(S K01)とピット群を検出した。

S K01はトレンチの西側で検出された。大半がトレンチ外に広がるため全形は不明であるが、平面は

不整形で、埋土は黒褐色土である。深さ6cmを測り、断面は皿状を呈している。植物痕であろうか。

ピット群はいずれも平面形は円形を呈し、径は5～20cmで、埋土は黒褐色土である。遺構からは遺物の出土はなかった。

## 第9節 97-8区の調査

### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は遺跡の西部、府道泉佐野岩出線「浜ノ宮口」の交差点より、北西約20mに位置し、95-1区において大型掘立柱建物や大溝が検出された地点の西側に隣接している。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 8・22)

約1mの盛土を除くと、灰褐色砂質シルト(約30cm)、暗褐灰色粘質シルト(約5cm)、暗黒褐色粘質土(約40cm)、地山である暗黄褐色粘質土とつづく。遺物は出土しなかったが暗黒褐色粘質土は周辺と同様に中世の包含層と考えられる。

### 3. 遺構 (P.L. 8・22)

地山面で、溝(SD01)を検出した。

SD01はトレンチの東側で検出したが大部分がトレンチ外に広がる。南北方向に主軸をもち、検出した規模は幅15～50cm、深さ約50cmを測り、ゆるやかに東方向に落ちている。埋土は暗黒褐色粘質土であるが、底部には礫が多く含まれていた。遺物は出土しなかった。

SD01の性格であるが、95-1区で検出された大溝と方向や埋土が共通することから大溝の延長部分の可能性が高い。

## 第10節 97-9区の調査

### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は、遺跡のほぼ中央部に位置し、今年度の調査におけるトレンチの位置関係では97-8区の東約30mの地点にあたる。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 8・22)

約1mの盛土を除くと、黒灰色粘質土(約5cm)、明褐色砂質シルト(約5cm)などの現代の耕作土、灰色混じり橙色シルト(約5cm)、灰褐色砂質シルト(約5cm)などの旧耕作土が堆積しており、褐色粒を多く含む灰褐色シルト(約10cm)、遺物は含んでいなかったが中世の包含層と考えられる暗褐灰色粘質シルト(約10cm)、暗黒褐色粘質土(約30cm)とつづき、暗黄褐色粘質土の地山に至る。

### 3. 遺構 (P.L. 8・22)

地山面で、トレンチの西側を中心に黒褐色粘質土の埋土のピット群を検出した。各ピットの直径は2

～4 cmで、平面は円形や楕円形を呈し、深さは2～3 cmと浅い。埋土からの遺物の出土は認められなかった。

## 第11節 97-10区の調査

### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は、遺跡の中央部に位置し、今年度の調査におけるトレンチの位置関係では97-2区の北約30 mの地点にあたる。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 8・22)

基本層位は約1 mの盛土を除くと、黒灰色粘質土(約10 cm)、灰色砂質シルト(約5 cm)などの現代の耕作土がつづき、灰褐色粘質シルト(約10 cm)、褐灰色粘質シルト(約10 cm)などの旧耕作土が確認される。さらに下層には、にぶい褐色粘質シルト(約10 cm)、暗黒褐色粘質シルト(約20 cm)とつづき、地山である暗黄褐色粘質土に至る。遺物はいずれの層からも出土しなかった。

### 3. 遺構 (P L. 8・22)

地山面で、土坑を2基(S K01・02)と柱痕を有するピット(Pit01)を含むピット群を検出した。

S K01はトレンチ外に全体をのぼすため全形は不明であるが、検出長は長軸約60 cm、短軸約40 cm、深さは約10 cmを測る。S K02はトレンチの中央部で検出され、平面は長径約50 cm、短径約30 cmの楕円形で、深さは約15 cmを測る。埋土はS K01・02ともに黒褐色土である。遺物は検出されなかった。

Pit01は直径約20 cmの円形で、ほぼ中央に直径約10 cmの柱痕が確認された。深さは約10 cmを測る。掘方の埋土は暗黄褐色土、柱痕の埋土が暗黒褐色である。他のピットは直径2～10 cmの円形や楕円形を呈しており、深さが約2 cmと浅く、埋土は黒褐色土である。いずれのピットからも遺物は出土していない。

## 第12節 97-11区の調査

### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は府道泉佐野岩出線「浜ノ宮口」の交差点の南東側に位置し、95-1区では大溝が検出された地点に隣接する。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 8・23)

約1.5 mの盛土を除くと、I層・青灰色粘質土(約10 cm)の堆積が確認され、その直下にII層・褐灰色粘質シルト(約10 cm)、III層・暗黒褐色粘質シルト(約15 cm)とつづき、地山である暗黄褐色粘質土に至る。遺物はIII層より瓦質土器や蛸壺の小片を出土したが、図化し得るものではなかった。

### 3. 遺構 (P L. 8・23)

地山面でピット2基(Pit01・02)を検出した。

Pit01はトレンチの北側で検出した。全形は不明であるが、検出し得た規模は径12cm、深さ約20cm、断面はU字状を呈する。埋土は暗黒褐色土である。遺物は瓦器碗の小片が出土しているが、図化し得るものではなかった。Pit02はトレンチの中央部で検出し、直径24cmの円形で、深さ5cmを測り、断面は皿状を呈する。埋土は暗黒褐色土である。遺物は出土していない。

### 第13節 97-12区の調査

#### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は遺跡の東部に位置し、今年度の調査におけるトレンチの位置関係では、最も南東側に相当する。トレンチは1カ所設定した。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 9・23)

トレンチの層位は約80cmの盛土の下に、第2層・淡黒褐色土が約30cm認められ、第3層・暗黄褐色土の地山に至る。地山面の標高は6.8m前後である。各層からの遺物の出土はなかった。

#### 3. 遺構 (P.L. 9・23)

地山面でピット (Pit01・02)、植物痕と考えられる土坑などを検出した。

Pit01・02はいずれも円形を呈し、径約20cm、深さ10~20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物の出土は認められなかった。

土坑は円形ないし楕円形を呈しており、かなり削平されているためか、深さはいずれも3cm前後と浅い。遺物の出土が確認できなかったためその形成時期は不明である。

### 第14節 97-13区の調査

#### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は遺跡の東部に位置し、95-1区において大型掘立柱建物が検出された地点の南東側にあたる。今年度の調査におけるトレンチの位置関係は、97-12区の北東約20mに位置する。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 9・23)

基本層位は約50cmの盛土を除くと、攪乱をうけているためか、上から暗黄褐色ブロック混じり暗灰色土、明褐色ブロック混じり灰色土などが約20cmにわたって複雑に堆積していた。その下層には包含層である暗茶褐色土、黒褐色土、淡黒褐色土など約20cmが堆積し、地山である礫混じり暗黄褐色土に至った。遺物は黒褐色土より瓦器や真蛸壺などが出土しているが、図化し得るものではなかった。

#### 3. 遺構 (P.L. 9・23)

地山面で、土坑 (S K01)、溝、ピット群を検出した。

S K01はトレンチの南西側で検出されたが、トレンチ外に拡がるため全形は確認できなかった。検出

した規模は、東西約1.7m、南北約0.5mの半楕円形で、深さ約20cmを測る。埋土は黒褐色土で、床面は一部に酸化のため赤色化している部分があった。焼土塊などは検出されなかったが、周辺で検出されたものと同様な真蛸壺焼成用の土坑であろう。遺物はS K01より土師質真蛸壺、土錘などが出土しているが小片のため図化し得なかった。その他の土坑群はトレンチの東側を中心に検出した。平面は不整形なものばかりで、植物痕と考えられる。埋土はすべて黒褐色土である。

溝はトレンチの西側を中心に検出され、その大半がトレンチ外に伸ばすため全容は不明であるが、長さ10～40cm以上、幅約20cm、深さは約4～10cm、埋土は淡褐色土であった。遺物が出土していないためその形成時期、性格は不明である。

ピット群はトレンチの南側を中心に検出された。平面形は円形のものが多く、直径が約10～20cm、深さは約4～10cmを測る。埋土は茶褐色混じり黒褐色土である。柱痕は確認されなかった。

## 第15節 97-14区の調査

### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は遺跡の東部に位置し、95-1区の調査において大型掘立柱建物が検出された地点の南側に隣接している。東約10mには97-13区、西約10mには97-16区が位置している。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 9・24)

約50cmの盛土を除くと、滋味土、床土はそのほとんどが失われており、一部に褐色シルト (旧耕作土)、灰褐色シルト (床土) が確認された。下層には、暗黒褐色粘質土 (約10cm)、暗黄褐色粘質土 (地山) が確認できた。遺物は暗黒褐色粘質土層より、瓦器碗や蛸壺の小片を検出したが、図化し得るものではなかった。

### 3. 遺構 (P L. 9・24)

地山面で、土坑2基 (S K01・02) とピット群を検出した。

S K01はトレンチの東側で検出した。トレンチ外に拡がるため全形は不明であるが、検出し得た規模は、長軸約40cm、短軸約20cmの楕円形で、深さは6cmを測る。S K02は東西方向に主軸を持つ、長軸約20cm、短軸約10cmの楕円形で深さは3cmと浅い。埋土はS K01・02ともに暗黒褐色土である。

ピット群は、平面形状が円形のものや楕円形のものがあり、直径4～10cm、深さ4～10cmを測る。各ピットからの遺物の出土はない。

## 第16節 97-15区の調査

### 1. 位置 (第11・13図)

調査区は遺跡の東部に位置し、今年度の調査におけるトレンチの位置関係では97-3区の南約25m、97-14区の北約20mの地点に位置している。当調査区の南側では95-1区の調査で大型掘立柱建物が検出されている。トレンチは1カ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 9・24）

トレンチの層位は約90cmの盛土の下に、第2層・褐色土が約30cm、第3層・暗褐色土が約10cm堆積する。以下は、第4層・褐色混じり黒褐色粘質土が確認されるが、トレンチの南から北にかけてその堆積が薄くなるのが看取される。第5層が暗黄褐色土の地山である。地山面の標高は6.5m前後である。遺構はすべて地山面で確認した。

## 3. 遺構（P L. 9・24）

検出した遺構は溝（S D01）、土坑（S K01）、ピットなどである。

S D01はトレンチ外に拡がるため、全形は明らかではないが、検出長約3.8m、検出幅約2.3m、深さ約50cmを測る。底部は東から西にむかって緩やかに傾斜しており、そのレベル差は8cmである。埋土は上層から黒褐色粘質土、褐色土、暗褐色土の3層が水平に堆積し、褐色土から瓦器、暗褐色土から黒色土器が出土していることから、ある程度の時間差をもって埋没していることが確認できた。

土坑は平面が円形や楕円形を呈する小規模なものが多いが、S K01は検出長約2.2m、幅1.7mを測る大型で、一部がS D01によって切られている。埋土はいずれも黒褐色粘質土である。遺物の出土はなかった。

## 4. 遺物（P L. 34、第14図）

6は瓦器碗である。内面には僅かにヘラミガキが認められる。復元口径17cmを測る。7は、瓦器皿である。焼成は不良で、淡灰色を呈す。

## 第17節 97-16区の調査

### 1. 位置（第11・13図）

調査区は遺跡の東部に位置し、今年度の調査におけるトレンチの位置関係では97-2区から南東約40m、97-14区の西約10mに位置する。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 9・24）

トレンチの層位は、約90cmの盛土の下に、第2層・茶褐色混じり灰色土が約10cm認められ、第3層・マンガン混じり暗灰色土が約20cm、第4層・黒褐色粘質土が約20cm堆積し、第5層・暗褐色土の地山に至る。地山面の標高は6.6m前後である。遺構・遺物は確認できなかった。95-1区の調査においても当調査区に隣接する部分は遺構密度が低いことが確認されており、今回の調査でその範囲がさらに拡がるのが判明した。

註 ① 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査現地説明会資料』（1996）  
城野博文「泉南市戎畑遺跡の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第35回）資料』（財）大阪府文化財調査研究センター（1997）  
② 泉南市教育委員会「樽井南遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅦ』（1997）  
③ （財）大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1993）

## 第5章 天神ノ森遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第11図）

天神ノ森遺跡は1934年の室戸台風の際、松林の南東隅の大きな松の木が倒れた時、地表下約3mの砂地の中より6世紀代の須恵器の大甕が出土したことで周知されることとなった<sup>①</sup>。当遺跡は男里川の河口から約1km上流の右岸に位置し、地形分類上では、洪積段丘低位面にあたり、周囲には旧河道とそれに伴う氾濫原が広がっていることが確認されている。

当遺跡の調査は、遺跡範囲のほとんどが神社地にあたるために、周辺の住宅地で極僅かしかおこなわれていないのが現状である。現在まで明確な遺構・遺物は確認されておらず、その層序を見てみると、表土以下はシルト、礫層とつづき、遺物包含層も確認されていない。

現在のところ、当遺跡に関してあまりにも不明な点が多く、周辺の遺跡外における試掘調査を含めた実態把握が今後の課題とされる。

### 第2節 97-1区の調査

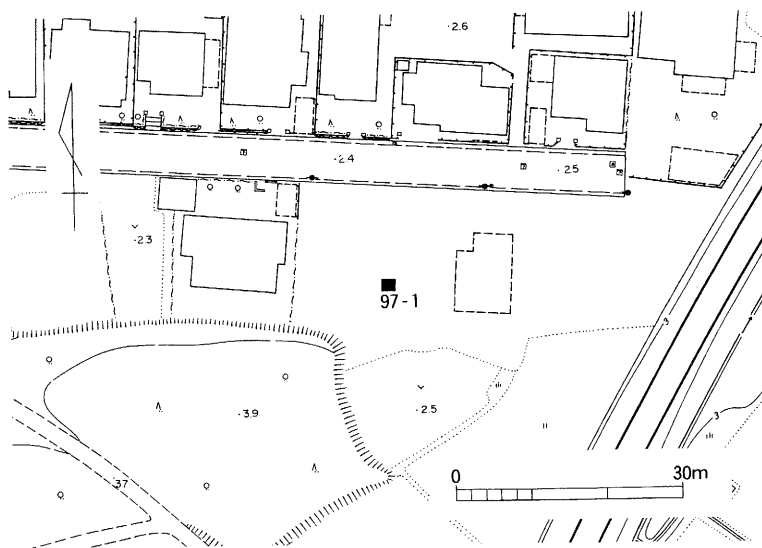
#### 1. 位置（第11・15図）

調査地は、遺跡の北東部にあたり、東隣には天神ノ森が広がる。地形分類上では洪積段丘低位面にあたる。トレンチは1カ所設定した。

#### 2. 層位と遺物の出土状況

（P.L. 10・25）

各層は、ほぼ水平に堆積をしており、宅地化に伴う盛土（第I層・約5cm）を除くと、暗赤灰色シルト層（第II層・約5cm）、にぶい橙色礫混じりシルト層（第III層・約5cm）、灰褐色砂礫層（第IV層・約10cm）、黄橙色礫層（第V層）とつづいた。第IV層とV層の上面で、精査をおこなったが遺構の検出にはいたらなかった。また、遺物の出土も認められなかった。



第15図 天神ノ森遺跡97-1区地形図

註 ① 泉南市史編纂委員会「考古・古代 第1章 原始の泉南」『泉南市史—通史編一』（1987）



## 第6章 専徳寺遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P L. 1・2、第11図）

当遺跡は市域の北西部、樽井集落内に所在する専徳寺の山門より約15mほど南東側に入った地点に位置し、今回当該地区における試掘調査によって初めて周知されることとなった。試掘調査と並行しておこなった分布調査や周辺の地形を考慮し、遺跡の範囲を当該地区を中心にして、東西に約40m、南北に約50mとした。

周辺の遺跡に目をむけると、南西約250mほどの地点に戎畑遺跡が所在し、大型掘立柱建物や真蛸壺焼成土坑などの中世を中心とした遺構・遺物が検出されている<sup>①</sup>。また戎畑遺跡の南側には市内最大の男里遺跡が拡がっており、縄紋時代から中世にかけての遺構・遺物は多く報告されているものの、戎畑遺跡や男里遺跡を中心とする周辺の遺跡では近世における報告例は少ない。今回の調査で近世の遺物が多く出土したことは、当時の集落の様相を知る上で大きな意味をもつものである。今後の調査によって、周辺の遺跡との関係や、1494年に唯念によって開かれ現在にいたる専徳寺との関係などが明らかになることが期待される。

### 第2節 97-1区の調査

#### 1 位置（第11・16図）

調査区は現在の専徳寺の山門より南東に約15mの地点である。地形分類上では洪積段丘中位面にあたりと考えられる。トレンチは1カ所設定した。

#### 2. 層位と遺物の出土状況

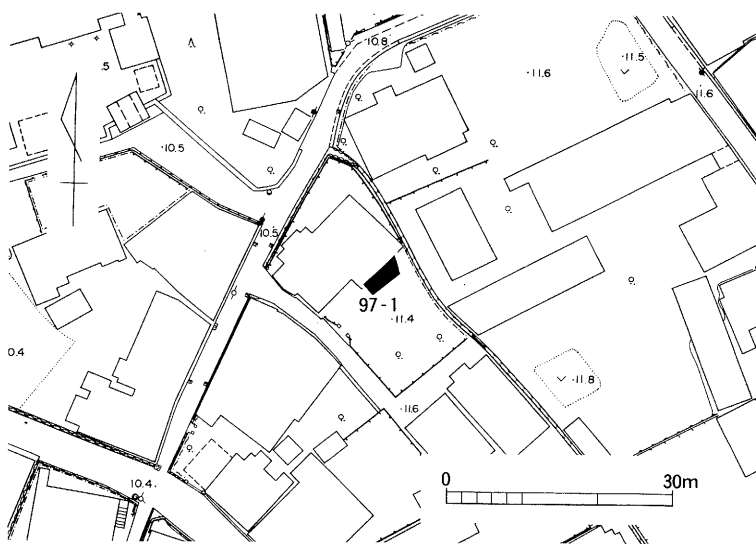
（P L. 10・25）

基本層位は約20cmの盛土（I層）を除くと、II層・オリーブ黒色シルト（約10cm）、III層・にぶい褐色シルト（約20cm）、IV層・黒灰色混じり黄褐色シルト（約10cm）、V層・黄褐色混じり茶褐色シルト（約10cm）、VI層・褐灰色シルト（約10cm）とつづき、地山である黄褐色シルト（VII層）に至る。遺物はいずれの層からも出土しなかった。

#### 3. 遺構（P L. 10・25）

地山面で、褐灰色シルトの埋土をもつ土坑（S K01・02）を検出した。

S K01はトレンチ外に拡がるため全形は不明であるが、トレンチのほぼ中央部から、東端にむけて拡がり、検出規模は長辺約1.8m、短辺約1mを測る。深さは約10cmと浅く、断面は緩やかな皿状を呈す



第16図 専徳寺遺跡97-1区地形図

る。埋土から近世の所産となる多くの遺物が出土している。

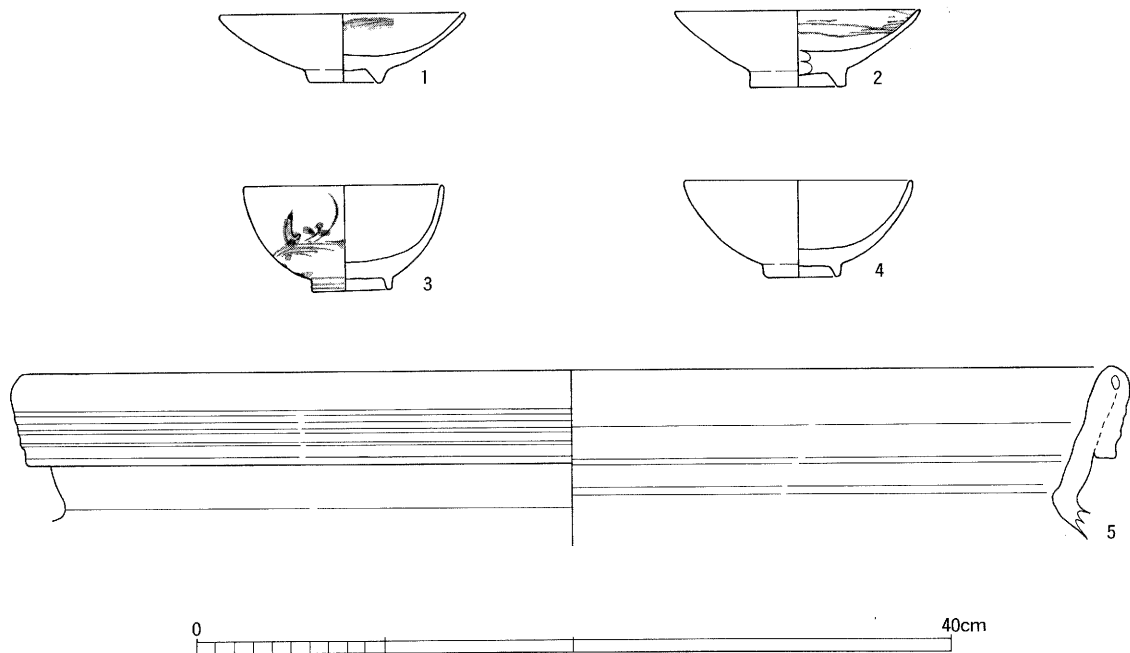
S K02はトレンチの西端で検出した。全形はトレンチ外に拡がるため不明であるが、半径約30cmの扇形を呈し、深さは約20cm、断面は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

#### 4. 遺物 (P L. 33、第17図)

S K01より染付碗、甕、軒丸瓦、平瓦、蛸壺などの近世の遺物が出土している。

1～3は波佐見焼系の染付碗である。紋様は1・2は笹紋、3は松竹梅紋で、1・2は削り出しによる高台は無釉である。また1～3は見込みに蛇の目釉ハギが施される。4は信楽焼系の碗で高台を除き全体に施釉されている。

5は備前焼の大甕である。口縁部は下外方に大きく折り曲げられたため肥厚しており、接合痕と孔が確認できる。色調は外面は暗赤灰色、内面は赤褐色、断面は灰赤色を呈しており、自然釉が付着している頸部は灰白色を呈している。よく使われていたためか口縁端部の一部は摩耗が激しい。復元口径58cmを測る。



第17図 専徳寺遺跡97-1区出土の遺物

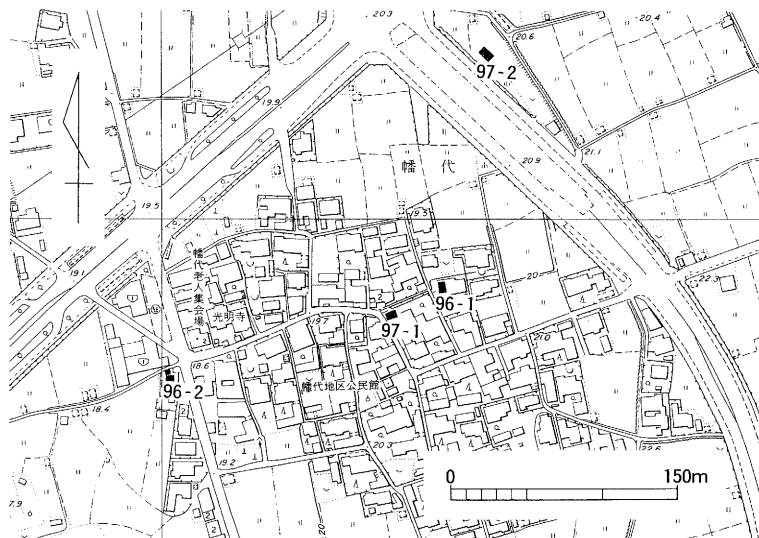
- 註 ① 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査現地説明会資料』（1996）  
城野博文「泉南市戎畑遺跡の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第35回）資料』（財）大阪府文化財調査研究センター（1997）
- ② 泉南市史編纂委員会「古代・中世 第3章 戦国時代の泉南地方」『泉南市史—通史編—』（1987）  
専徳寺の歴史においては、専徳寺前任職木村宏城氏から多くの教示を得た。

## 第7章 幡代遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（PL. 1・2、第18図）

幡代遺跡は市域の西部、金熊寺川の中流右岸に位置し、地形分類上ではその旧河道によって形成された沖積段丘にあたる。南側には幡代南遺跡、北側は国道26号線を境として男里遺跡が所在している。

遺跡の現況は西半に現在の幡代集落があり、東側には耕作地が大きく広がっている。耕作地には現在も条里制地割を残す部分があり、「六ノ坪」や「廿一坪」のように坪名が小字名として残っている部分もある<sup>①</sup>。



第18図 幡代遺跡調査区位置図

当遺跡は比較的調査がすすんでい  
る遺跡の一つで、多くの調査が実施されている。いままでのところ平安時代後期、室町時代、そして江戸時代後期と大きく3時期の盛期が確認されている。また若干の弥生時代の遺物が検出されており、今後の調査によっては盛期の拡大も期待される。その中でも、最も活動が活発になるのは中世以降で、特に遺物では多くの瓦類が出土しており、付近には堂塔の存在をうかがわせる字名も残ることから、中世寺院の存在は確実視されている。しかし、これまでの調査では寺院に直接関係するような遺構は検出されておらず、今後の課題といえる。また、遺跡のほぼ中央、現在の集落の東端において、鎌倉時代の掘立柱建物や耕作痕などの遺構が確認されており、このことから少なくとも鎌倉時代以降には現在の景観が形成されはじめたことが指摘されている<sup>②</sup>。近世においては、製糖に用いられたと考えられる土器<sup>③</sup>や他の都市遺跡でいくつかの出土例が報告されている土製円板などが出土している<sup>④</sup>。市域ではこれらの遺物の出土例は少なく、当時の日常生活・生産・流通等を考えるうえで貴重なものといえる。

このように、当遺跡では市内の中・近世を語る上で欠くことのできない貴重な資料が得られており、今後の調査の動向が注目される。

### 第2節 97-1区の調査

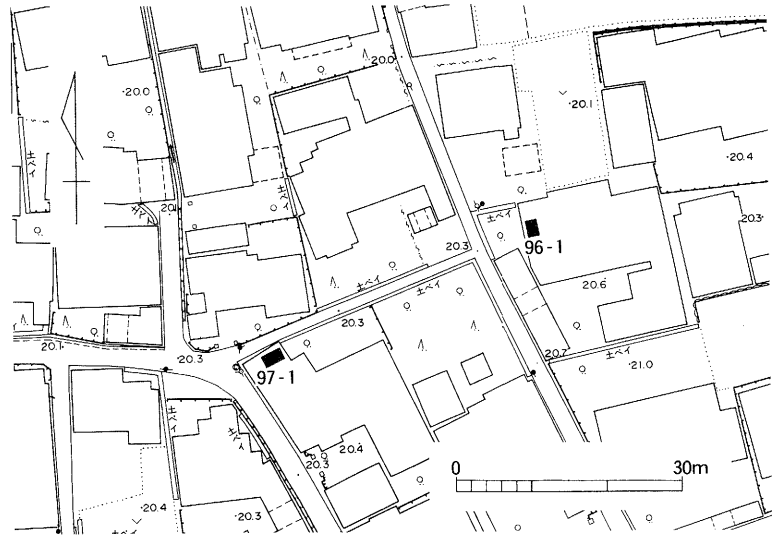
#### 1. 位置（第18・19図）

調査地は遺跡の中央部からやや西寄りにあり、現在の幡代集落のほぼ中央に位置している。周辺では中世や近世に属する遺構や遺物が数多く確認されており、中世以降現代にいたるまで、連綿と集落が営まれていたことがうかがえる。地形分類上は金熊寺川右岸に大きく広がる沖積段丘面上に立地しているものと考えられている。トレンチは1カ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況

(P L. 10・25)

調査地全面に施されている盛土を除去すると、整地土である暗黄褐色土が全面に広がる。この整地層は約20cm～50cmの厚さを測り、東側に向かって厚くなっている。続いてトレンチの北西側では直下に暗灰褐色土が認められ、旧耕作土であるとも考えられる。しかし部分的にしか確認されないため、整地の際に耕作土を除去した可能性がある。残る大半の



第19図 幡代遺跡97-1・96-1区地形図

部分においては灰褐色混じり淡褐色シルトが広がっており、東側に向かって緩やかに傾斜しながら全面に約20cm～50cmの厚さで堆積している。またこの層からはわずかではあるが中世の遺物が出土した。

続いてトレンチの北西側では暗褐色混じり青灰色シルト（約20cm）および淡黄褐色砂質土（約10cm）が認められるが、基本的には淡灰褐色砂礫が広がっている。この層は非常に締まりが悪く軟弱な状態であったが、上面より60cm以上掘削してもまったく変化が認められなかったので地山であると判断した。またこの層からは夥しい量の湧水があり、河川に起因する堆積であると考えられる。

以上、今回の調査においては遺構はまったく確認されず、また遺物も包含層よりわずかに出土したのみではあるが、確認された地山の状況より、調査地は氾濫原上に立地していることがはじめて確認され、また中世と考えられる包含層が良好に残存していることから周辺への遺跡の拡がりをも十分に予想させるものである。

## 第3節 96-1区の調査

### 1. 位置（第18・19図）

調査区は幡代遺跡の東部、現在の幡代集落の東端にあたり、地形分類では沖積段丘上に位置する。周辺では、市道拡幅に伴う調査で平安後期の集落及び近世の沼状遺構<sup>⑤</sup>などが、府道新設に伴う調査では鎌倉時代の掘立柱建物など、主に中世以降の遺構、遺物がそれぞれ確認されている。今回の調査区は、現在の幡代集落内での調査だけに集落の発生及び展開を知るうえで非常に貴重な調査といえる。トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 10・26）

トレンチの層位は以下の通りである。既存建物解体に伴う整地層（1層）を除去すると、小礫、灰色粘土ブロックなどが混入する攪乱（2・3層）がみられる。これらには、瓦片や植木鉢など近現代の遺物が見られることから、ごく最近に行われた整地作業の痕跡と考えられる。以下は、灰褐色粘土・礫多量に含む（4層）、暗灰褐色粘土・礫多量に含む（5層）、明黄褐色シルト（6層）、青灰色シルト（7

層) がみられる。このうち4層から瓦器碗片、陶磁器、平瓦などが出土したものの、これより下層で遺物は出土しなかった。

これらの層位の性格として、4層は堆積状況、出土遺物が示す年代幅から整地作業に伴うものと考えられ、その時期はおよそ近世以降だと考えられる。この整地の範囲、年代、当時すでに存在していた幡代集落との関係などの究明が今後の課題といえる。また、4層以下で遺物は検出されなかったが、5層は他の6・7層と成因を異にする。つまり、調査区が狭小であったため、遺物は検出されなかったが、堆積状況からみても5層も整地層である可能性が高いと考えられる。

次に、6・7層であるが、これらは南西から北東に緩やかな勾配をもち、シルト質であることから沖積作用による堆積と考えられる。これらのことから、遺物は検出されなかったため時期は不明であるが、5層以下は河川埋土と考えられる。なお府道新設に伴う調査では、南東から北西方向への旧河道が確認されている<sup>⑦</sup>。この埋土から弥生時代中期の遺物が極少量出土しており、この旧河道と本調査区における5層以下との関連があるものとも推測できる。

今回の調査から推測されることを以下に列記する。

まず調査区周辺は、5・6層であきらかのように幡代集落内の西部に比べ地盤が軟弱であるということがあげられる。この地盤の不安定さは、調査区東側の調査において確認された流路と関連があるのかもしれない。つまり、近世以前は、住居に適さぬ地盤であったが、近世以降この周辺に整地作業を施し新たに集落を拡大したのものとも考えられる。つまり、本調査区付近は幡代集落の中でも比較的新しい時期に築かれた地域ではないかと考えられる。

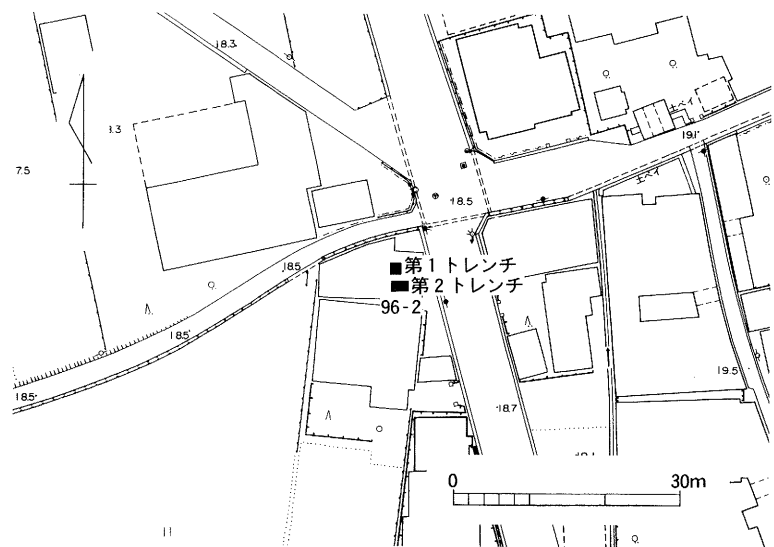
今後、整地土直下土層の年代、整地土の正確な年代、整地土直上の遺構の年代などを確認することが、この推測に一定の解釈を与えるものである。

#### 第4節 96-2区の調査

##### 1. 位置 (第18・20図)

調査地は幡代遺跡の北西部に位置しており、遺跡の西端を北北西から南南東方向に走る市道に面している。昭和59年度にその市道下において、大阪府教育委員会が府水道管理設工事に伴う事前発掘調査をおこなっており、平安時代後期から室町時代の所産と考えられる柱掘方を検出している。調査地の現況は更地となっているが、つい最近まで昭和10年代に建てられた納屋が建っており、それ以前は水田として利用されていたらしい。

トレンチは2カ所を設定した。



第20図 幡代遺跡96-2区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 10・26）

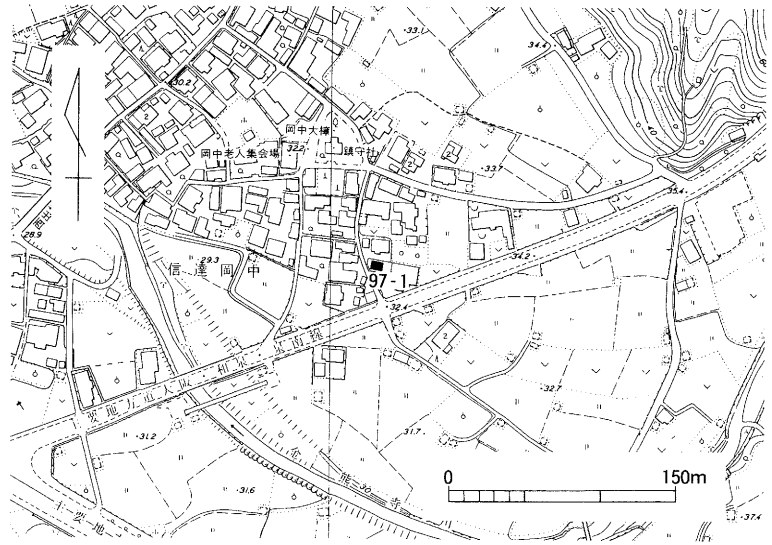
層位は第1・2トレンチとも基本的に異なることなく、各層が水平に堆積している。第1層・表土（約30cm）、第2層・淡灰色土（約10cm）、第3層・暗黄褐色土（約10cm）、第2トレンチにはその下層にやや灰色がかった第4層（約15cm）が認められる。第5層は茶褐色混じり淡褐色土（約30cm）、第6層が地山の親指大～拳大の礫混じり褐色土である。遺構や各層からは全く遺物が出土せず、明確な遺物包含層は確認できなかった。

- 註 ① 泉南市史編纂委員会「考古・古代 第2章 古代の泉南」『泉南市史—通史編—』（1987）  
② 1993年度の（財）大阪府埋蔵文化財協会の調査による。  
③ 泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）  
④ 泉南市教育委員会「幡代遺跡94-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』（1996）  
⑤ ③と同じ。  
⑥ ②と同じ。  
⑦ ②と同じ。

## 第8章 岡中遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第21図）

岡中遺跡は男里川の上流、金熊寺川の右岸に広がる沖積段丘上を中心に立地する遺跡である。遺跡の範囲は長径約500m、短径約300mを測るいびつな楕円形を呈しており、遺跡の南端から西端を区切るように現在の金熊寺川が流れ、また東側には和泉山脈より派生して伸びる長山丘陵南端の愛宕山が迫っている。遺跡の北半部は現在の岡中集落が占めており、集落内には熊野街道が東西方向に横断している。また南半部の多くは現在も耕作地として利用されている。



第21図 岡中遺跡調査区位置図

当遺跡における発掘調査は現在の集落内を中心として実施され、それらによると遺跡のほぼ中央において「岡中の大樟と榎」として市民に愛されている2本の巨木や鎮守社の周辺では、土坑墓やピットなどの遺構が検出されており<sup>①</sup>、周囲に14～15世紀代に盛期を求められる集落が広がるものと考えられる。

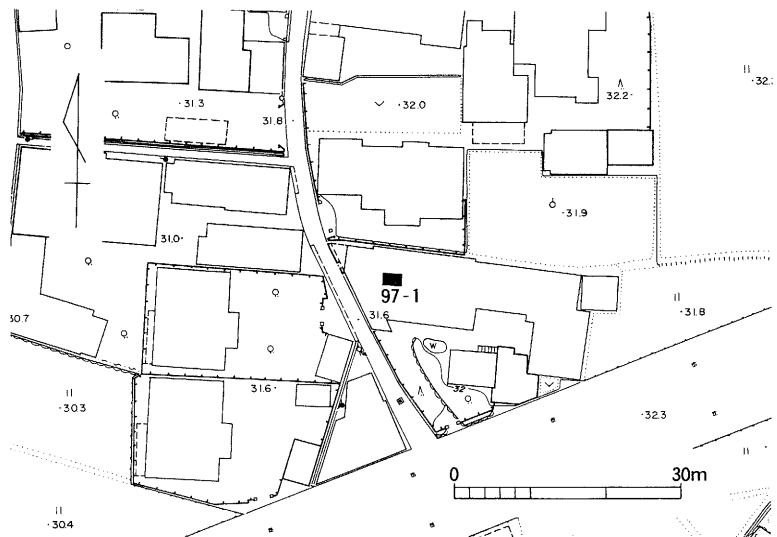
また時代的にはやや遡るが寺院跡も確認されており、ここで見つかった瓦は岡中遺跡東方の林昌寺瓦窯にて焼成されたことが確認されている<sup>②</sup>。またこの瓦と同範のものが岸和田市畑遺跡においても出土しており、泉州地域における中世瓦の生産と流通を明らかにする上で非常に注目される。

このように岡中遺跡は中世寺院を中心として展開された集落跡と考えられるが、いまだ不明な点が多く、今後は寺院や集落の具体的な内容や、近隣の中世遺跡との関連や追求が課題となろう。

### 第2節 97-1区の調査

#### 1 位置（第21・22図）

調査地は遺跡の中央部南寄りの地点で、現在の岡中集落の南端付近に位置している。ちょうど中世集落の中心部と考えられている大樟より南へ約100m下った所にあたる。周辺での調査例はあまり多くないが、約20m北側の地点において行われた94-2区では中世以降連綿と耕作地と



第22図 岡中遺跡97-1区地形図

して利用されていたことが判明しており<sup>③</sup>、集落の南限を知る上で興味深い結果が得られている。

地形分類上は沖積段丘面上に立地していると考えられているが、先の調査区においては氾濫原と考えられる砂礫層が確認されていることから、周辺にはかなりの微地形が隠されている可能性がある。

トレンチは1カ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 10・27）

今回確認された層序は全部で11層あり、そのうち1層から7層まではおおむね水平に堆積している。まず1層・表土及び暗橙色混じり淡灰褐色土（約20cm）、2層・暗橙色シルト（約15cm）、3層・灰褐色混じり暗黄褐色土（約20cm）の上位3層を除去すると旧耕作土と捉えられる4層・暗灰褐色土（約10cm）および床土である5層・暗黄褐色土（約5cm）が認められる。続く6層・灰橙褐色土（約10cm）はおおむね水平であるが北から南に向かっては若干の起伏を持って堆積している。7層・暗褐色礫混じり土（約10cm）へと続く。トレンチの東側では7層直下に地山と考えられる11層・淡褐色礫混じり土が広がっているが、その上面はトレンチの西半から南西方向へ向かって緩やかに落ち、南西隅部ではさらに一段落ちている。トレンチの北西部から中央部にかけては7層以下、8層・淡灰褐色礫混じり土（約10cm）が堆積し、南西部隅のさらに低いところでは8層を切るように9層・淡灰褐色土（約10cm）と10層・淡褐色土（10cm以上）が堆積している。

これらのうち4層から土師器の細片が、また6層より瓦器の細片が出土した。これらの遺物は図示し得ず詳細は分からないが、周囲の状況から考えても4、5層からなる耕作面が中世に属する可能性は高いものと考えられる。中世集落の南限は今のところ不明であるが、集落の南側が比較的大きく耕作地として開発されていたようである。中世寺院や集落を支えた生産基盤の一部と捉える事もできよう。

また確認された地山の状況は先述した94-2区と同様、氾濫原を構成するものと考えられ、距離的に見ても同一のものと考えて差し支えないだろう。ちなみに今回の調査区との地山上面での比高差は約50cm程あり、北に向かってレベルを下げていることが分かる。

註 ① 泉南市教育委員会「岡中遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』（1988）

② 泉南市教育委員会「林昌寺瓦窯」『泉南市文化財年報No.1』（1995）

③ 泉南市教育委員会「岡中遺跡94-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅺ』（1995）



## 第9章 長山遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1～3）

和泉山脈から派生する長山丘陵の先端西側斜面に位置し、遺跡の西側には男里遺跡が隣接する。地形分類では洪積段丘及び沖積段丘にあたり、男里遺跡中央部の旧河道へなだらかな勾配をもつ丘陵裾の斜面上に位置する。当遺跡内では、近年宅地化が進むが、それ以前は現在の馬場集落の東側のはずれに位置し、耕作地であった。

調査は94年度に行われているが、地山をベースとする遺構面で落ち込み、土坑、溝などが検出されている<sup>①</sup>。これらの遺構は、包含層及び遺構出土の遺物から、少なくとも中世以降のものと考えられる。

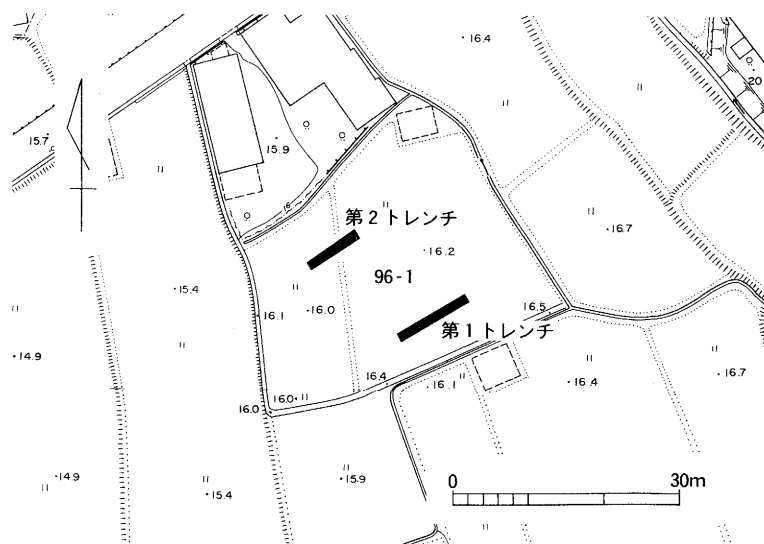
今年度の調査が当遺跡における3例目の調査であるが、現在までの知見をまとめると以下ようになる。上述のとおり地形分類上、丘陵斜面の洪積段丘及び沖積段丘上に位置し、現在の馬場集落のはずれにあたる。また、過去の調査では中世以前の遺構及び遺物は検出されていない。このように、当遺跡は調査例が少なく、その実態はつかみきれていないといってもよい。

しかし周囲に目を転じると、隣接する男里遺跡では、近年遺跡東側つまり当遺跡に近いところにおいて、弥生時代中期<sup>②</sup>及び飛鳥時代の集落<sup>③</sup>、現在の馬場集落内での調査において中世の遺構面<sup>④</sup>が確認されている。このように当遺跡西側は、男里川流域において最も遺構及び遺物の密度が高い地域であるが、一方東側の洪積段丘上は、極端に遺跡の分布が少ない。つまり、当遺跡の周辺における遺跡の状況及び地形からすると、当遺跡での遺構遺物の拡がりをとらえることは、男里川流域における集落の東限をしめす資料であり、今後の調査成果が期待される。

### 第2節 96-1区の調査

#### 1. 位置（P.L. 3、第23図）

今回の調査区は、馬場集落の東側で94年に調査が実施された地点の西側約20mの地点にあたる。その調査では、黄褐色シルトの地山面において耕作痕、土坑、ピット等が確認されている。これらの遺構からの遺物の出土は少なく、中世のという大まかな年代観でしかとらえることができない。今回の調査では、丘陵の斜面に平行するかたちでトレンチを2カ所設定した。



第23図 長山遺跡96-1区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 10・27）

各トレンチの層位は以下のとおりである。なお、両トレンチにおいて遺構は検出されなかった。

第1トレンチは、現代耕作土（1層）、黄橙色シルト（2層）、マンガン粒を含む灰褐色シルト（3層）、茶褐色シルト（4層）、黄色シルト（5層）、橙色シルト（6層）、灰色シルト混じり礫層（7層）である。2・3層は、耕作痕等は見られないものの旧耕作土と考えられ、3層から小片ながら中世のものと考えられる土師質の小皿が出土している。また、5層以下は地山である。

第2トレンチは、現代耕作土（1層）、黄橙色シルト（2層）、灰褐色シルトマンガン粒含む（3層）、茶褐色シルト（4層）、黄色シルト（5層）、淡灰褐色シルト（6層）、灰色シルト混じり礫層（7層）である。2・3・6層は、耕作痕等は見られないものの旧耕作土と考えられ、3層から小片ながら中世のものと考えられる遺物が出土している。また、5層以下は地山である。

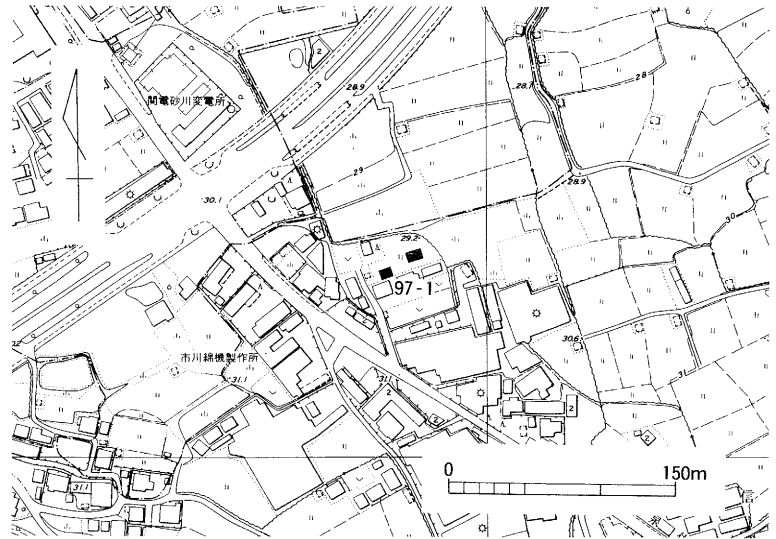
今回の調査では、旧耕作土と考えられる層位より中世の遺物が出土したことと、既往の調査から、少なくとも中世以降にこの周辺は耕地化されたことが指摘できる。

- 註 ① 泉南市教育委員会「長山遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』（1995）  
② 泉南市教育委員会「男里遺跡 既往の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅣ』（1997）  
この付近は（財）大阪府埋蔵文化財協会、（財）大阪府文化財調査研究センターによって継続的な調査が行われている。  
③ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅤ』（1997）  
④ 泉南市教育委員会「男里遺跡89-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1990）など。  
1989年度の調査では、掘立柱建物を構成すると考えられるピットが確認されており、併せて中世包含層が確認されている。  
現在の馬場集落に先行する集落跡の存在を示す資料といえる。

## 第10章 上代石塚遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第24図）

当遺跡は市域のほぼ中央、地形分類では洪積段丘にあたり、和泉山脈から派生する長山丘陵の東側に位置する。遺跡の規模は、東西及び南北方向ともに約200mである。1988年度の分布調査にて発見されたが、発見当時の現況は耕作地であった。これまで当遺跡における発掘調査は、1995年度の大規模店舗建設に伴うものが唯一であり、この調査成果を以下に列記する。



第24図 上代石塚遺跡調査区位置図

現代耕作土直下の明黄褐色粘土をベースとする遺構面がみられ、本来

存在したであろう包含層は確認されなかった。なお、聞き取りによると数十年前まで調査区一帯の耕作地において、煉瓦製作に伴う粘土採掘が行われていたようで、この粘土採掘に伴いおそらく包含層及び遺構面が削平されたものと考えられる。それより下層は、基盤層と考えられる段丘礫層がみられ遺構及び遺物は検出されなかった。

検出した遺構は、溝（S D01）、土坑、ピットで、明確な建物跡などはみられなかった。これらのうち、S D01について少し詳しくみていくこととする。その規模は、最大幅約10m、深さ約1mで、南東から北西へ蛇行しながら調査区を縦断している。また、南西方向からの合流地点が2カ所みられることから、調査区外にこのS D01に合流する溝の存在が想定できる。さらに、断面観察によると、幾度かの掘り返しが行われていることから、この溝が一定期間人為的に維持管理されていた可能性が指摘できる。つまり、これらのことを積極的に解釈すれば、検出した溝は洪積段丘上の灌漑施設の一部と考えられる。またその年代は、溝最上層より出土した瓦器碗や東播系須恵器から、埋没時期は少なくとも14世紀初め頃と考えられる。

また、極度に摩耗しているものの庄内式併行期や、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物が若干出土していることから、周囲に当該時期の遺跡が存在する可能性も考えられる。

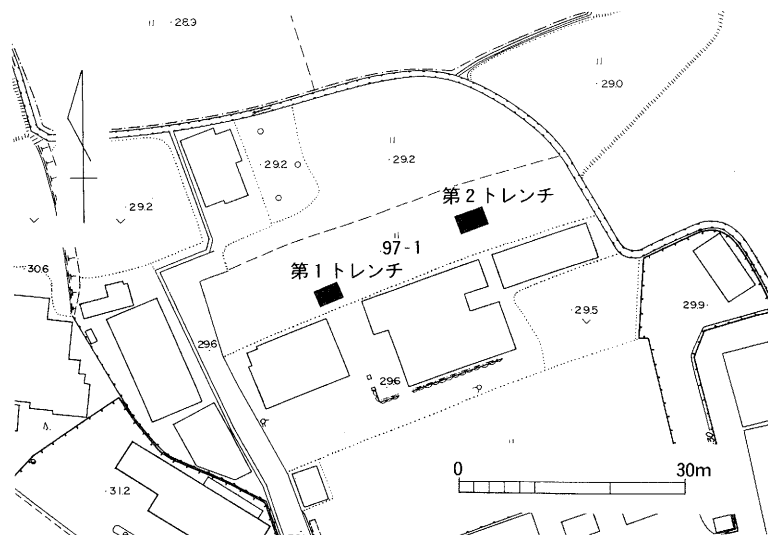
以上の調査成果に基づいて、遺跡内における土地利用の形態などを述べたが、それを補強する客観的資料が現在のところ見られず、あくまでも推測の域を脱し得ない。今後の調査において、その判断基準となる資料の増加が望まれる。

## 第2節 97-1区の調査

### 1. 位置 (第24・25図)

調査地は遺跡の南西部にあり、国道26号線より約100m南下した地点である。調査区の東側に隣接する地点において実施された調査では中世の大規模な灌漑水路が確認されている。地形的には市域の平野部の大半を占める低位段丘面上に立地しているものと考えられる。

トレンチは2カ所設定した。



第25図 上代石塚遺跡97-1区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 13・28)

東西に長い長方形を呈した調査区の両端近くにトレンチを設定し、西側を第1トレンチ、東側を第2トレンチとする。

両トレンチともに現代の耕作土(約10~30cm)および耕作土に伴う床土層(約10cm)が共通して認められる。続いて第1トレンチでは旧耕作土と捉えることのできる黄褐色混じり淡灰褐色土(約15cm)が水平に堆積し、直下に地山である橙色混じり淡黄褐色土が広がっている。地山上面において遺構が確認された。またいずれの層からも遺物は出土しなかった。

第2トレンチにおいても床土層の下に黄褐色混じり淡灰褐色土が水平に堆積しており、第1トレンチと同様に旧耕作土であると考えられる。続いて地山である灰褐色混じり黄褐色粘質土に至るのだが、第1トレンチと比べると非常に硬く締まっている点が異なっている。地山上面において遺構が確認された。またいずれの層からも遺物は出土しなかった。

### 3. 遺構 (P L. 13・28)

第1トレンチではトレンチのほぼ中央において土坑(S K01)が1基確認された。S K01は長軸を東西方向に向けた不整形を呈し、長径約110cm、短径約60~100cm、上面からの深さは約20cmを測る。埋土は1層で淡灰褐色粘土である。遺物は出土しなかった。これらの状況よりこの土坑は人為的なものというよりも、地山面の窪み状のものと捉えられるものである。

第2トレンチではトレンチの南壁に添うように、南西から北東方向へ並行して伸びる2条の溝が確認された。規模の大きな北側のもので長さ210cm、幅10~20cm、上面からの深さ3cmを測る。埋土は1層で、上層である黄褐色混じり淡灰褐色土である。遺物は出土しなかった。これらの溝はいわゆる鋤溝であると考えられ、その方向は現代見られる地割りと一致している。

## 第11章 岡田遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P L. 1・2、第26図）

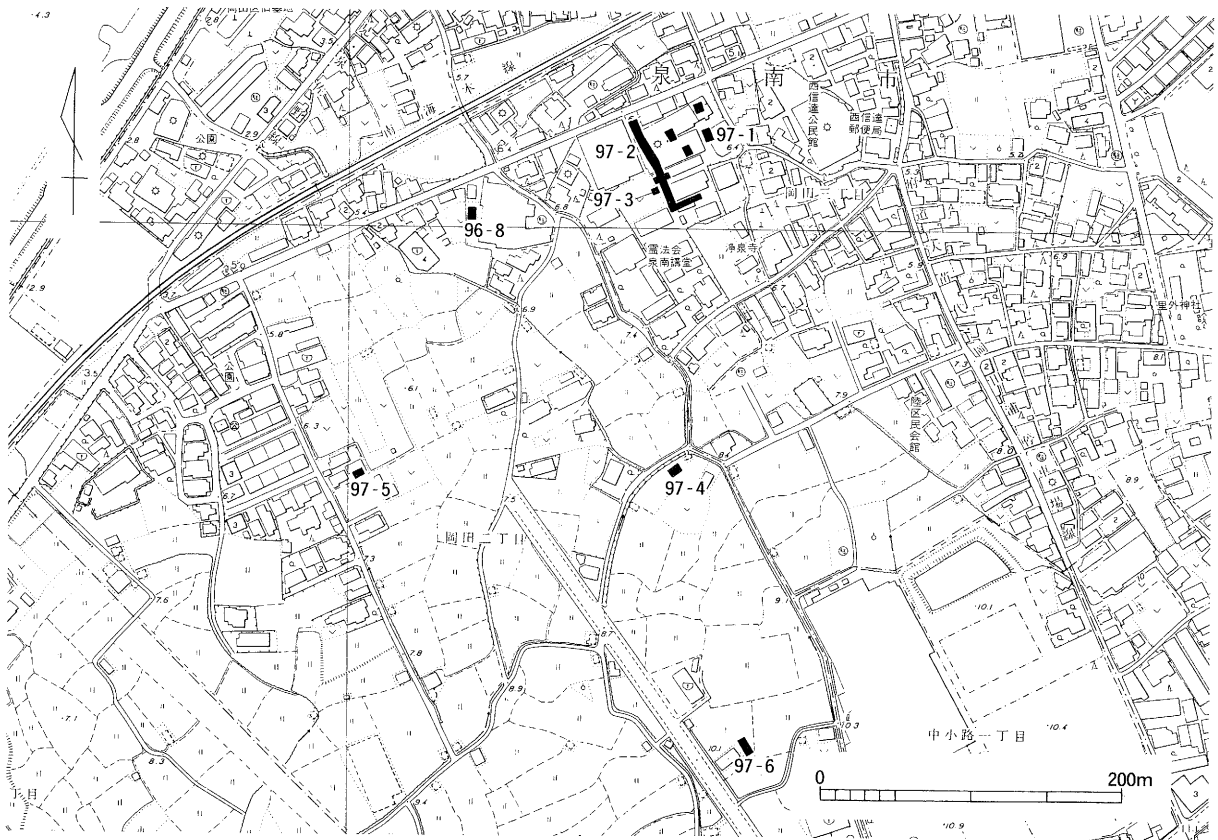
岡田遺跡は泉南市の北東端を流れる榎井川の西岸に位置する遺跡である。その規模は東西約450m、南北約650mを測り、市域では男里遺跡に次ぐ2番目の面積を持つ巨大な遺跡である。地形分類上では洪積段丘低位面に立地し、遺跡の現況は、現在の岡田集落が北東部に位置するほかは大半が耕作地となっている。

当遺跡は近年の大きな開発の波をうけず、比較的旧来の景観を残しているが、その中においても個人住宅等を対象とした小規模な調査が継続的におこなわれ、当遺跡の歴史的情報が蓄積され続けてきた。

現在、最も古い遺物としては縄紋または弥生時代の石鏃が1点みつまっている<sup>①</sup>ほか、古代の須恵器片なども出土しており、当地がかなり早い時期に開発されていた可能性を示唆している。

中世以降では得られる情報は飛躍的に増大し、まさしく当該期が岡田遺跡の盛期といえる。耕作地となっている遺跡西半部の調査では、複数の耕作面が検出され、現在に至るまで連綿と耕作地として利用されていることが確認されている<sup>③</sup>。また、現在の集落の内における調査はさほど数多くはないものの、掘立柱建物を構成すると考えられるピット<sup>④</sup>や室町時代の井戸状遺構<sup>⑤</sup>など、中世集落の一端をうかがい知ることができる資料が増加している。

今後は中世における集落範囲の確認やその成立過程の把握など、周辺の遺跡との相互の検討をふまえた研究が求められている。



第26図 岡田遺跡調査区位置図

## 第2節 97-1区の調査

### 1. 位置 (第26・27図)

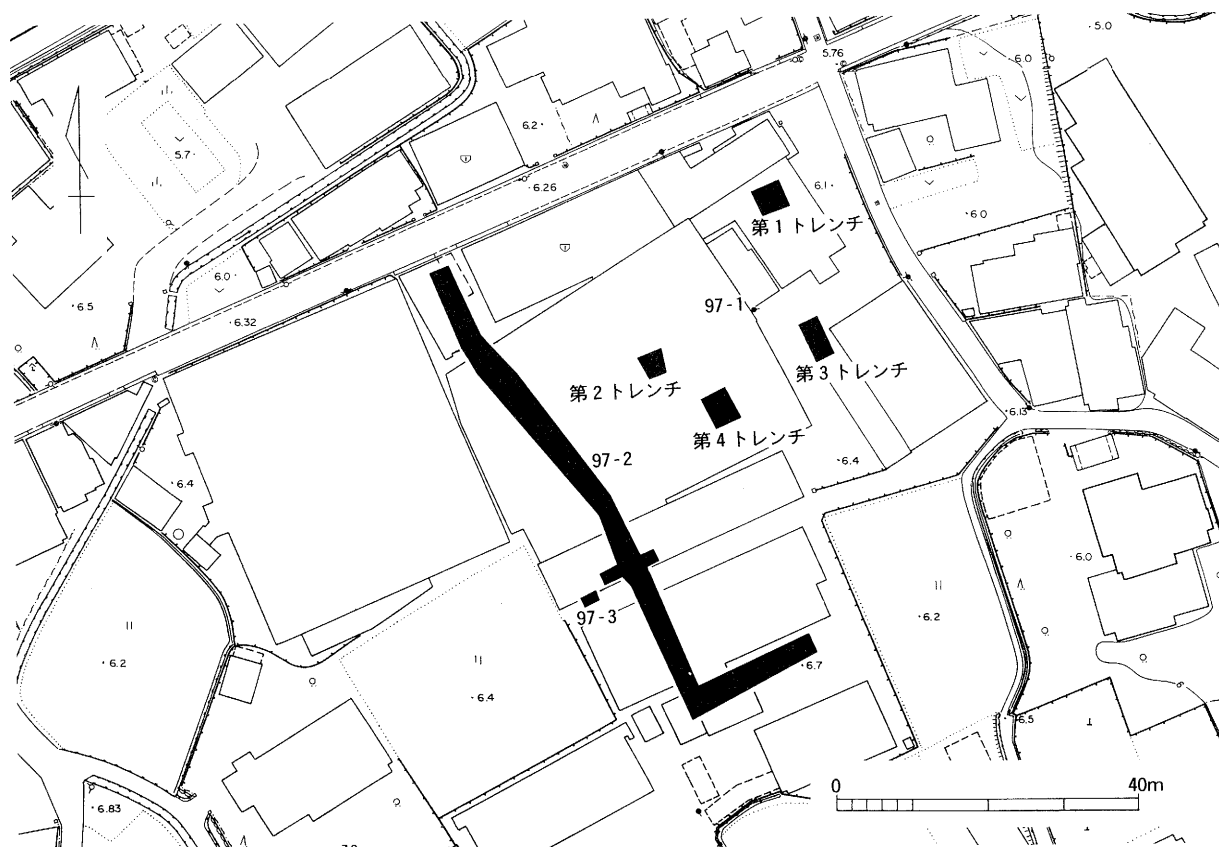
調査区は、遺跡の北端部分に位置し、現在の岡田集落の一部に含まれる。南海本線の軌道敷から南へ約50mの地点で、地形的には低位段丘面の先端部分に立地するものと考えられる。ここより海側では、さほど顕著ではないものの海側に向かって落ち込む段差が存在する。

97-2・3区とは北東側用地を接しており、本調査区においても同様の遺構・遺物の検出が期待された。トレンチは、全部で4カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 11・28)

第1トレンチは、最も北寄りで市道に近接した地点である。盛土を約50cm除去すると現代の滋味土及び床土は既に失われており、旧耕作土と考えられる暗灰色、暗灰褐色、淡灰褐色などの砂質系のシルト層が40~50cm認められ、黄褐色粘性シルト層の地山に至る。また、トレンチ西側部分では、淡灰褐色砂質シルト層は確認されず、暗灰褐色砂質シルト層の上層に灰褐色砂質シルト層が約10cm認められた。遺構は、溝や土坑が確認された。遺物は、淡灰褐色砂質シルト層から中世末から近世初頭の土師器や陶器などが少量出土している。

第2トレンチは、第1トレンチから南西に約28mの地点に位置し、97-2区にも最も近接したトレンチである。約40cmの盛土を除去すると、灰色、暗灰色の砂質シルトが約20cm部分的に認められ、褐色砂質シルト層(約30cm)に至る。さらに下層には、褐色粘性シルト層(約10cm)が介在し、赤褐色粘性シ



第27図 岡田遺跡97-1~3区地形図

ルトの地山に至る。盛土より地山までの下層は、プライマリーな状態で遺存しているが、旧耕作土とはやや異なる様である。遺構はピットが1基確認された。遺物は、いずれの層からも出土しなかった。

第3トレンチ及び第4トレンチは、盛土及び旧建物である工場の廃棄物と考えられるコークス状の炭が約1～1.5m認められ黄褐色粘性シルトの地山が確認された。また、第4トレンチはこの地山層を更に掘り込んで廃棄物が埋め込まれており、明確な地山が確認できたのもごく僅かであった。いずれのトレンチからも遺構・遺物は確認されなかった。

### 3. 遺構 (P.L. 11・28)

第1トレンチでは、溝と土坑2基を検出した。S K01・02は淡灰褐色砂質シルト、S D01は地山である黄褐色粘性シルト層の上面で確認された。

S D01は、北東から南西にまっすぐ検出された。検出長約3.6m、幅約0.8m、深さ約0.5mを測るかなりしっかりとした溝である。断面はほぼ逆台形を呈し、底面が下方へやや丸みを帯びている。埋土は、上層は灰色及び灰褐色系の砂質シルトでかなり軟弱な土質である。下層は灰色系の粘性シルトで、地山の黄褐色粘性シルトをブロック状に含んでいる部分もあった。遺物は、上層から土師器の甕、羽釜、陶磁器、真蛸壺などがかなりまとまって出土し、下層からは土師器片や瓦質土器の挿鉢や土錘なども出土した。

S K01・02は不整形の土坑である。いずれもトレンチ外へ伸びるため、全体の規模は不明であるが、深さ10～20cmを測り、埋土は灰褐色シルトの1層である。遺物は、陶器、土師器、瓦質土器などが出土している。

第2トレンチでは、地山面である赤褐色粘性シルトの上面でピットを1基検出した。径約20cmの円形で、深さ約10cm程度の小型のものである。埋土は、灰色砂質シルトを呈する。遺物は出土しなかった。

### 4. 遺物 (P.L. 14・36・37)

2は、瓦質の羽釜である。鏝部分からほぼ直に立ち上がる口縁部をもち、端部は平坦をなしている。外面は2条の凹線、内面はハケ調整が施される。3は、土師質の羽釜である。かなり丸みを帯びた体部を持ち、鏝部分から口縁部に向かって内傾して立ち上がる。端部は平坦をなしている。外面は鏝部分より下方は横方向のヘラケズリ、上方はナデが施され、多くの煤が付着している。また、内面はすべてナデが施されている。8は、湊焼の甕である。やや小形の甕で、外面は粗いタタキ、内面は粗いハケ、口縁部はヨコナデが施される。6は、白磁の椀である。以上は、S D01上層の砂質系のシルト層から出土している。

4・5は、瓦質の挿鉢である。4は、摩滅が著しく挿目も失われている。5は、注ぎ口の部分である。同様に摩滅が著しい。7は、土錘である。以上は、S D01下層の粘質系のシルト層から出土している。

1は、瓦質の羽釜である。鏝部分から口縁部に向かって僅かに内傾して立ち上がり、端部は平坦である。外面鏝部上方には2条の凹線、下方はヘラケズリが施される。内面には僅かにハケ目が施される。S K02から出土している。

### 第3節 97-2区の調査

#### 1. 位置（第26・27図）

調査地は遺跡の北端部に位置し市道岡田駅上線の南側に面している。現在の岡田集落の北縁にあたる。周辺では近世から近代に属する遺構や遺物が良好に確認されている。地形分類状は低位段丘上に立地していると考えられている。

本調査区では調査区の北端部と中央部において試掘調査を実施し、その結果を受けて総延長90mを測る南北に長いL字形のトレンチを1カ所設定したものである。

#### 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 12・29）

調査区全体が工場地であったため工場建設に伴う攪乱が著しく、トレンチのほとんどすべての箇所が何らかの攪乱を受けているといった状況であった。また盛土や攪乱土を除去すると近代に属する煉瓦生産用粘土採掘坑が多く確認されたが、その土採りによって中世の包含層や元来の地形などはほとんどが失われている。

調査区全体に厚さ60cmほどの盛土が施されており、盛土を除去すると調査区の北端では旧耕作土と考えられる淡黄褐色混じり灰褐色土や暗褐色混じり灰褐色砂質土が良好に残っている。旧耕作土の下層には暗褐色系の土層が堆積しており、わずかに中世の遺物が出土している。しかし旧耕作土直下に地山である橙色粘土が拡がっているところもあり、先の包含層が削平を受けている箇所もあるようである。

トレンチの北端より18m程南へ進むと状況は一変し、ほぼ全域において近代の粘土採掘坑が確認される。それらの採掘坑はすべて人為的に埋戻されており、上層には耕作土が一様に拡がっていることから粘土採掘後も引き続き耕作地として利用されていたことがわかる。また粘土採掘坑の底部に残された起伏から、採掘坑間の前後関係が考えられるが、いずれも短期間で埋められており相互には時間的にそれほど間断は無かったものと考えられる。

また粘土採掘の行なわれていないトレンチの南端コーナー北側などでは、トレンチ北端部と同様に中世包含層や旧耕作土が良好に残存していることから、本来はこれらの土層は調査区一帯に拡がっていた可能性は十分に考えられるのである。これらのうち地山面において多くの遺構が確認された。地山面の標高は6.6mから7.0mを測り、南から北へ向かって緩やかに傾斜している。

#### 3. 遺構（P L. 12・29）

先にも述べた多くの粘土採掘坑のほか、中世の溝やピット、土坑、また近世の土坑や溝などである。以下に主なものについてみていくことにする。

調査区の北側において東西方向に平行して延びる2条の溝（S D01・02）が確認された。北側のS D01は東端はトレンチ外へと伸び、また西端は攪乱によって破壊されているため全貌は不明であるが、検出長2.8m、幅80cm、上面からの深さ50～70cmを測る。この溝は断面V字状に深く彫り込まれているが、北側では上面より40cmのところ幅15cmのテラスを有している。またこのテラス部分において地山が高さ10cm程の断面台形状に削り出されている部分もある。底面は平坦で、東側から西側に向かって緩やかに下がっている。覆土は上下に大きく2分され、上位には旧耕作土系の土層が堆積している。また下部



には灰白色粘土などがみられることから冠水状態にあったことが考えられる。

S D02はS D01の南側に平行して伸びる溝で、S D01との距離は心々間で2.1mを測る。S D01と同様に東西の端はトレンチ外へと伸びるため明らかではなく、また溝の南側の肩のほとんどを粘土採掘坑によって切られている。検出長3.5m、幅50～60cm、上面からの深さ20cmを測る。覆土はS D01の上位と同じ旧耕作土系の土層である。

これらの溝は平行してまったく同じ方向に伸びており、また溝と溝との間の平坦地にまったく遺構が認められず、またS D01の北側においては包含層が良好に残っているにも関わらず顕著な遺構が見当たらないなどのことから集落域や寺域などを区画するものであった可能性が考えられる。確証は得られなかったが両溝間の平坦地には土塁などの区画施設が存在した可能性も考えられよう。両溝の覆土より中世を中心とする遺物が出土した。特にS D02においては多量の河原石が含まれていた事が注目される。

S D03はトレンチの中央部において確認された溝で、東西方向に直線状に伸びるが、西側はS D04によって大きく切られている。検出長90cm、幅20cm、上面からの深さ15cmを測る。覆土は1層で暗灰褐色砂質土であり、炭を多く含んでいた。遺物は瓦質の播鉢（15）が出土した。

S D04はS D03の西側を切る溝である。東西両端部がトレンチ外へと伸びるため全容は不明である。トレンチの東端より北北東から南南西へと伸びる溝が途中屈曲して東西方向へと伸びるもので、検出長2.7m、幅20～90cm、上面からの深さ15cmを測る。覆土は一層であり暗灰褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

S K01はトレンチの中央部、S D03の東端より南へ約6mの地点で確認された土坑である。長軸を南西から北東方向へ向けた楕円形または長方形のプランが考えられるが、土坑の大半が東側のトレンチ外へと拡がっており、全貌は不明である。検出長2.5m、幅10～30cm、上面からの深さ10～20cmを測る。覆土は一層で暗灰褐色砂質土であり、中から多量の河原石と共に遺物が出土した。遺構の全体が不明であるため性格については判然としないが、土坑墓の可能性も考えられるものである。

S K02はトレンチの南端コーナー部分より約5.5m北側において確認された土坑である。西側がトレンチ外へと拡がっているため全貌は不明であるが、長軸を南西から北東方向へと向けた隅丸長方形のプランと考えられる。検出長2.9m、検出幅60cm、上面からの深さ20cmを測る。覆土は1層であり、黄褐色ブロック混じり灰褐色砂質土である。中から土師器の皿（18）が出土した。

S K01の南側約3mの地点で、切り合う2基のピット（Pit01・02）が確認された。直径40cm、深さ50cmを測るものである。覆土は1層で暗褐色混じり灰褐色粘土である。どちらも遺物は出土しなかった。また柱穴も確認されなかった。これらのピットは他のピット群と比較して、その覆土の状況より中世に属する可能性が非常に高いものである。

先述したようにトレンチのほぼ全域において粘土採掘坑と考えられる土坑が確認された。しかし度重なる採掘による切り合いがあり、個々に明確なプランを残すものは少ない。特にトレンチの南端コーナー部分より東側の部分についてはトレンチ全域がほぼ完全に採掘を受けているような状態であった。以下に代表的なものについて述べる。また粘土採掘坑は本来土坑として取り扱うべきではあるが、ここでは他の土坑と区別するために不明遺構（S X）として扱うこととする。

S X01はトレンチの北部において確認されたもので、掘方の北側はS D02の南半部を切っている。東西両端がトレンチ外へと拡がっているが、長軸を南東から北西方向へ向けたいびつな楕円形を呈するも

のであると考えられる。長さ約7m、検出幅3m、上面からの深さ60cmを測るものである。底面はおおむね平坦であるが、一部に切り合いの痕跡と考えられる凸部もあり、複数回の採掘によって現在の規模になっているようである。また掘方の北端部では工具痕が明瞭に残っている箇所もあった。それによると使用された工具は幅15cm程度のものであったと考えられる。

S X01の覆土は3～6層に分けられるが、いずれの層にも大きな差異は認められず、一様に埋め戻されている。また覆土の最上位には近代の耕作土と捉えられる層が拡がっており、埋め戻し後も間断なく耕作地として利用していたことが窺える。覆土より中世から近世を中心とする遺物が出土した。

S X02はトレンチの北端部より約9mの地点で確認された。西側を攪乱によって破壊されているため全形は不明であるが、長軸を南南東から北北西方向に向けたいびつな長方形を呈するものと考えられる。長さ5m、検出幅1.8m、上面からの深さ25～50cmを測る。覆土は1層で灰褐色砂であり、貝殻片などを含み海砂と考えられるものである。覆土より中世から近世を中心とする遺物が出土した。

#### 4. 遺物 (P.L. 14・36・37、第28図)

図示した遺物のうち、9～12・20・21はS D01より出土し、22・23はS D02、15はS D03、16・17はS K01、18はS K02、13・14・19・25・26はS X01、24はS X02より出土した。

9～14は瓦質の羽釜である。9は鏝部より口縁部まで内傾して立ち上り、端部は平坦に仕上げている。口縁部には3段の段を有し、鏝部以下の胴部外面はヘラケズリ、内面は口縁部には粗いハケ目が、口縁部以下には横方向のハケ目がそれぞれ施される。10は直線的な鏝を持ち、鏝部より口縁部まではやや内傾して立ち上がる。端部は平坦に仕上げる。口縁部には3段の段を有し、内面は粗いハケ目が施される。11は鏝部より口縁部まで内傾して立ち上がる。端部は平坦に仕上げる。口縁部の段は浅く、凹線状になる。内面にはハケ目が施される。12は鏝部より口縁部までは内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁部には3段の段を有する。軟質の製品で、内面は黄橙色を呈する。13は鏝部より口縁部まで直線的に立ち上がり、端部はやや外傾するものである。鏝部には強いナデが、内面にはハケ目が施される。また胴部には多量の煤が付着している。14は直線的な鏝部より口縁部まで大きく内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁端部に1条、口縁部に2条の凹線が巡る。全体に厚手で、また軟質の製品である。

15は瓦質土器の播鉢である。胴部より上を欠く。全体に摩滅しており、播目もかなり減っている。16は瓦質土器の小椀である。断面三角形の高台を持ち、底部より口縁部までわずかに内傾しながらも直線的に立ち上がる。内外面ともにナデが施されるが、内面は非常に滑らかに仕上げられる反面、外面の調整は粗い。

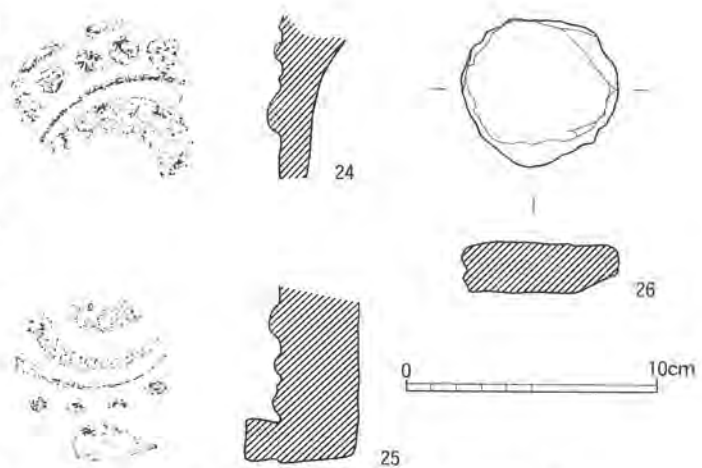
17・18は土師器皿である。17は復元口径7.6cmを測る。内外面ともにナデが施されるが、底部外面は未調整である。また内外面ともにわずかに黒斑が認められる。18は口径9cmを測り、底部よりやや外反しながら直線的に立ち上がる。口縁の一部に内外面とも煤が付着しており、灯明皿として使用されたものであろう。

19は須恵器の釣鐘形飯蛸壺である。胴部は内外面ともにヨコナデが施され、釣り手部はヘラケズリが施される。焼成は良好である。ほとんど摩滅しておらず、紐ずれなどの使用痕も認められない。

20～23は土師質真蛸壺である。20は直線的に立ち上がる胴部がわずかにふくらみ、外反する口縁部に

至る。口縁部の反りはややきつい。22は内傾する胴部から肩張りし、外反する口縁部を持つ。21・23はともに尖底であり、21には内外面ともに指頭圧痕が多く認められる。

24・25は軒丸瓦である。24は肉厚の右巴の尾部が圈線をなすと思われ、外区には密に珠文が配される。さらに外側には圈線が巡る。裏面はナデ調整である。25は右巴の周囲には小振りの珠文が配されるものである。外縁との間に圈線は認められない。瓦当面には糸切り痕が明瞭に残る。また裏面は粗いナデが施される。



第28図 岡田遺跡97-2区出土の遺物

26は円盤状土製品である。平瓦の転用によるもので直径6cmを測る。

#### 第4節 97-3区の調査

##### 1. 位置 (第26・27図)

調査区は97-2区の西側に近接している。地形分類上では洪積段丘低位面に立地している。トレンチは1カ所設定した。

##### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 11・30)

50~80cmの盛土の下には第2層・淡灰色土が部分的に確認され、第3層・マンガン混じり暗灰色土、第4層・黄褐色混じり灰色土とつづく。さらに下層では第5層・茶褐色混じり灰色土、第6層・マンガン混じり暗灰色土、第7層・マンガン混じり茶褐色土が堆積し、地山である明茶褐色粘土に至る。

##### 3. 遺構 (P.L. 11・30)

2面の遺構面を確認した。第1遺構面では第5・6層をベースとして溝1条 (S D01)、第2遺構面となる地山面で同じく溝1条 (S D02)を検出した。

S D01は北西-南東方向に延び、幅約40cm、深さ約10cmを測る。埋土は灰色粘土で、中世の所産となる丸瓦片が出土している。S D02は、幅約1.2m、深さ約30cmを測る。埋土は暗灰色土である。遺物の出土はなかった。

#### 第5節 97-4区の調査

##### 1. 位置 (第26・29図)

調査区は岡田遺跡のほぼ中央部で、当調査区の北西約60mの地点では市道改良工事に伴う大規模な調査が行われている。また、北東に約50mの地点ではこの数年の間に頻りに調査が行われており、近世・

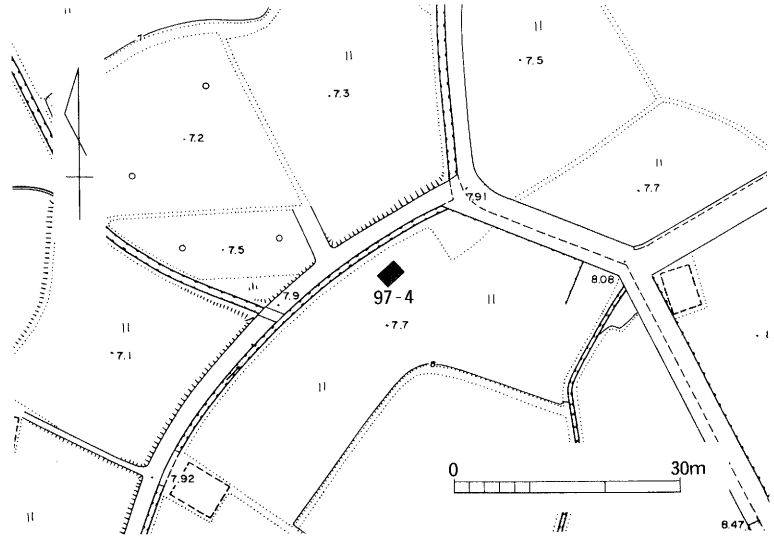
近代を中心とする粘土採取土坑などの遺構や瓦質土器や蛸壺などの遺物が出土している。地形分類上では低位段丘面上にあたると思われる。トレンチは1カ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況

(P L. 11・30)

約10cmの現代耕作土（I層）を除くと、II層・明赤褐色シルト（約5cm）、III層・茶褐色混じり灰白色粘質シルト（約10cm）、IV層・茶褐色混じり明褐色粘質シルト（約10cm）

がほぼ水平に堆積しており、地山である黄橙色粘土層とつづく。遺物はIV層より、須恵器・瓦器碗・蛸壺・平瓦の小片が出土しているが、図化し得るものではなかった。



第29図 岡田遺跡97-4区地形図

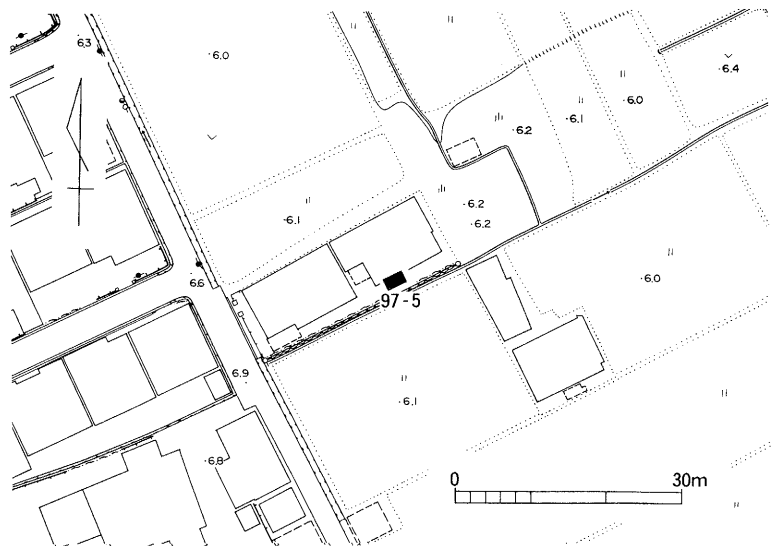
## 3. 遺構 (P L. 11・30)

地山面で明褐色砂の埋土をもつ土坑を2基 (S K01・02) 検出した。両方の土坑ともトレンチの外に拡がるため全形は不明である。S K01はトレンチの南西側で検出された。平面形は扇形を呈し、深さ約30cmを測る。断面形はゆるやかな碗形を呈する。S K02はトレンチの南東側で検出された。南北に長い楕円形を呈し、長辺約1.7m以上、短辺約50cm以上、深さ約35cmを測る。断面形は皿形を呈する。S K01・02とも遺物の出土が認められないため、その形成時期や性格等は不明であるが、粘土採取土坑の可能性が考えられる。

## 第6節 97-5区の調査

### 1. 位置 (第26・30図)

調査地は、遺跡の北西縁辺部に位置し、地形的には海岸部まで続く低位段丘面上に立地するものと考えられる。周辺は宅地となっているため、これまでの調査例はほとんど皆無であるが、最も近接した調査例は、北東約40mの市道中小路岡田樽井線新設に伴う調査があり、ほぼ同一の地形に立地しているものと考えられる。



第30図 岡田遺跡97-5区地形図

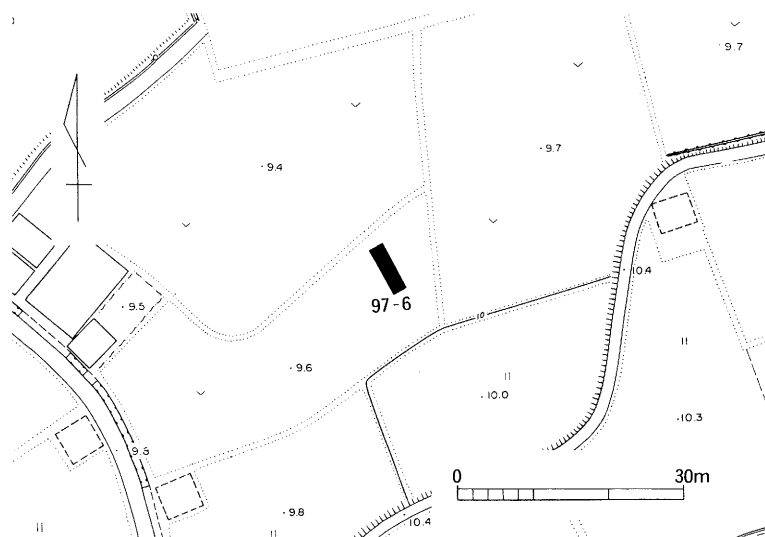
## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 11・30)

約45cmの盛土及び表土を除去すると、整地層と考えられる黄褐色粘性土シルト層が、約15cm確認された。この下層には、トレンチ南側では灰白色礫層の地山が確認されたが、北側部分では、灰褐色砂質シルト(約20cm)、にぶい褐色粘性シルト(約20cm)の層位を持つ北西方向への落ち込みが確認された。また、落ち込みの下層からは、大量の湧水にみまわれた。遺構・遺物は、いずれの層からも確認されなかった。

## 第7節 97-6区の調査

### 1. 位置(第26・31図)

調査地は岡田遺跡の中心からやや南側に位置し、市道中小路岡田樽井線の東側に隣接する地点である。岡田遺跡における既往の調査は岡田集落内およびその南側においてかなりの件数が行われているが、遺跡南縁部では数件の調査のみでその内容は明らかではない。調査地の現況は休耕地である。トレンチは1カ所設定した。



第31図 岡田遺跡97-6区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 11・31)

第1層・耕作土(約30cm)、第2層・灰色混じり褐色土(約10cm)、第3層・淡褐色混じり灰色土(約20cm)、第4層・灰色混じり暗褐色土(約10cm)、第5層・茶褐色混じり灰色土(約20cm)、第6層・明黄褐色混じり暗灰色土(約30cm)である。各層ともにほぼ水平に堆積している。地山は明黄褐色粘土で、標高が9.6m前後のほぼフラットの様相を呈する。第2層から第5層にかけては当遺跡の調査でよく確認される非常に軟弱な砂質系の土質で、地山からは湧水がともなう。明確に遺物包含層と確認されるのは第6層で、やや粘土質といった点で上層と異なっている。とり上げが不可能な程度の瓦器の極細片を少量包含している。地山面で精査を行ったが遺構は確認されなかった。

今回の調査では出土遺物の量などから、集落からやや離れた地点であることが伺えられた。

## 第8節 96-8区の調査

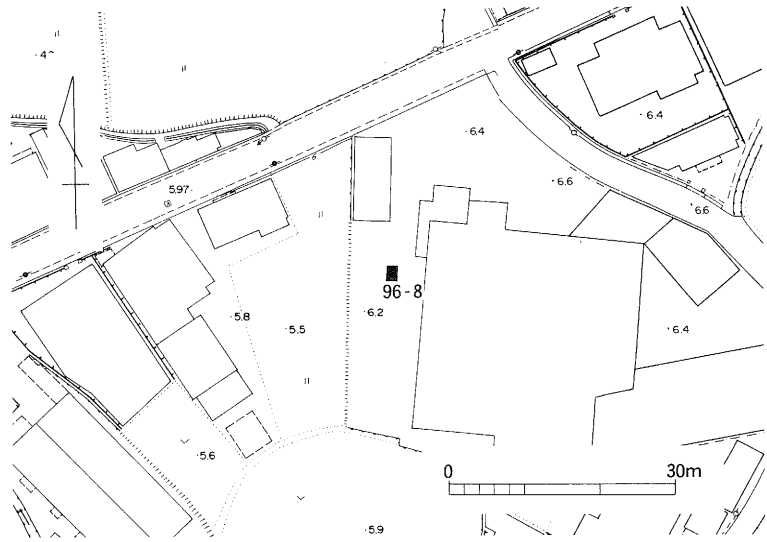
### 1. 位置(第26・32図)

調査地は岡田遺跡の北西部、現在の岡田集落の西のはずれに位置している。地形的には洪積段丘低位面の海へ向かって落ちる先端部に立地している。調査地の南側近接地において1993年度におこなわれた調査では、耕作にともなう杭跡が検出されている<sup>⑥</sup>。

## 2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 11・31)

第1層・表土(約30cm)の下に、10cmほどの暗褐色土(第2層)が認められ、第3層・暗黄褐色土(約10cm)、地山の明黄褐色土に至る。表土直下の暗褐色土に極少量の土師器細片が含まれるものの、明確な遺物包含層は確認できなかった。また、地山面で精査をおこなったが遺構は検出されなかった。



第32図 岡田遺跡96-8区地形図

- 註 ① 泉南市教育委員会「岡田遺跡90-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)  
② 泉南市教育委員会「岡田遺跡90-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)  
③ 泉南市教育委員会「岡田遺跡 既往の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)  
④ 泉南市教育委員会「岡田遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)  
⑤ 泉南市教育委員会「岡田遺跡94-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)  
⑥ 泉南市教育委員会「岡田遺跡93-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XI』(1994)

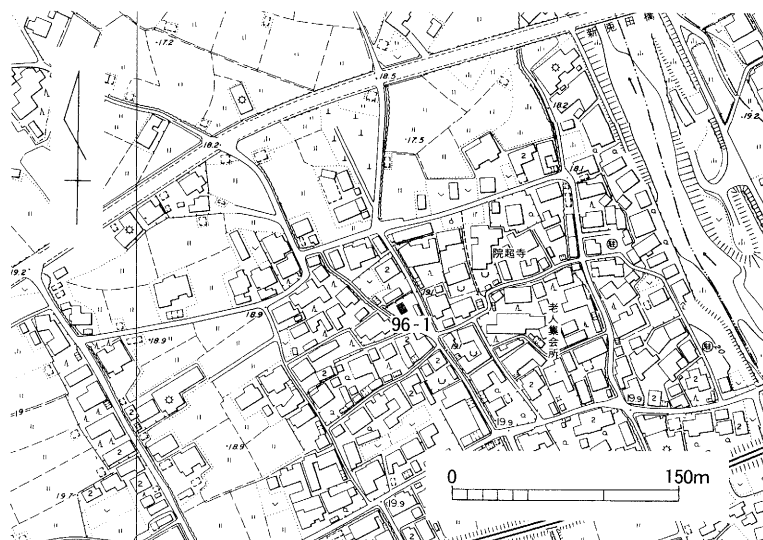
## 第12章 兎田遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P L. 1・2、第33図）

市域では基盤山地である和泉山脈から派生して、平野部へと伸びるいくつかの丘陵があるが、そのうちの一つである通称「榎井丘陵」の東側、榎井川の左岸に当遺跡は位置する。地形分類上では榎井川左岸においてはほとんど見られない沖積段丘や氾濫原上にあたると思われる。

当遺跡の発見は現在の集落内の開発に伴う試掘調査において、中世の包含層が確認されたのが契機であるが、<sup>①</sup>その後の調査例が少なく、その実態を把握するにはあまりにもデータ不足がいなめないのが現状である。

しかし、周辺には南から兎田古墳群、初期須恵器が出土したフキアゲ山古墳群、新家古墳群といった市域でも数少ない古墳群が展開している。また、榎井川の対岸には縄紋時代から中世にかけての複合遺跡である三軒屋遺跡などが見られ、<sup>③</sup>榎井川を中心に縄紋時代以降、活発な活動がなされており、それらの遺跡に囲まれた当遺跡がどのような結びつきをもつのか今後の調査が注目される。

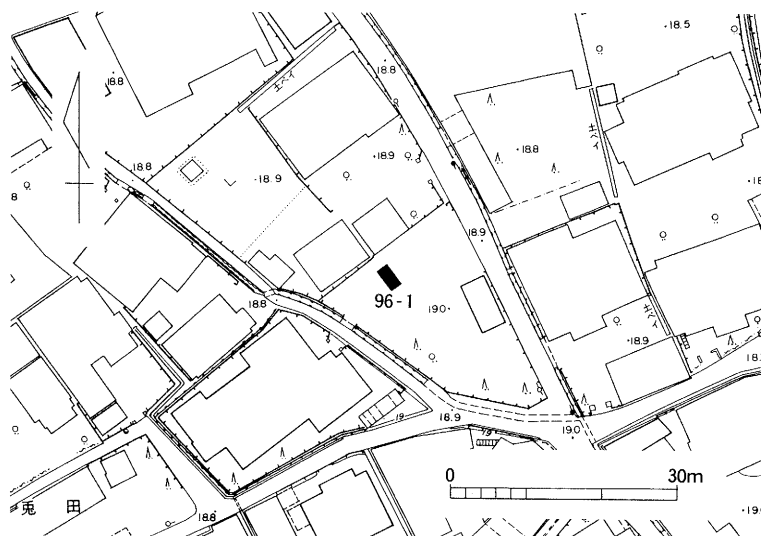


第33図 兎田遺跡調査区位置図

### 第2節 96-1区の調査

#### 1. 位置（第33・34図）

調査地は兎田遺跡の中央部、現在の兎田集落内に位置している。最近の調査では調査地の南西約50mにおいて、厚い整地層やピットが確認されており、さらに約100m南西のJR阪和線沿いの調査では、榎井川の氾濫原が当地にまで及んでいることや、瓦器の出土が認められている。<sup>④</sup>調査地は最近まで昭和初期に建てられた工場があり、それ以前は木造の住居が建っていたという。



第34図 兎田遺跡96-1区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 13・31)

盛土や旧工場の基礎を含む40cmほどの表土層(第1層)、第2層・暗褐色土(約20cm)、第3層・暗褐色混じり暗黄褐色土(約10cm)、第4層・灰色混じり明褐色土である。第4層の上面で遺構を検出した。

## 3. 遺構 (P L. 13・31)

検出した遺構は、溝(S D01)、ピットである。

S D01は幅約1mを測り、主軸はほぼ東西方向に向けられている。溝の両肩は人頭大の砂岩質の河原石を用いて護岸されており、南肩には2列、北肩は失われている部分が多いが残存する石から考えると1列配されるようである。それぞれの石の間には小石や瓦の細片を用いて堅固に構築されている。また南肩の石列は断面の観察から2段に積まれていた可能性が指摘される。この溝の性格であるが、埋土に盛土直下の暗褐色土が堆積していることや、深さが10cmと非常に浅いこと、頻繁に流水していたとは考えにくいことなどから、旧建物に伴う雨落ち溝の可能性が考えられる。溝内からは近世の陶磁器・瓦などが出土している。

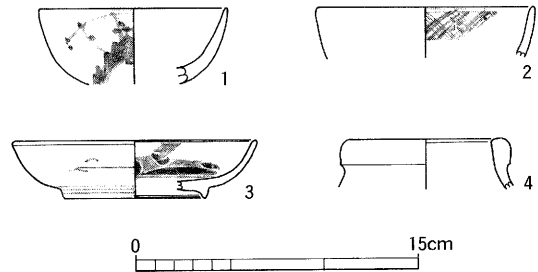
ピットは5基を確認した。平面は円形ないし楕円形を呈し、深さ10cm程度を測る。埋土はすべて暗灰色土で、Pit01から近世の平瓦が出土している。

## 4. 遺物 (P L. 38、第35図)

図示した遺物はすべてS D01から出土している。

1～3は波佐見焼系の磁器碗である。1は外面に草花紋を描く。復元口径9.9cm。2は内面口縁部に幾何学紋を巡らす。復元口径11.4cmを測る。3は復元口径12.8cm、器高3cm、高台径7cmを測る。置付は露胎である。

4は陶器の小壺である。復元口径8cmを測る。



第35図 兎田遺跡96-1区出土の遺物

- 註 ① 泉南市教育委員会「兎田遺跡 既往の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』(1990)  
② 泉南市史編纂委員会「考古・古代 第1章 原始の泉南」『泉南市史-通史編一』(1987)  
③ ②と同じ。  
④ 泉南市教育委員会「兎田遺跡95-1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』(1996)



## 第13章 新家遺跡の調査

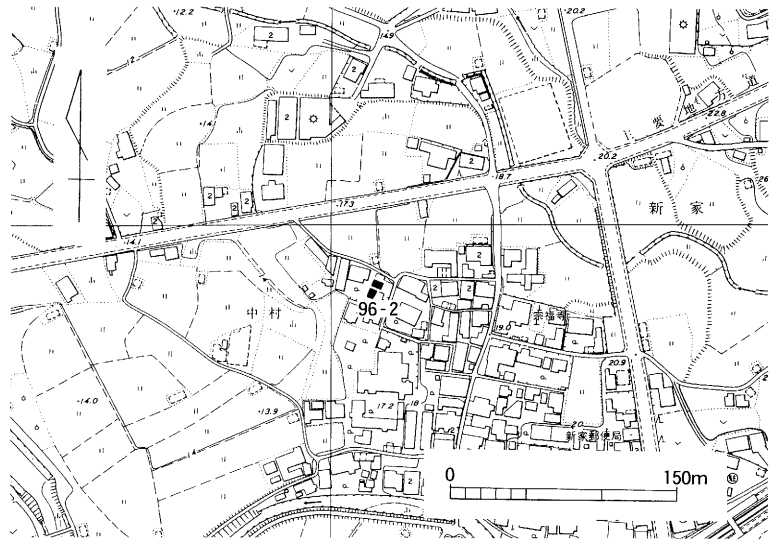
### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第36図）

新家遺跡は市域の東南部、新家川の右岸に位置し、地形分類上は沖積段丘低位面にあたる。周辺の丘陵に目をやると弥生時代の集落遺跡である新家オドリ山遺跡を中心とする遺跡群や、新家古墳群を中心とする多くの古墳群が存在する。

当遺跡を含む「新家」地区は、中世には「新家谷」と呼ばれ、地元に残存する『日輪山清明寺代々記并三谷古記』には、13世紀末から16世紀末までの「新家谷」における宗教施設の興廃・移転や、村の開発状況、戦争や飢饉の被害による農民の生活の様子などが客観的かつ簡潔に記述されている<sup>①</sup>。

当遺跡は1985年の試掘調査によって、弥生時代中期の遺物が多量に含まれる溝や、竪穴住居の可能性のある落ち込みが確認され、遺跡として周知されることとなった。また、同調査区における本調査において、中世の石組を伴う池状遺構やピット群が確認されている<sup>②</sup>。しかし、これ以降の調査は極めて少なく、弥生時代や古代の遺物包含層の拡がり確認されたのみである<sup>③</sup>。

当遺跡の調査はまだ始まったばかりで、今後のデータの増加を期待しなければならないが、いまだに良好な歴史情報が保存されていると思われ、周辺の遺跡との有機的関連や中世の「新家谷」の繁栄をふまえた調査・研究が期待される。

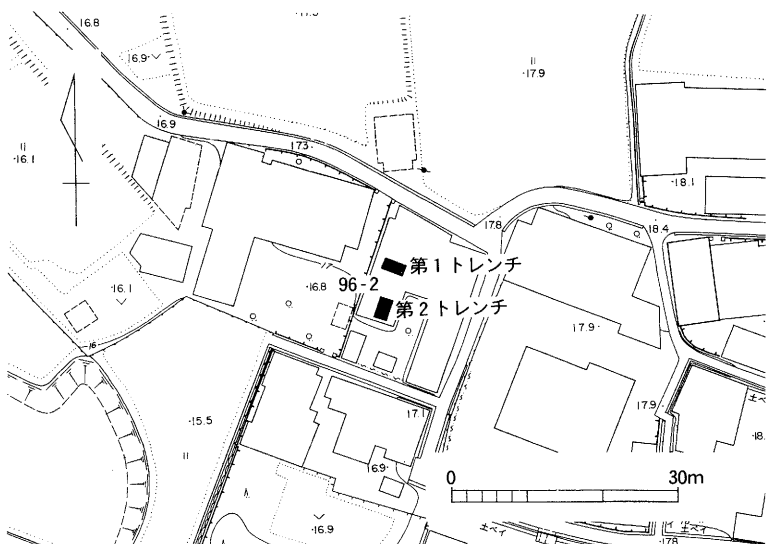


第36図 新家遺跡調査区位置図

### 第2節 96-2区の調査

#### 1. 位置（第36・37図）

調査区は現在の新家集落の西端にあたり、1985年に弥生時代の遺構が確認された地点より、南西に約180mの地点にあたる。地形分類上では、洪積段丘低位面にあたる。トレンチは2カ所設定した。



第37図 新家遺跡96-2区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 13・32）

第1トレンチの基本層位は約10cmの盛土を除くと、明茶色シルト、にぶい茶褐色シルト、灰色砂混じり黄褐色シルト、明黄褐色シルトなどが約20cmにわたり複雑に堆積していた。ここでは近世の所産である磁器、軒瓦などの小片が出土した。さらににぶい灰色シルトが約20cmにわたり堆積しており、さらに下層には明茶褐色シルト、灰色砂混じり黄褐色粘質シルト、灰色茶褐色シルト、灰色砂、茶褐色混じり灰色粘質シルトなどが約40cmにわたり堆積していた。灰色茶褐色シルトからは土師器や須恵器の小片が出土した。さらに暗褐色シルト（約10cm）、黒褐色粘質土（約30cm）、地山である黄褐色礫に至る。黒褐色粘質土からは弥生土器（中期後半から後期）の小片が出土した。

第2トレンチの基本層位は約20cmの盛土を除くと明茶色シルト、明黄褐色シルト、にぶい茶褐色シルトなどが約30cmにわたり複雑に堆積していた。ここでは近世の所産である磁器の小片が出土した。さらに下層には、にぶい灰色シルトが約10cmにわたり堆積しており、以下、明茶褐色シルト、黄色粘土、にぶい黄色粘質シルト、灰色砂混じり明茶褐色シルトなどが約20cmにわたり複雑に堆積していた。その直下ににぶい暗褐色粘質シルト（約20cm）、黒褐色粘質シルト（約40cm）がつづき、地山である黄褐色礫に至る。遺物は黒褐色粘質シルトから弥生土器（中期後半から後期）が多く出土した。

## 3. 遺構（P L. 13・32）

第1トレンチではにぶい灰色シルトをベースとする面でピット2基（Pit01・02）を検出した。

Pit01の平面形は円形で直径約15cm、中心に直径約8cmの柱痕をもち、深さ6cmであった。掘方の埋土は灰色砂混じり黄褐色シルト、柱痕の埋土は暗灰色砂であった。掘方より近世の磁器の小片が出土した。Pit02の平面形は円形で直径約20cm、深さ約20cmを測り、底部に径約15cmの礫が確認された。埋土は灰色砂で、遺物は出土しなかった。

第2トレンチではにぶい灰色シルトをベースとする面（上層）でピット5基を検出した。ピットは直径5～15cm、深さは3～10cm、平面形は円形や楕円形を呈しており、埋土はにぶい灰褐色土であった。地山をベースとする面（下層）で落ち込み状の遺構（S X01）を検出した。S X01はトレンチ北端より約50cmの部分から南西方向に緩やかに落ちており、深さ2m以上を測る。埋土は礫混じり暗褐色粘質シルトである。

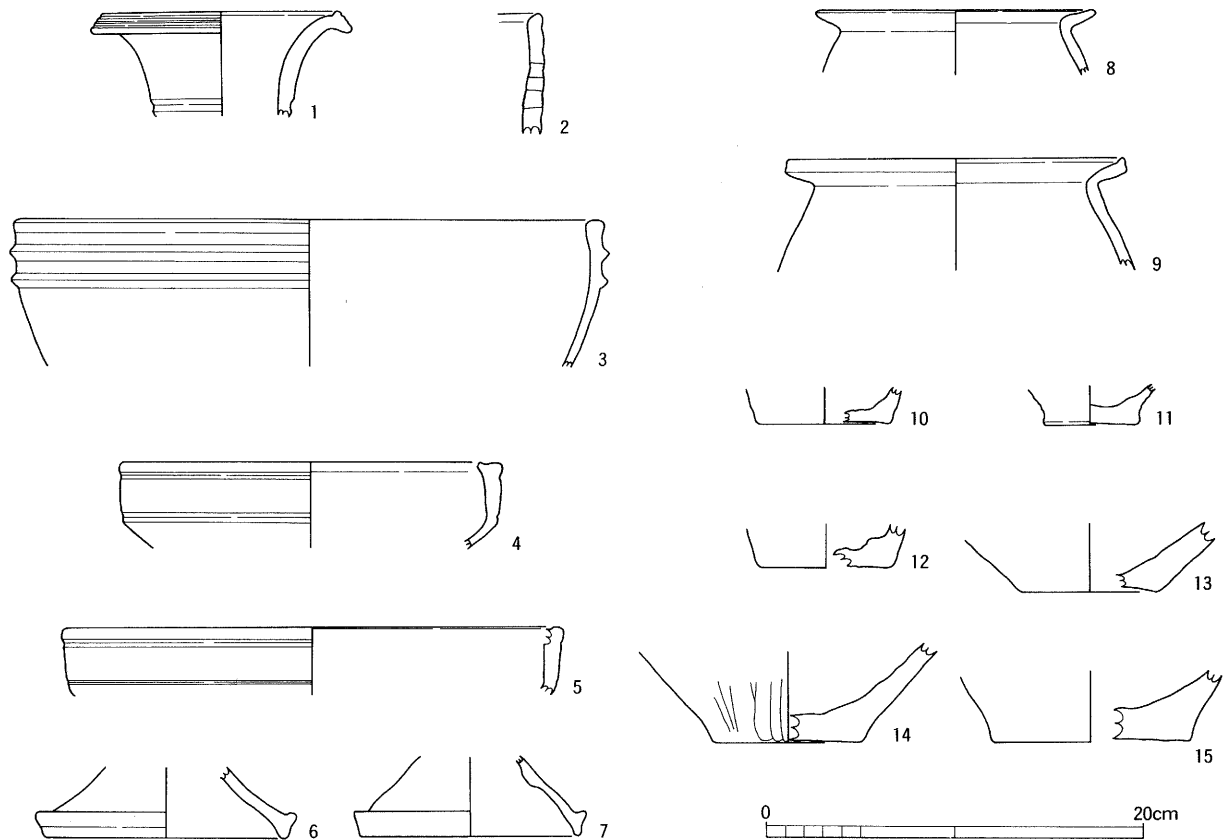
## 4. 遺物（P L. 38、第38図）

今回の調査全体で、コンテナ約2箱の遺物が出土している。その種類は弥生土器、土師器から青磁器、軒瓦まで多期、多種にわたる。しかし、その約90%が第2トレンチから出土した弥生土器で、そのほとんどが黒褐色粘質シルトから出土した。

1は壺である。頸部から大きく外反し、垂下する口縁部で、口縁端部は上方につまみあげられている。口縁外面は凹線紋を3条有する。また頸部には凹線紋を1条有する。色調は外面と断面は灰白色、内面は明褐色を呈す。復元口径は12.4cmを測る。

2はほぼまっすぐに立ち上がる直口の壺であろう。口縁部には凹線紋が5条認められ、口縁端部より上から3条目と4条目にはそれぞれ直径約1cmの孔を穿つ。色調は浅黄橙色を呈する。

3は鉢である。口縁部から体部にかけてなだらかに内弯している。口縁端部は肥厚し、平らな面を持



第38図 新家遺跡96-2区出土の弥生土器

つ。体部には2本の貼付突帯を有する。色調は外・内面ともに浅黄橙色、断面は灰白色を呈している。復元口径は30.8cmを測る。

4～7は高杯である。4・5は杯部、6・7は脚部である。

4は、口縁端部は内側に肥厚し、平らな面をもち、凹線紋を1条有している。体部外面には凹線紋を2条有する。色調は外面は橙色、内面は橙色、断面は灰白色を呈している。復元口径は19.4cmを測る。5は4と同様であるが、口縁端部には凹線紋は認められない。外面は灰白色、内面は橙色、断面は灰白色を呈している。復元口径は25.6cmを測る。

6は大きく外方に拡がる裾部をもち、裾端部は肥厚し、平らな面をもち、上方につまみあげられている。色調は外面が黄橙色と灰色、内・断面は浅黄橙色を呈している。復元底径は12.5cmを測る。7は6と同様であるが、裾端部は6に比べシャープにつまみあげられている。色調は外面は灰白色を呈しており、内・断面は浅黄橙色を呈している。復元底径は11.4cmを測る。

8・9は甕の口縁部である。8は頸部から口縁部に向かって「く」の字型に屈曲して外反し、口縁端部は丸く、上方にわずかではあるがつまみあげられている。調整方法は頸部にヨコナデが施されている。色調は外面がにぶい黄橙色、内面は灰白色、断面は浅黄橙色を呈している。復元口径は14.0cmを測る。9は8と同様であるが、口縁端部は8に比べ若干肥厚している。またつまみあげも8よりはっきり認められる。調整方法は頸部にヨコナデが施されている。復元口径は17.6cmを測る。

10～15は底部である。小片のため不明ではあるが、10・11は甕、12～15は壺であろう。10は平底を呈し、調整方法は摩耗のため不明である。胎土はおそらく紀州系である。色調はにぶい黄橙色、内面は灰

黄褐色、断面は灰黄褐色を呈している。復元底径は6.2cmを測る。11は平底を呈し、調整方法は外面にヘラミガキが施されている。色調は外面は浅黄橙色、内面は灰色、断面は暗灰色とにぶい橙色を呈している。復元底径は4.8cmを測る。12は平底を呈し、色調は外面は橙色、内面はにぶい黄橙色、断面は灰黄褐色を呈している。復元底径は7.8cmを測る。13は平底を呈し、色調は外面はにぶい橙色、内・断面は浅黄橙色を呈している。復元底径は7cmを測る。14は平底を呈し、調整方法は外面にヘラミガキ、内面にはナデが施されている。色調は外面が浅黄橙色、内面は、にぶい橙色、断面は灰白色を呈している。15は平底を呈し、色調は外面は橙色、内面は浅黄橙色、断面はにぶい橙色を呈している。復元底径は10.2cmである。

- 註 ① 泉南市史編纂委員会「古代・中世 第3章 戦国時代の泉南」『泉南市史—通史編—』（1987）  
② 泉南市教育委員会「新家遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）  
③ 泉南市教育委員会「新家遺跡91-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）

## 第14章 まとめ

平成9年度の文化財保護法に基づいた埋蔵文化財包蔵地内における発掘届出および通知は、第1表に示したとおり平成9年2月1日から平成9年12月31日までで65件を数える。

この中で本書で報告する市内遺跡群の各地における個人住宅等に伴う発掘調査は、32件である。その内訳は、第2表に示したとおり、男里遺跡5件、戎畑遺跡16件、天神ノ森遺跡1件、専徳寺遺跡1件、幡代遺跡1件、岡中遺跡1件、上代石塚遺跡1件、岡田遺跡6件である。これらの調査面積は、比較的小規模なものが多いが、個々の調査で得られた情報はそれぞれ大きな意味を持つものであることは言うまでもない。

なお、本書では前年度未報告分の男里遺跡3件(97-17~19区)、光平寺跡1件(96-1区)、幡代遺跡2件(97-1・2区)、長山遺跡1件(96-1区)、岡田遺跡1件(96-8区)、兎田遺跡1件(96-1区)、新家遺跡1件(96-2区)も併せて報告している。以下、今年度に得られた成果と過去のデータ等を比較しながらまとめをおこなってみたい。

男里遺跡においては、毎年継続的に調査がおこなわれており、特にこの数年で得られた情報は、当遺跡が市内のみならず、泉南地域の歴史を明らかにする上で計り知れない重要な位置を占めていることを示している。

96-1区の調査は、現在の男里集落のほぼ中央部における調査である。周辺ではこれまで中世から近世を中心とした遺構・遺物が確認されていたが、本調査では庄内式併行期の遺物が遺構にもなって出土した。昨年度の本調査区西側の調査<sup>①</sup>とともに、当該期の集落が調査区周辺に存在するデータを追加することができた。

97-2区は、遺跡の北西部における調査である。落ち込み状の遺構から製糖に使用されたと考えられる遺物が多量に出土した<sup>②</sup>。近世後期において泉南地域は、甘蔗栽培が盛んにおこなわれ、砂糖の一大生産地であった。本調査では近世産業の実態を考える上で貴重な資料を得ることができた。

97-3区の調査は、これまであまり調査例がない遺跡北端部の地点である。中世の所産となる遺構の確認は、当該期の土地開発が調査区周辺にまで及んでいたことが明らかとなった。

97-4区は、双子下池北西部における調査である。双子下池では近年の調査で古代の流路が複数検出されているが<sup>③</sup>、本調査区においてその流路の方向が確認された意義は大きい。また、中世以降、耕作地として利用されていたことが判明し、遺跡内における当該期の生産域を考える上で大きな成果を得ることができた。

97-5区は、遺跡北東部における調査である。本調査区では時期は明らかではないものの複数の耕作面が確認されたことは、周辺が長期間において生産域であったことを窺わせるものである。

96-17区では、遺跡北部から東部にかけて広く分布する黒褐色系の粘性土層が大きく削平されていることが判明した。このことは中世における土地開発が大規模且つ広範囲におこなわれた可能性を示唆するものである。今後の周辺の調査では留意しなければならない点であろう。

96-18区は、遺跡北部、96-19区は男里川の堤防に近接した地点の調査である。両調査区ともに限定的ではあるが周辺の旧地形を知るデータを得ることができた。

光平寺跡の調査では、中世寺院に直接関連する遺構は検出されなかったが、中世の遺物包含層の存在

が確認されたことは、その拡がりを知り得る有益な情報となった。

戎畑遺跡では、今年度最も多くの調査がおこなわれた。大部分が平成7年度から8年度にかけておこなわれ、大規模な集落や灌漑水路、20基にもおよぶ真蛸壺焼成坑が確認された95-1区周辺の調査であるが、97-1区の調査で検出された溝は、集落範囲がさらに南西に拡がることを示す成果となった。97-3・13区で検出した土器焼成土坑は真蛸壺を生産していたものと考えられ、今後さらにその数が追加されることを推測させるものである。また、97-3区のSK02はこれまで確認されているものとはやや様相を異にし、出土遺物から黒色土器の生産を目的とした焼成坑である可能性が高い。今後、その構造とともに供給先・消費地などを視野にいれた検討が必要とされる。97-4～6区および16区周辺では顕著な遺構は確認されず、集落の拡がりや土地利用の状況を確認する資料を獲得することができた。

天神ノ森遺跡では、今年度1件の調査がおこなわれた。調査地は遺跡の北東部に位置し、これまであまり調査がおこなわれていない地点であるが、既往の調査と同様に礫層が確認されたことによって、氾濫原の拡がりや把握するデータを補強することとなった。しかし、遺物包含層は認められず、その分布範囲の追求は今後の課題となった。

専徳寺遺跡は、今年度、開発工事に伴う試掘調査によって新たに発見された遺跡である。専徳寺の創建に関連するものではないが、近世の日常雑器である遺物を図化することができた。遺跡は現在の樽井集落内に位置しているが、当集落の形成時期やその展開などは不明な点が多く、今後は専徳寺や遺跡周辺に所在する他の寺院との関連とともに大きな課題となろう。また、当遺跡は市内でも数少ない洪積段丘中位面に立地する遺跡として重要である。

幡代遺跡は、毎年継続的に数件の調査がおこなわれ、着実にデータが蓄積されている遺跡である。これまでの調査において、中世の時期に寺院を中心として集落が展開したと考えられている。また、現在の集落内においては、比較的安定した地山面とともに遺構・遺物が確認される地点と、砂礫層などの不安定な氾濫原の様相を呈する地点が至近距離において確認されており、その複雑な地形上に集落が立地していることが判明している。97-1・2区は現在の集落内、96-2区は集落の北端部における調査である。

97-1区では、中世の遺物包含層が確認された。このことは当該期にはすでに調査区周辺に開発が及んでいたことを示唆している。一方、96-1区では居住に適さない場所を近世以降、軟弱な地盤に整地を施し、集落の拡大をおこなっていることが確認された。96-2区は遺構・遺物が確認されないことから、集落の中心からやや離れた地点と考えられる。以上、今年度における幡代遺跡の調査で得られた知見は、集落の発生やその展開を考える上で有益な情報となるであろう。

岡中遺跡では、今年度1件の調査が遺跡の南部においておこなわれ、いまだ不明確な中世集落の生産域を知る上で大きな手がかりとなった。

長山遺跡は、過去2例の調査がおこなわれたが、中世以降の耕作に伴う遺構が確認されたのみで、その内容は不明な点が多い。今年度は過去の調査地に隣接する地点の調査である。遺構は確認されなかったが、既往の調査と同じく、中世の耕作地として利用されていたことが明らかになった。今後は当該期の集落の追求が検討課題である。

上代石塚遺跡は、市内中央部に大きく拡がる洪積段丘低位面に立地する数少ない遺跡のひとつである。分布調査によってその存在が確認されたものの、実態はまったく不明であった。しかし近年の大規模店

舗の建設に伴って調査がおこなわれ、灌漑用と考えられる大規模な溝が検出されている。今年度調査はこの溝の西側約50mの地点でおこなった。検出した遺構は耕作に伴う鋤溝であったが、これまで未開発地域であった調査地周辺を溝によって灌漑し、開発されていた状況を示すものであろう。

岡田遺跡は市内において男里遺跡に次ぐ規模を誇る遺跡である。既往の調査によって中世に大きく展開した遺跡と考えられるが、集落の位置や範囲を確定する資料は不十分な状況であった。しかし、今年度の調査の97-1・2区では、中世を中心とした溝などの遺構とともに多量の遺物が出土した。これらは調査地周辺のそれほど離れていない地点に集落の存在を窺わせる資料となった。また、岡田遺跡の西部周辺で頻繁に確認される煉瓦生産用の粘土採掘坑が、本調査区および97-4区においても認められたことによって、今まで考えられていた以上にその範囲が大規模に拡がることを裏づける結果を得ることができた。

97-5区は、遺跡の北西縁辺部の調査である。遺構や遺物は確認できなかったが、北西方向の落ち込みは、今後周辺の旧地形を復元する上で有意義なデータであろう。

97-6区は、遺跡の南縁部、96-8区は北西部に位置し、ともにこれまで調査例が少ない地点である。本年度の調査で認められた遺物包含層の存在やその堆積の状況は、今後遺跡の範囲や土地利用の実態を確認する上で大きな手がかりとなるであろう。

兎田遺跡は、市域の東部、樫井川左岸に立地する遺跡である。これまでのところ、遺跡内における調査はそれほど多くはないものの、現在の兎田集落の初源を中世の時期に求められる成果をあげている<sup>④</sup>。本年度の調査では、遺跡内においてはじめて近世の遺構・遺物<sup>④</sup>が検出され、遺跡の内容の一端が明らかにされた。

新家遺跡は樫井川の支流である新家川の右岸に立地する遺跡である。新家川流域では、向井山遺跡や下村遺跡などの弥生時代中期の遺跡が集中し、当遺跡もそのひとつに数えられている。本年度調査では落ち込み状の遺構から弥生時代中期の土器が多量に出土し、当遺跡が市域東部の弥生時代を語る上で重要な位置にあることが再認識された。

以上、今年度における調査のまとめをおこなってきた。しかし、いずれも小範囲の調査のため、各遺跡のもつ豊饒な歴史のほんの一部を明らかにしたにすぎない。今後新たな遺跡の発見や歴史的情報の増加とともに、調査担当者の我々は、歴史の代弁者としての一翼を担っていることを再認識し、今後の調査に臨まなければならない。

註 ① 泉南市教育委員会「男里遺跡96-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』（1997）

② これらの製糖に使われていたと考えられる土器は、近年泉州南部における遺跡で相次いで検出されている。（泉佐野市岡本廃寺、阪南市貝掛遺跡など）しかし、今回出土した土器と、阪南市内出土の土器を比較したところ、胎土および焼成にかなり違いあることが確認された。このことは土器の生産が一元的なものではなく、各集落ごとの多角的な生産をおこなっていた可能性が考えられる。（遺物の実見は、阪南市教育委員会 三好義三氏にご配慮頂いた。）

③ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概報・Ⅰ』（1997）

大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概報・Ⅱ』（1997）

④ 泉南市教育委員会「兎田遺跡95-1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』（1996）

第5表 文化財一覧表

1	正法寺跡	46	北ノ前遺跡	91	櫻井西遺跡	136	新家古墳群	181	林昌寺跡
2	小垣内遺跡	47	野々宮遺跡	92	藤波遺跡	137	新家オドリ山南遺跡	182	林昌寺瓦窯跡
3	大谷池遺跡	48	総福寺天満宮本殿	93	櫻井城跡	138	フキアゲ山西遺跡	183	林昌寺銅鐸出土地
4	大久保B遺跡	49	宮ノ前遺跡	94	奥家住宅	139	引谷池窯跡	184	岡中遺跡
5	下高田遺跡	50	垣外遺跡	95	道ノ池遺跡	140	兔田遺跡	185	高田山古墳群
6	紺屋遺跡	51	屯田遺跡	96	岡ノ崎遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	186	岡中西遺跡
7	口無池遺跡	52	八王子遺跡	97	中菖蒲遺跡	142	フキアゲ山1号墳	187	雨山南遺跡
8	東門寺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	98	岸ノ下遺跡	143	フキアゲ山2号墳	188	福島遺跡
9	降井家屋敷跡	54	日根神社遺跡	99	諸目遺跡	144	兔田古墳群	189	尾崎海岸遺跡
10	大久保C遺跡	55	西ノ上遺跡	100	城ノ塚古墳	145	池尻遺跡	190	馬川北遺跡
11	中家住宅	56	川原遺跡	101	禪興寺跡	146	中の川遺跡	191	馬川遺跡
12	大久保A遺跡	57	母山遺跡	102	ダイジョウウ寺跡	147	岩の前遺跡	192	下出北遺跡
13	五門北古墳	58	母山近世墓地	103	上之郷遺跡	148	別所北遺跡	193	室堂遺跡
14	五門遺跡	59	向井山遺跡	104	向井代遺跡	149	別所遺跡	194	平野寺(長楽寺)跡
15	五門古墳	60	鏡塚古墳	105	意賀美神社本殿	150	高野遺跡	195	向出遺跡
16	大浦中世墓地	61	梨谷遺跡	106	向井池遺跡	151	昭和池遺跡	196	高田西遺跡
17	大浦遺跡	62	笹ノ山遺跡	107	三軒屋遺跡	152	上村遺跡	197	向山遺跡
18	甲田家住宅	63	土丸遺跡	108	川原遺跡	153	狐池遺跡	198	高田南遺跡
19	久保B遺跡	64	土丸南遺跡	109	岡田東遺跡	154	上野中道遺跡	199	和泉鳥取遺跡
20	鳥羽殿城跡	65	雨山城跡	110	岡田遺跡	155	芋掘遺跡	200	雨山遺跡
21	墓の谷遺跡	66	土丸城跡	111	氏の松遺跡	156	石ヶ原遺跡	201	内畑遺跡
22	来迎寺本堂	67	下大木遺跡	112	座頭池遺跡	157	高倉山南遺跡	202	皿田池古墳
23	池ノ谷遺跡	68	大木遺跡	113	岡田西遺跡	158	本田池遺跡	203	正方寺遺跡
24	成合寺遺跡	69	稲倉池北方遺跡	114	新伝寺遺跡	159	上代石塚遺跡	204	西畑遺跡
25	山ノ下城跡	70	大西遺跡	115	中小路北遺跡	160	信之池遺跡	205	自然田遺跡
26	山出遺跡	71	松原遺跡	116	中小路西遺跡	161	滑瀬遺跡	206	玉田山遺跡
27	上瓦屋遺跡	72	中開遺跡	117	中小路遺跡	162	六尾遺跡	207	玉田山古墳群
28	湊遺跡	73	末廣遺跡	118	坊主池遺跡	163	六尾南遺跡	208	玉田山須恵器窯跡
29	壇波羅密寺跡	74	安松遺跡	119	中小路南遺跡	164	専徳寺遺跡	209	寺田山遺跡
30	壇波羅遺跡	75	長滝遺跡	120	北野遺跡	165	天神ノ森遺跡	210	黒田西遺跡
31	佐野王子跡	76	植田池遺跡	121	一岡神社遺跡	166	キレット遺跡	211	鳥取北遺跡
32	上町東遺跡	77	郷ノ芝遺跡	122	海会寺跡	167	高田遺跡	212	鳥取遺跡
33	市場東遺跡	78	日根野遺跡	123	海会寺瓦窯	168	男里北遺跡	213	鳥取南遺跡
34	若宮遺跡	79	机場遺跡	124	大苗代遺跡	169	戎畑遺跡	214	黒田南遺跡
35	上町遺跡	80	棚原遺跡	125	仏性寺跡	170	男里遺跡	215	神光寺(蓮池)遺跡
36	俵屋遺跡	81	羽倉崎東遺跡	126	海宮宮池遺跡	171	光平寺跡	216	三味谷遺跡
37	北尻遺跡	82	羽倉崎遺跡	127	市場遺跡	172	光平寺石造五輪塔	217	三升五合山遺跡
38	岡口遺跡	83	嘉祥神社本殿	128	向井山遺跡	173	樽井南遺跡	218	小口谷遺跡
39	中嶋遺跡	84	道ノ池遺跡	129	新家遺跡	174	男里東遺跡	219	井関遺跡
40	小塚遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	130	下村遺跡	175	長山遺跡	220	石田山遺跡
41	十二谷遺跡	86	船岡山遺跡	131	下村北遺跡	176	山ノ宮遺跡	221	西鳥取遺跡
42	丁田遺跡	87	岡本庵寺	132	下村1号墳	177	前田池遺跡	222	戎遺跡
43	新池尻遺跡	88	田尻遺跡	133	新家オドリ山東遺跡	178	幡代遺跡	223	貝掛遺跡
44	大坪遺跡	89	船岡山南遺跡	134	新家オドリ山遺跡	179	幡代南遺跡	224	金剛寺遺跡
45	市堂遺跡	90	夫婦池遺跡	135	下村2号墳	180	奥ノ池遺跡	225	塚谷古墳群



# SENNANSI-ISEKIGUN-HAKKUTUTYÔSA-HOUKOKUSHYO Ⅳ

## SENNANSI-BUNKAZAI-TYÔSA-HOUKOKUSYO VOL.31

A Report on Archaeological Research at Sennan City in 1997

---

### C o n t e n t s

Preface

Chapter 1	Process of Research Work .....	1
2	Research of ONOSATO site .....	6
3	Research of The Ruin of KÔHEIJI Temple .....	16
4	Research of EBISUBATA site .....	17
5	Research of TENJIN—NO—MORI site .....	30
6	Research of SENTOKUJI site .....	31
7	Research of HATASIRO site .....	33
8	Research of OKANAKA site .....	37
9	Research of NAGAYAMA site .....	39
10	Research of JYÔDAI—ISIDUKA site .....	41
11	Research of OKADA site .....	43
12	Research of USAIDA site .....	53
13	Research of SINGE site .....	55
14	Conclusion .....	59

Abstract of Report

Plates

S e n n a n M u n i c i p a l B o a r d o f E d u c a t i o n ,

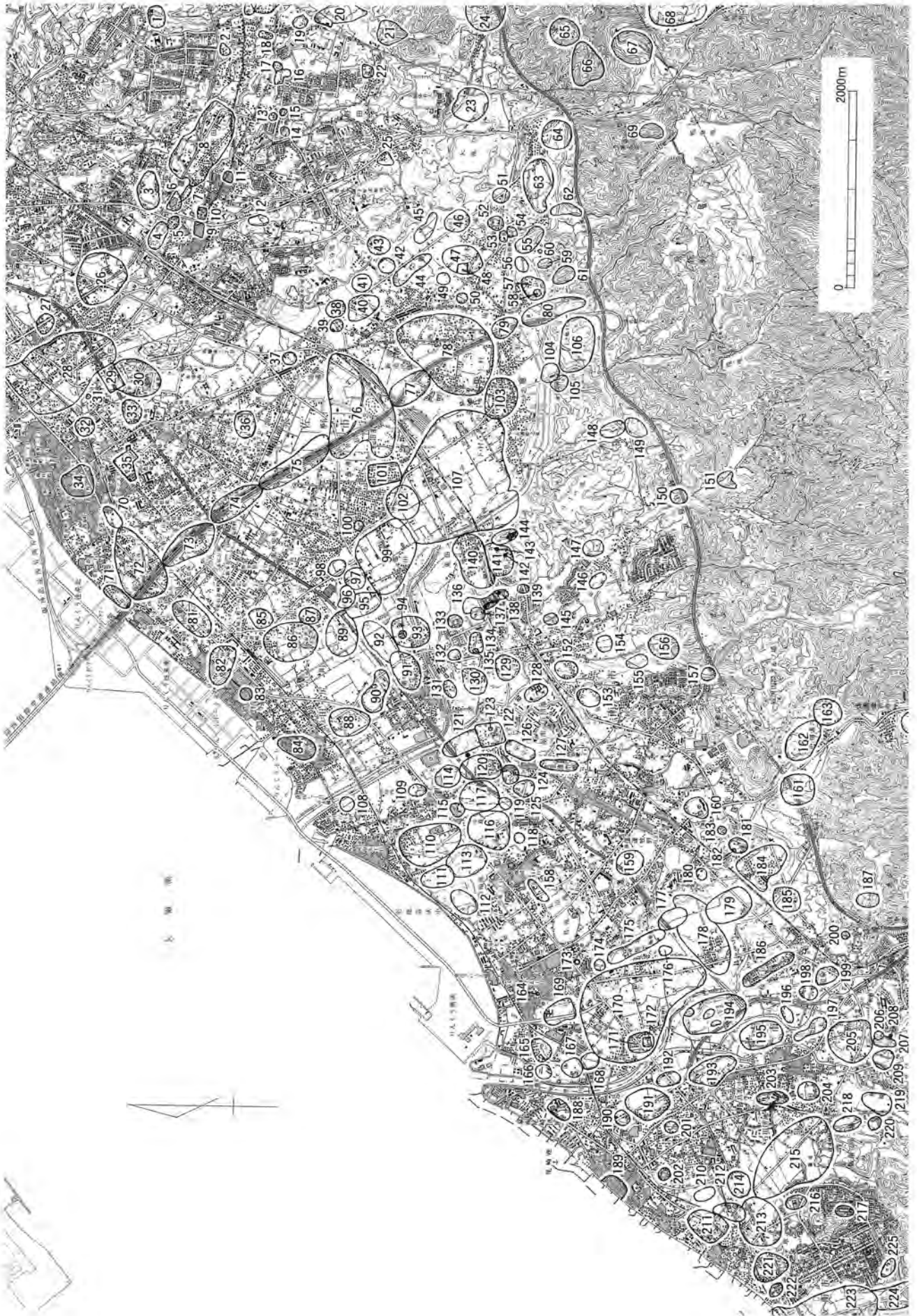
O s a k a , J a p a n .

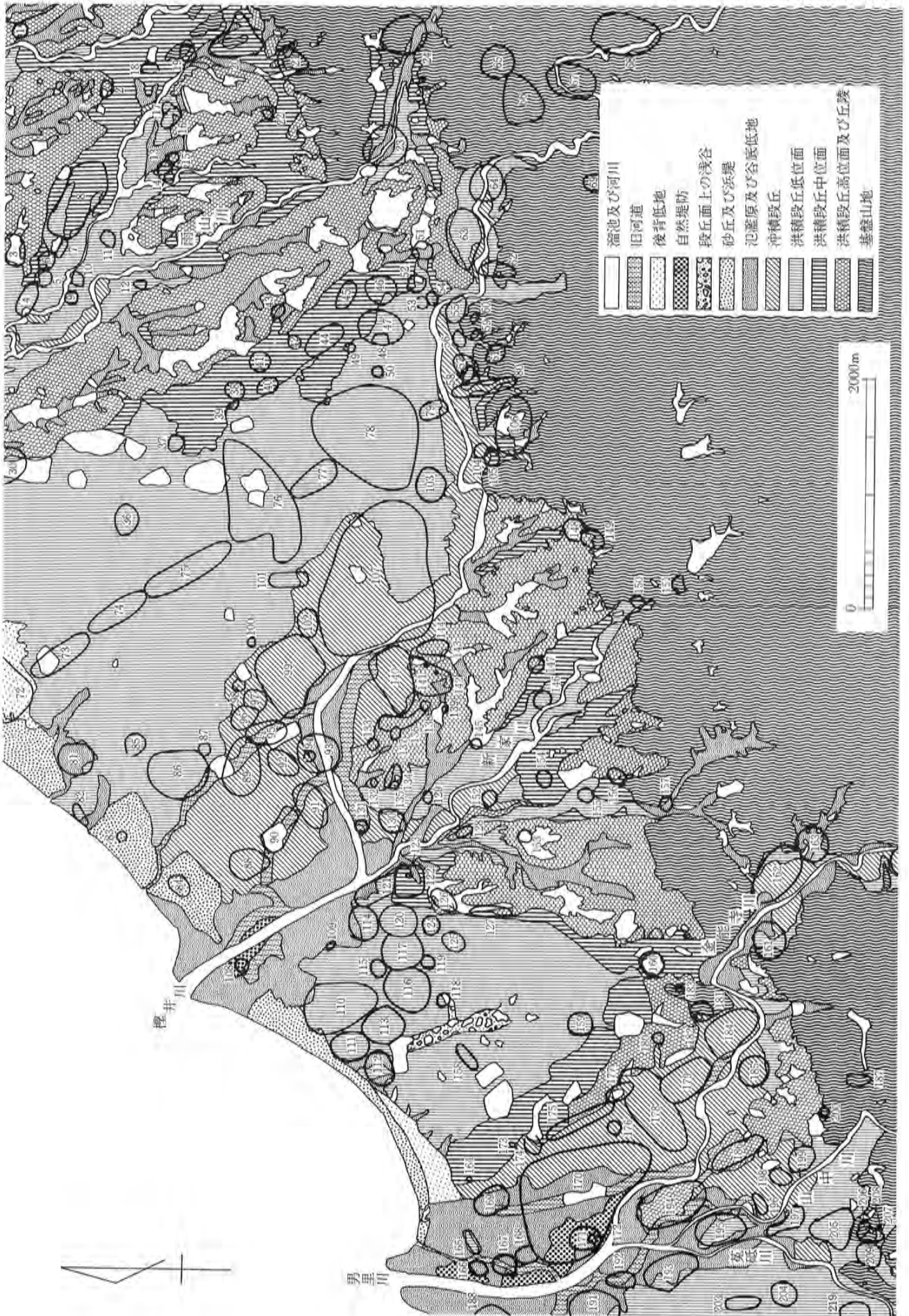
M A R C H , 1 9 9 8

図

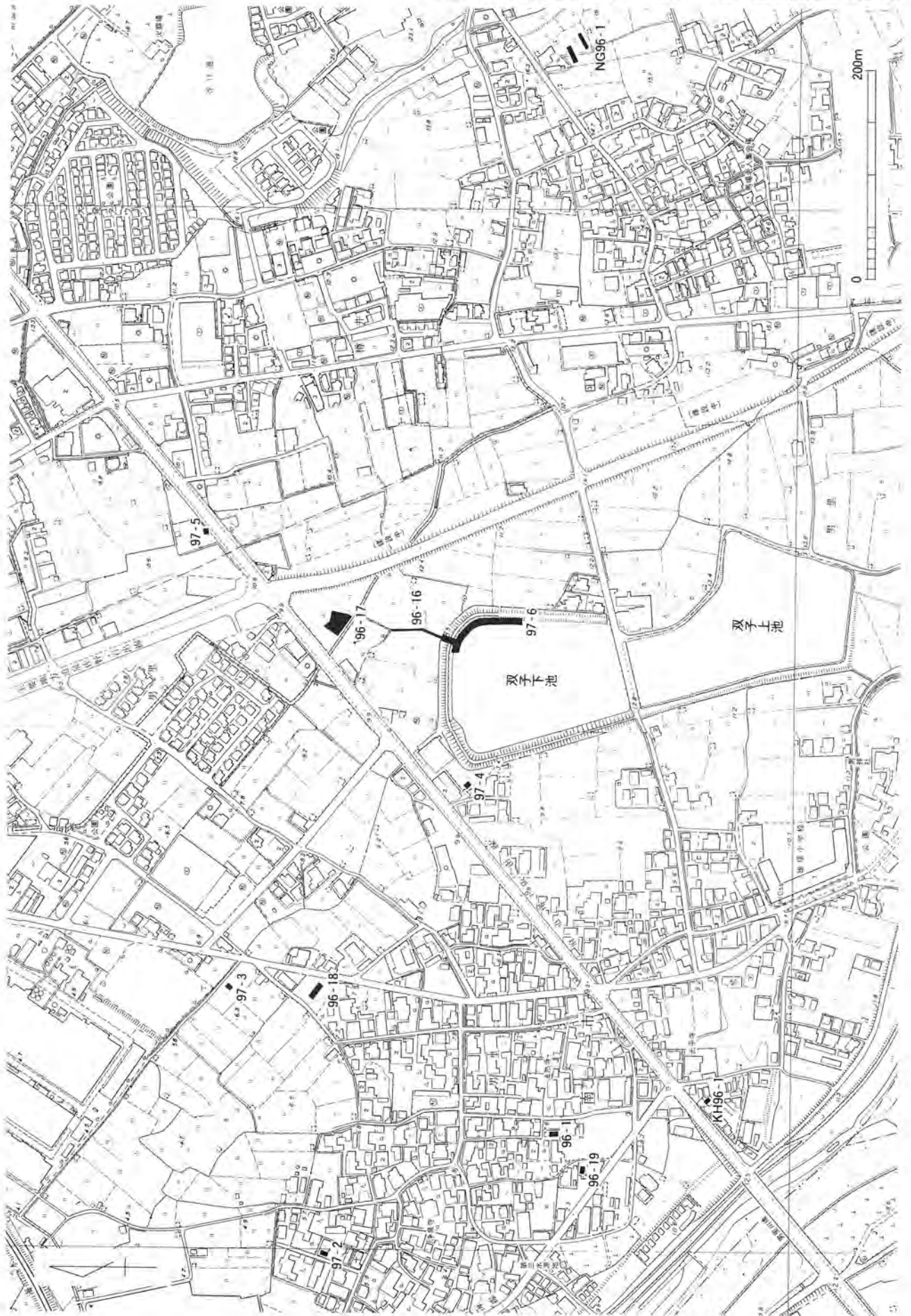
版

PL. 1 泉南地域の文化財

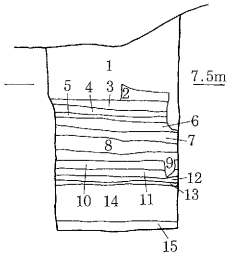




PL. 3 男里遺跡・光平寺跡・長山遺跡調査区位置図

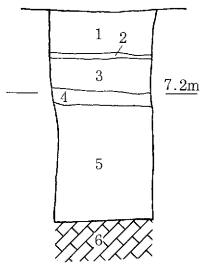


PL. 4 男里遺跡調査区



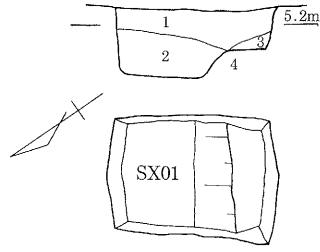
1. 盛土
2. 青灰色土
3. 灰色混じり橙褐色シルト
4. 橙色混じり灰褐色土
5. 灰褐色土 (わずかに橙色混じる)
6. 淡灰褐色土
7. 橙色混じり淡灰褐色土
8. 淡灰褐色混じり橙褐色土
9. 淡灰白色混じり明橙褐色シルト
10. 暗黄褐色混じり灰褐色粘土
11. 暗褐色粘土
12. 暗褐色混じり暗灰褐色粘土
13. 暗褐色粘土
14. 淡黒褐色粘土
15. 淡黒褐色砂質土

ON97-4区北壁断面図



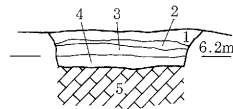
1. 盛土
2. 基礎
3. 旧盛土
4. 灰色粘質土
5. 灰色混じりにぶい褐色シルト
6. 褐色砂

ON96-19区南壁断面図



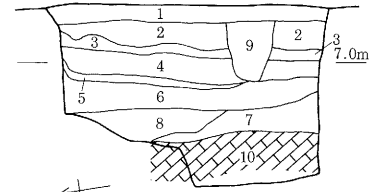
1. 表土
2. 暗灰色土
3. 明黄褐色土
4. 褐色砂礫

ON97-2区平面図及び断面図



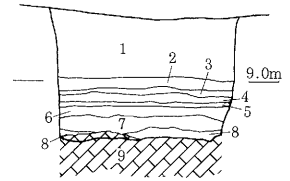
1. 表土
2. 暗黄褐色土
3. 淡灰色土
4. 暗灰色土
5. 灰色混じり明黄褐色土 (礫混入)

ON97-3区平面図及び断面図



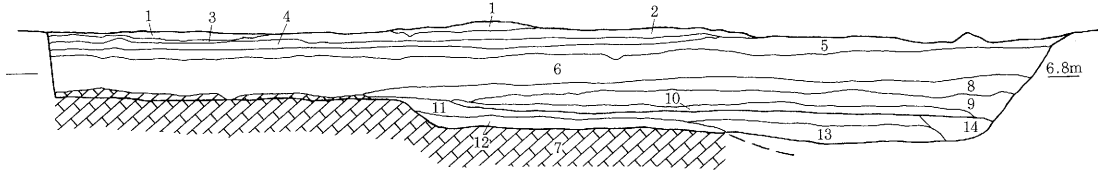
1. 盛土
2. 灰白色砂質シルト
3. 褐色砂質シルト
4. 灰色シルト
5. 茶褐色砂質土
6. 黒褐色粘土
7. 褐色砂質シルト
8. 茶褐色粘質土 (SD01)
9. 灰色礫
10. 褐色砂礫

ON97-1区平面図及び断面図



1. 盛土
2. 灰色シルト
3. 赤褐色混灰褐色土
4. 暗黄褐色土
5. 赤褐色混灰褐色土
6. 暗褐色土
7. 暗褐色粘土
8. 暗褐色混暗黄褐色土
9. 暗黄褐色粘土

ON97-5区北壁断面図



1. 盛土
2. 黒灰色シルト
3. 橙色シルト
4. 灰色砂質シルト
5. にぶい黄褐色砂質シルト
6. 灰褐色砂質シルト
7. にぶい黄褐色粘性シルト
8. 灰褐色粘性シルト
9. 暗黄褐色粘性シルト
10. 黒褐色粘性シルト
11. にぶい褐色砂質シルト
12. 灰褐色砂質シルト
13. 灰黄褐色粘性シルト
14. 灰色砂質シルト

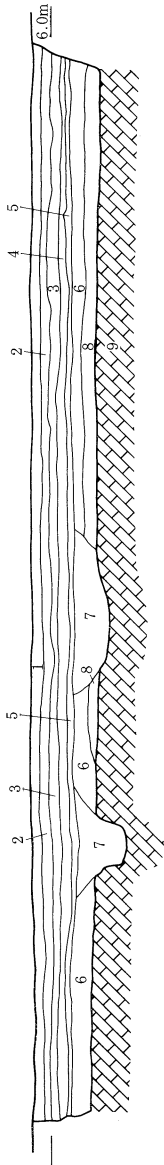
ON96-18区平面図及び断面図



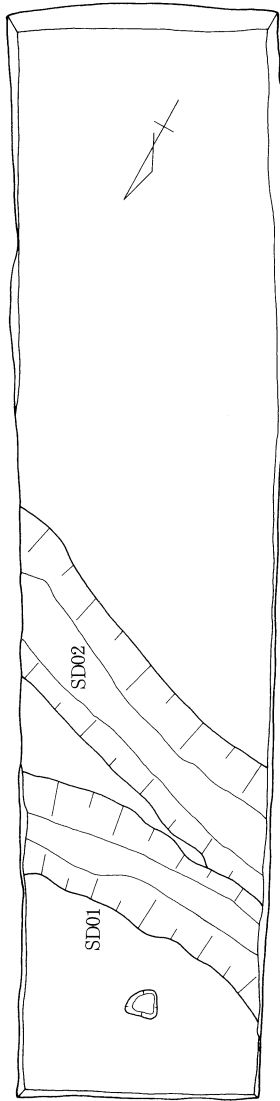


1. 盛土
2. 黒灰色シルト
3. 橙色シルト
4. 灰色砂質シルト
5. にぶい黄褐色砂質シルト
6. 灰褐色砂質シルト
7. にぶい黄褐色粘性シルト
8. 灰褐色粘性シルト
9. 暗黄褐色粘性シルト
10. 黒褐色粘性シルト
11. にぶい褐色砂質シルト
12. 灰褐色砂質シルト
13. 灰黄褐色粘性シルト
14. 灰色砂質シルト

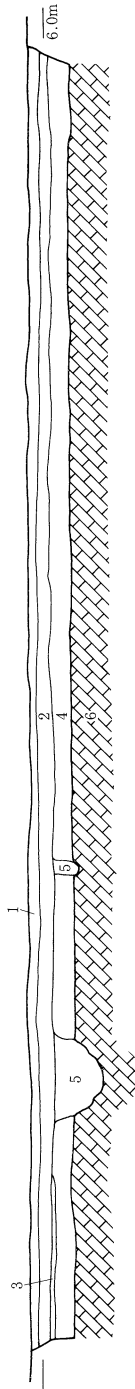
0 10m



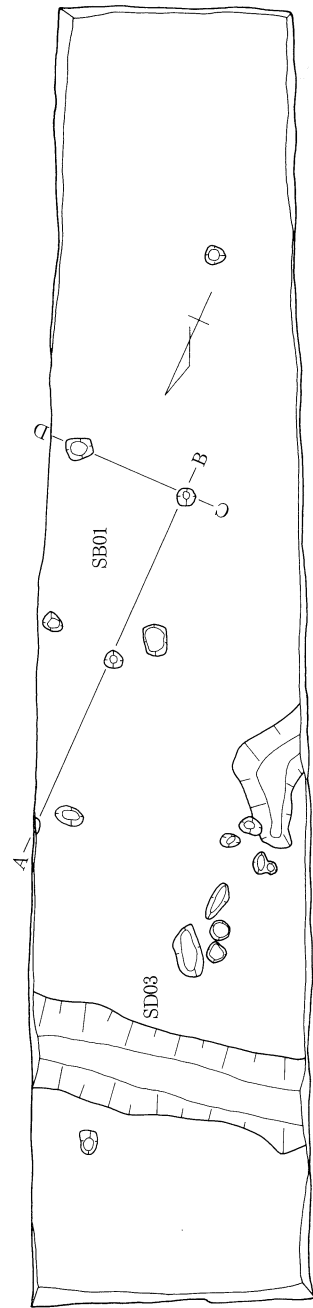
1. 耕作土
2. 明黄褐色土
3. 褐色土
4. 暗黄褐色土
5. 明褐色土
6. 明黄褐色混じり黒褐色土
7. 黒褐色粘質土
8. 黒褐色混じり黄褐色土
9. 黒褐色混じり暗黄褐色土



第1トレンチ平面図及び断面図



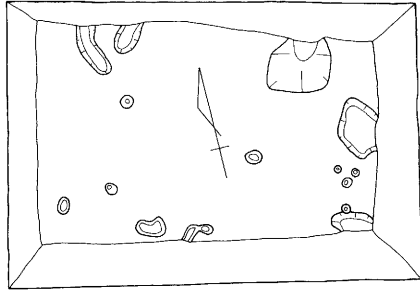
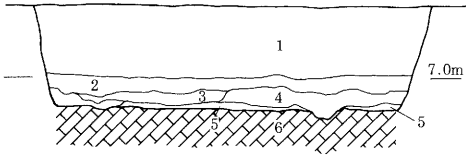
1. 耕作土
2. 暗黄褐色土
3. 暗褐色土
4. 灰色混じり黒褐色粘質土
5. 黒褐色粘質土
6. 暗黄褐色土 (礫含む)



第2トレンチ平面図及び断面図

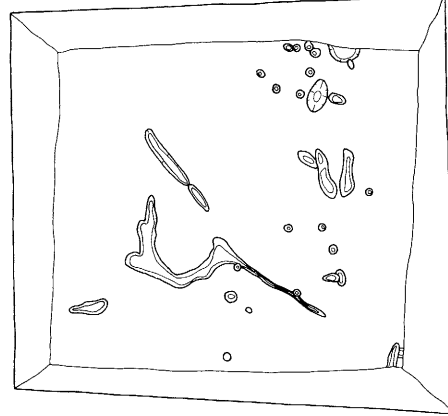
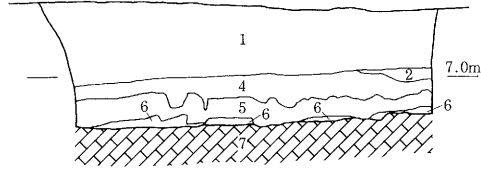
SB01エレベーション





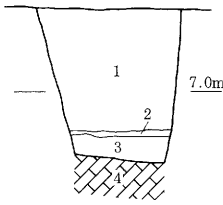
- 1. 盛土
- 2. 暗褐色混じり暗灰褐色土
- 3. 暗灰褐色砂質土
- 4. 暗黒褐色シルト
- 5. 淡灰黄褐色土
- 6. 暗黄褐色土

97-5区平面図及び断面図



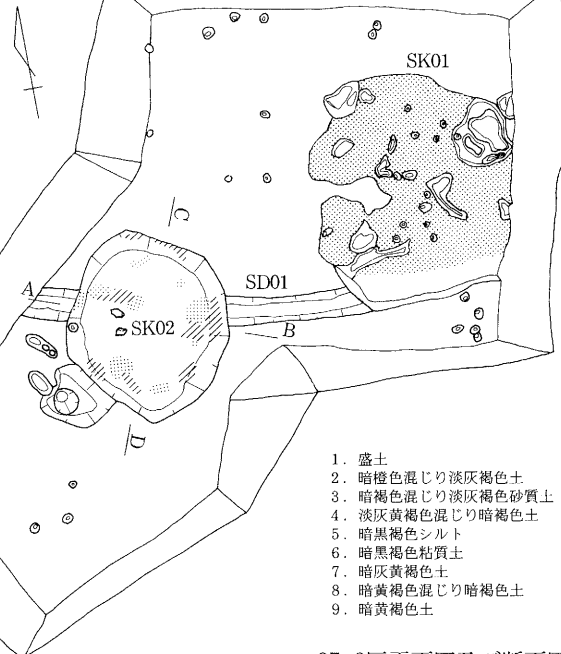
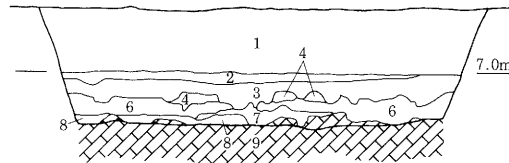
- 1. 盛土
- 2. 橙色混じり灰白色土
- 3. 暗褐色ブロック混じり淡灰褐色砂質土
- 4. 淡灰褐色砂質土
- 5. 暗黒褐色粘質土
- 6. 淡灰黄褐色土
- 7. 暗黄褐色土

97-4区平面図及び断面図



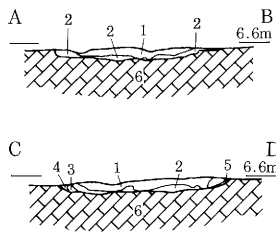
- 1. 盛土
- 2. 暗褐色ブロック混じり灰色土
- 3. 黒褐色粘質土
- 4. 暗黄褐色粘質土

97-2区北壁断面図



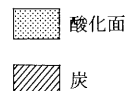
- 1. 盛土
- 2. 暗褐色混じり淡灰褐色土
- 3. 暗褐色混じり淡灰褐色砂質土
- 4. 淡灰黄褐色混じり暗褐色土
- 5. 暗黒褐色シルト
- 6. 暗黒褐色粘質土
- 7. 暗灰黄褐色土
- 8. 暗黄褐色混じり暗褐色土
- 9. 暗黄褐色土

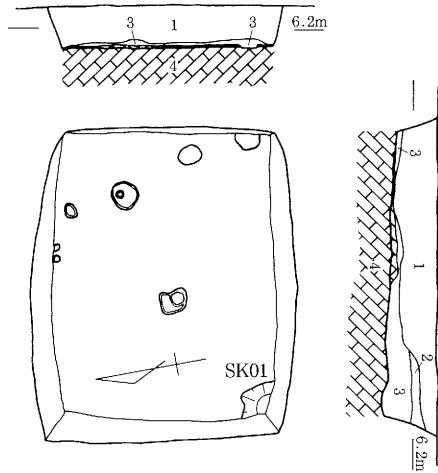
97-3区平面図及び断面図



- 1. 暗褐色粘質土 (黄褐色粒多く含む)
- 2. 暗褐色混じり暗灰褐色砂質土 (地山ブロック・炭含む)
- 3. 暗褐色混じり淡褐色土 (炭体多量に含む)
- 4. 炭化木層
- 5. 淡褐色土 (炭・焼土多量に含む)
- 6. 暗黄褐色土

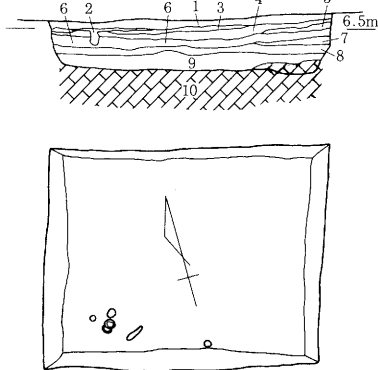
SK02土層断面図





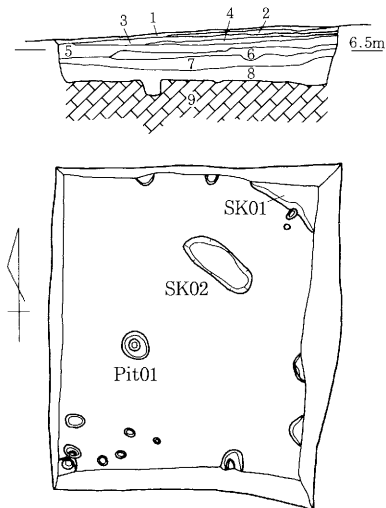
- 1. 盛土
- 2. 暗黒褐色粘質土
- 3. 暗褐色粘質シルト
- 4. 暗黄褐色粘質土

EB97-7区平面図及び断面図



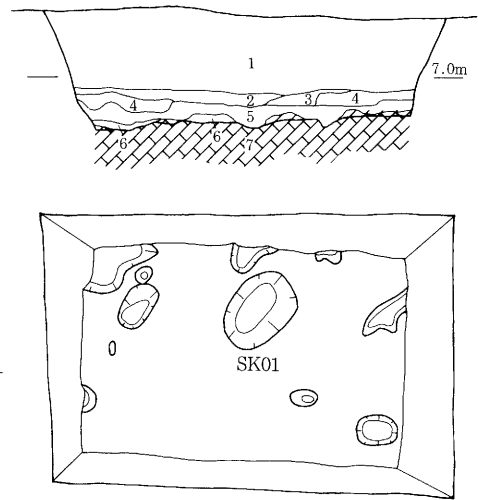
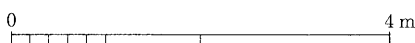
- 1. 黒灰色粘質土
- 2. 灰色砂質シルト
- 3. 灰色混じり橙色シルト
- 4. 灰褐色砂質シルト
- 5. 明灰褐色砂質シルト
- 6. 褐色粒を多く含む灰褐色シルト
- 7. 暗褐色シルト
- 8. 暗黒灰色粘質シルト
- 9. 暗黒褐色粘質土
- 10. 暗黄褐色粘質土

EB97-9区平面図及び断面図



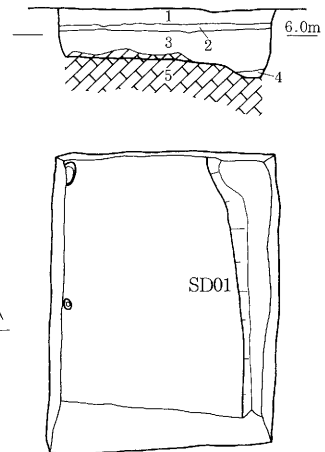
- 1. 黒灰色粘質土
- 2. 灰色砂質シルト
- 3. 灰褐色シルト
- 4. 灰色混じり橙色シルト
- 5. 灰褐色粘質シルト
- 6. 褐色粘質シルト
- 7. にぶい褐色粘質シルト
- 8. 暗黒褐色粘質シルト
- 9. 暗黄褐色粘質土

EB97-10区平面図及び断面図



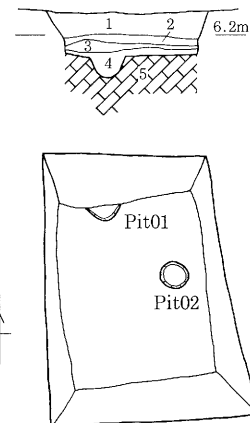
- 1. 盛土
- 2. 淡灰褐色砂質土
- 3. 灰白色土
- 4. 暗褐色ブロック混じり淡灰褐色砂質土
- 5. 暗黒褐色シルト
- 6. 淡灰黄褐色土
- 7. 暗黄褐色土

EB97-6区平面図及び断面図



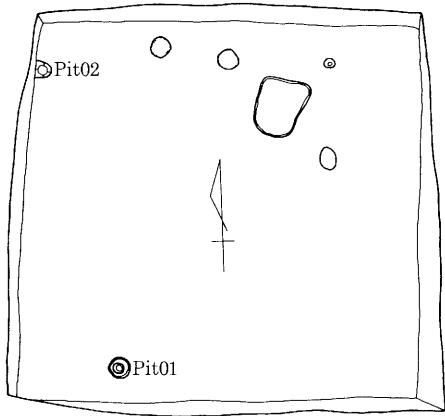
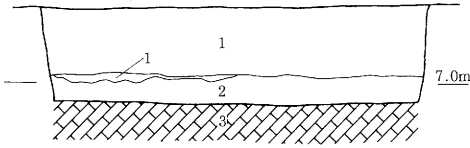
- 1. 灰褐色砂質シルト
- 2. 暗褐色粘質シルト
- 3. 暗黒褐色粘質土
- 4. 礫混じり暗黒褐色粘質土
- 5. 暗黄褐色粘質土

EB97-8区平面図及び断面図



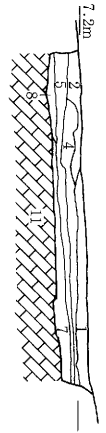
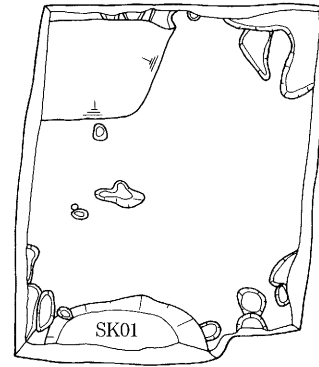
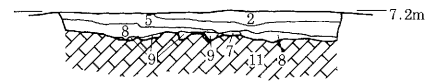
- 1. 盛土
- 2. 青灰色粘質土
- 3. 褐色粘質シルト
- 4. 暗褐色粘質シルト
- 5. 暗黄褐色粘質土

EB97-11区平面図及び断面図



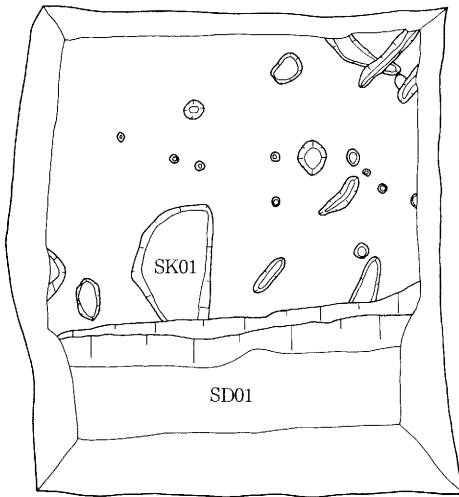
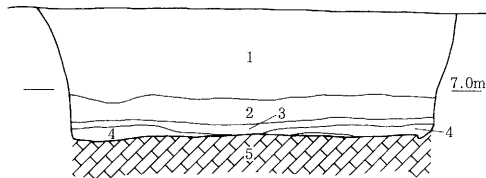
- 1. 盛土
- 2. 淡黒褐色土
- 3. 暗褐色土

EB97-12区平面図及び断面図



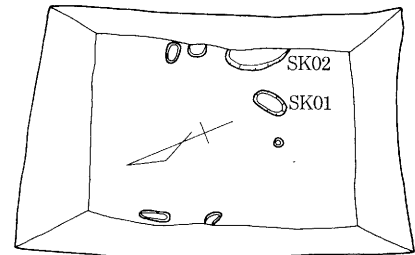
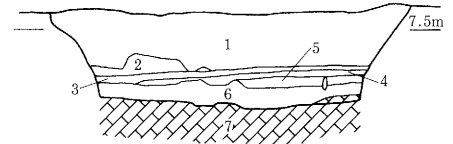
- 1. 暗黄褐色ブロック混じり灰色土
- 2. 暗黄褐色土
- 3. 暗灰色土
- 4. 明褐色ブロック混じり灰色土
- 5. 暗茶褐色土
- 6. 灰色混じり褐色土
- 7. 淡黒褐色土
- 8. 黒褐色土
- 9. 淡褐色土
- 10. 茶褐色混じり黒褐色土
- 11. 暗褐色土 (礫含む)

EB97-13区平面図及び断面図



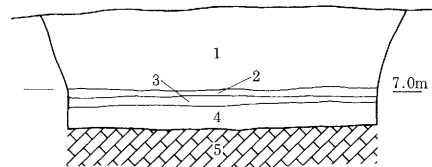
- 1. 盛土
- 2. 褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 褐色混じり黒褐色粘質土
- 5. 暗黄褐色土
- 6. 黒褐色粘質土
- 7. 淡暗褐色土
- 8. 暗褐色土

EB97-15区平面図及び断面図



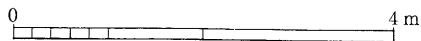
- 1. 盛土
- 2. 褐色シルト
- 3. 灰褐色シルト
- 4. 茶褐色粘質土
- 5. にぶい褐色粘質土
- 6. 暗黒褐色粘質土
- 7. 暗黄褐色粘質土

EB97-14区平面図及び断面図

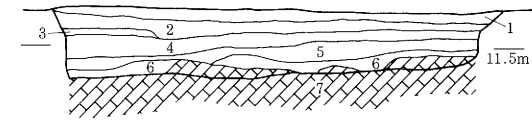


- 1. 盛土
- 2. 茶褐色混じり灰色土
- 3. 暗灰色土 (マンガン混入)
- 4. 黒褐色粘質土 (クサリレキ含む)
- 5. 暗褐色土

EB97-16区北壁断面図

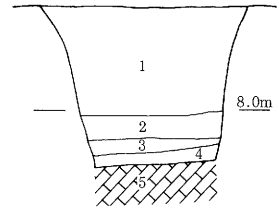


PL.10 光平寺跡・天神ノ森遺跡・専徳寺遺跡・幡代遺跡・岡中遺跡・長山遺跡調査区



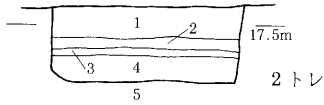
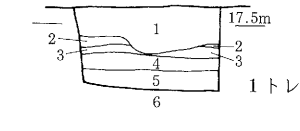
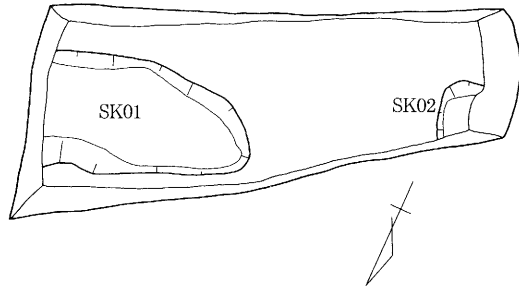
1. 盛土
2. オリーブ黒シルト
3. にぶい褐色シルト
4. 黒灰色土混じり黄褐色シルト
5. 黄褐色土混じり茶褐色シルト
6. 褐灰色シルト
7. 黄褐色シルト

ST97-1区平面図及び断面図



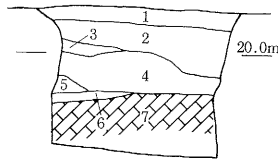
1. 黒色粘質シルト
2. 黒灰色粘質シルト
3. 茶褐色粘質シルト
4. 茶褐色礫混じりシルト

KH96-1区西壁断面図



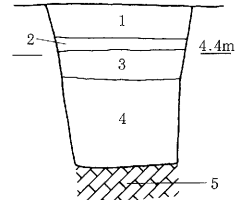
1. 表土
2. 淡灰色土
3. 暗黄褐色土
4. 暗黄褐色土(3よりやや暗い)
5. 茶褐色混じり淡褐色土
6. 礫混じり褐色土

HT96-2区第1トレンチ及び第2トレンチ南壁断面図



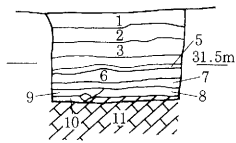
1. 盛土
2. 暗黄褐色土
3. 暗灰褐色土
4. 灰褐色混じり淡褐色シルト
5. 暗褐色混じり青灰色シルト
6. 淡黄褐色砂質土
7. 淡灰褐色砂礫

HT97-1区南壁断面図



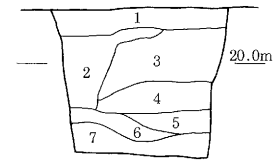
1. 盛土
2. 暗赤灰色シルト
3. にぶい棕色礫混じりシルト
4. 灰褐色砂礫
5. 黄褐色礫

TN97-1区北壁断面図



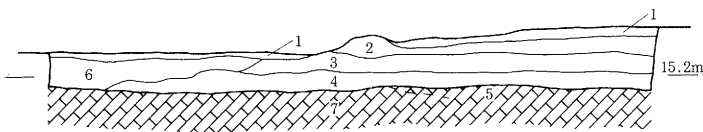
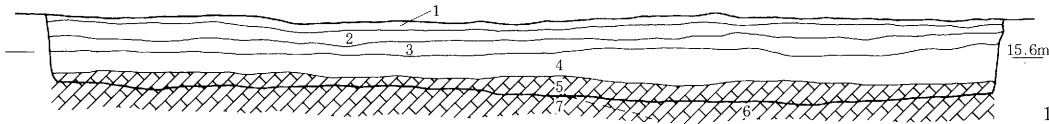
1. 表土及び暗棕色混じり淡灰褐色土
2. 暗褐色シルト
3. 灰褐色混じり暗黄褐色土
4. 暗灰褐色土
5. 暗黄褐色土
6. 灰褐色土
7. 暗褐色混じり土
8. 淡灰褐色礫混じり土
9. 淡灰褐色土
10. 淡褐色土
11. 淡褐色礫混じり土

OK97-1区西壁断面図



1. 盛土
2. 攪乱
3. 攪乱
4. 灰褐色礫混じり粘土
5. 暗灰褐色礫混じり粘土
6. 明黄褐色シルト
7. 青灰色シルト(細砂が互層に混入)

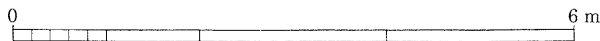
HT96-1区東壁断面図

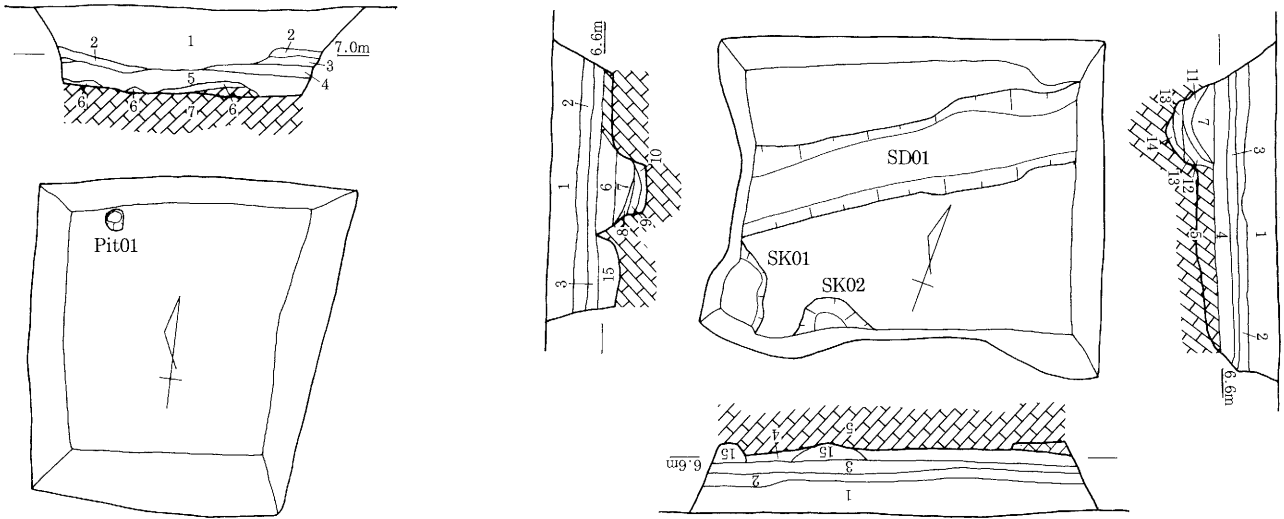


- 第1トレンチ
1. 現代耕土
  2. 黄褐色シルト
  3. 灰褐色シルト(マンガン粒多く含む)
  4. 茶褐色シルト
  5. 黄色シルト
  6. 褐色シルト
  7. 灰色礫混じりシルト

- 第2トレンチ
1. 現代耕土
  2. 黄褐色シルト
  3. 灰褐色シルト(マンガン粒多く含む)
  4. 茶褐色シルト
  5. 黄色シルト
  6. 淡灰褐色シルト
  7. 灰色礫混じりシルト

NG96-1区第1トレンチ及び第2トレンチ北壁断面図





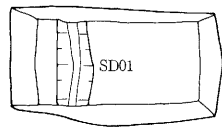
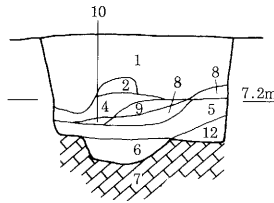
1. 盛土
2. 灰色砂質シルト
3. 暗灰色砂質シルト (焼土・炭少量含む)
4. 褐色砂質シルト
5. 褐色砂質シルト
6. 褐色粘性シルト
7. 赤褐色粘性シルト

1. 盛土
2. 暗灰色砂質シルト
3. 暗灰褐色砂質シルト
4. 淡灰褐色砂質シルト
5. 黄褐色粘質シルト
6. 灰褐色砂質シルト (礫混入)
7. 灰褐色砂質シルト
8. 灰色砂質シルト
9. 灰色シルト
10. 灰色粘質シルト
11. 灰褐色砂質シルト (黄褐色粘性シルトブロック混入)
12. 灰褐色砂質シルト
13. 灰褐色粘性シルト
14. 灰褐色粘性シルト (黄褐色粘性シルトブロック混入)
15. 灰褐色シルト
16. 灰褐色砂質シルト

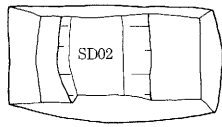
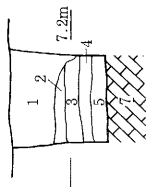
OKD97-1区第2 トレンチ平面図及び断面図

OKD97-1区第1 トレンチ平面図及び断面図

1. 盛土
2. 灰色土
3. マンガン混じり暗灰色土
4. マンガン混じり暗灰色土 (マンガン多く含む)
5. 暗灰色土 (SD02)
6. 明黄褐色粘土
7. 淡灰色土
8. 黄褐色混じり灰色土
9. 茶褐色混じり灰色土 (マンガン含む)
10. 灰色粘土 (SD01)
11. マンガン混じり茶褐色土

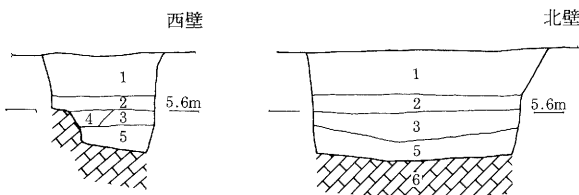


第1遺構面



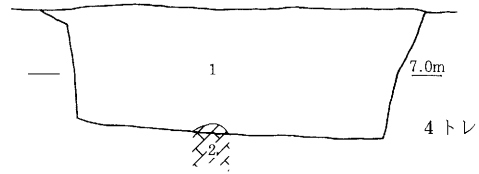
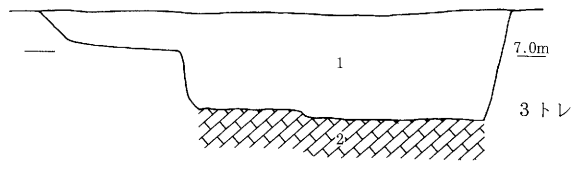
第2遺構面

OKD97-3区平面図及び断面図



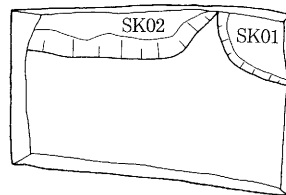
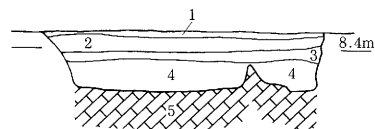
1. 表土
2. 黄褐色粘性シルト
3. 灰褐色砂質シルト
4. 褐色粘性シルト
5. にぶい褐色粘性シルト
6. 灰白色礫層

OKD97-5区断面図



1. 盛土
2. 黄褐色粘質シルト

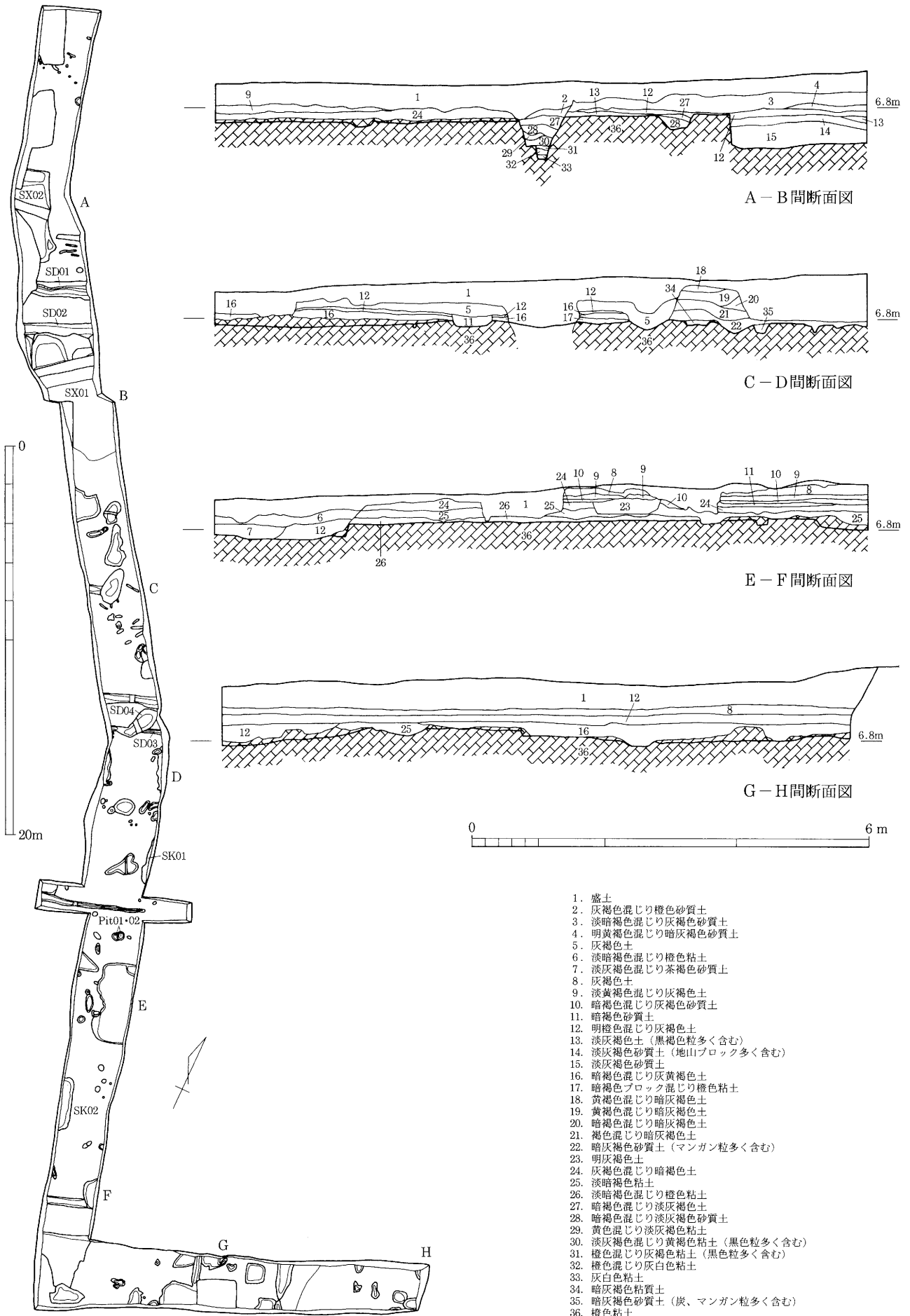
OKD97-1区第3 トレンチ及び第4 トレンチ東壁断面図



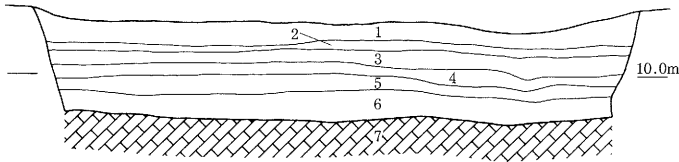
1. 明赤褐色シルト
2. 茶褐色混じり灰白色粘質シルト
3. 茶褐色混じり明褐色粘質シルト
4. 明褐色灰砂
5. 黄褐色粘土

OKD97-4区平面図及び断面図



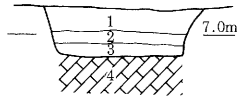


PL.13 岡田遺跡・上代石塚遺跡・兎田遺跡・新家遺跡調査区



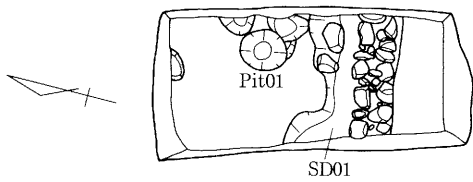
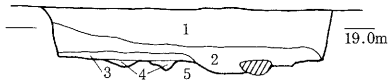
1. 耕作土
2. 灰色混じり褐色土
3. 淡褐色混じり灰色土
4. 灰色混じり暗褐色土
5. 茶褐色混じり灰色土
6. 明黄褐色混じり暗灰色土
7. 明黄褐色粘土

OKD97-6区北壁断面図



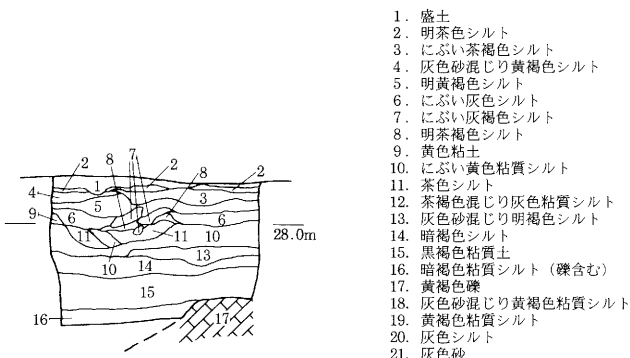
1. 表土
2. 暗褐色土
3. 暗黄褐色土
4. 明黄褐色土

OKD96-8区東壁断面図

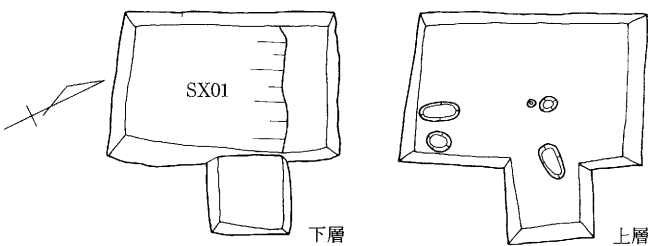


1. 表土
  2. 暗褐色土
  3. 暗褐色混じり暗黄褐色土
  4. 暗灰色土
  5. 灰色混明褐色土
- 石

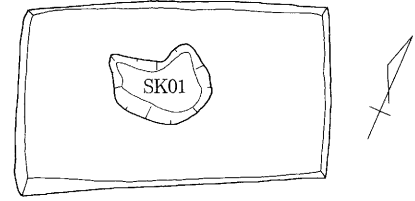
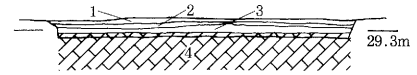
US96-1区平面図及び断面図



1. 盛土
2. 明茶色シルト
3. にぶい茶褐色シルト
4. 灰色砂混じり黄褐色シルト
5. 明黄褐色シルト
6. にぶい灰色シルト
7. にぶい灰褐色シルト
8. 明茶褐色シルト
9. 黄色粘土
10. にぶい黄色粘質シルト
11. 茶色シルト
12. 茶褐色混じり灰色粘質シルト
13. 灰色砂混じり明褐色シルト
14. 暗褐色シルト
15. 黒褐色粘質土
16. 暗褐色粘質シルト (礫含む)
17. 黄褐色礫
18. 灰色砂混じり黄褐色粘質シルト
19. 黄褐色粘質シルト
20. 灰色シルト
21. 灰色砂

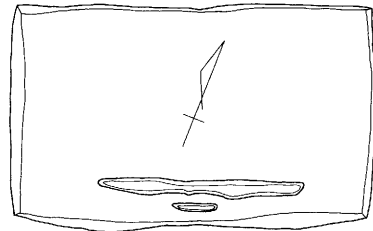
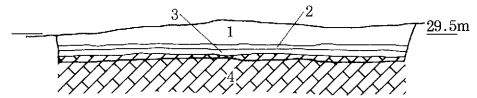


SN96-2区第2 トレンチ平面図及び断面図



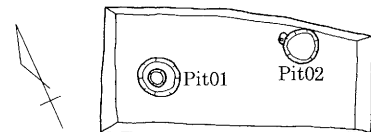
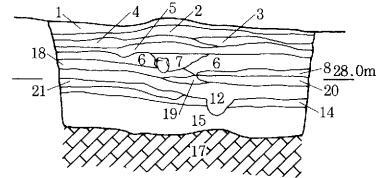
1. 灰黒色土
2. 淡灰褐色土混じり黄褐色土
3. 黄褐色混じり淡灰褐色土
4. 橙色混じり淡黄褐色粘土

JI97-1区第1 トレンチ平面図及び断面図

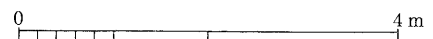


1. 灰色土
2. 淡灰褐色混じり黄褐色土
3. 黄褐色混じり淡灰褐色土 (マンガン多く含む)
4. 灰褐色混じり黄褐色粘質土

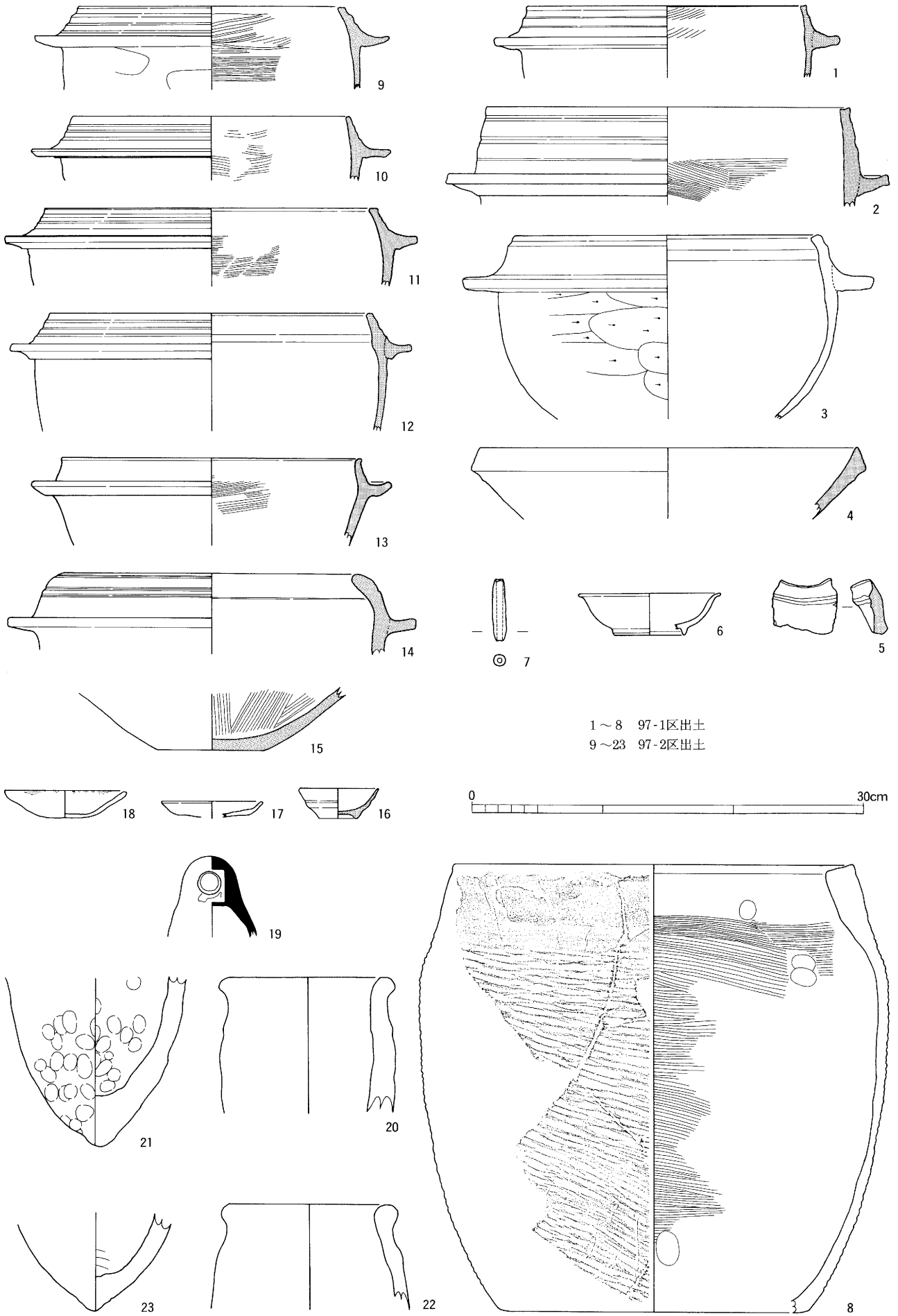
JI97-1区第2 トレンチ平面図及び断面図



SN96-2区第1 トレンチ平面図及び断面図



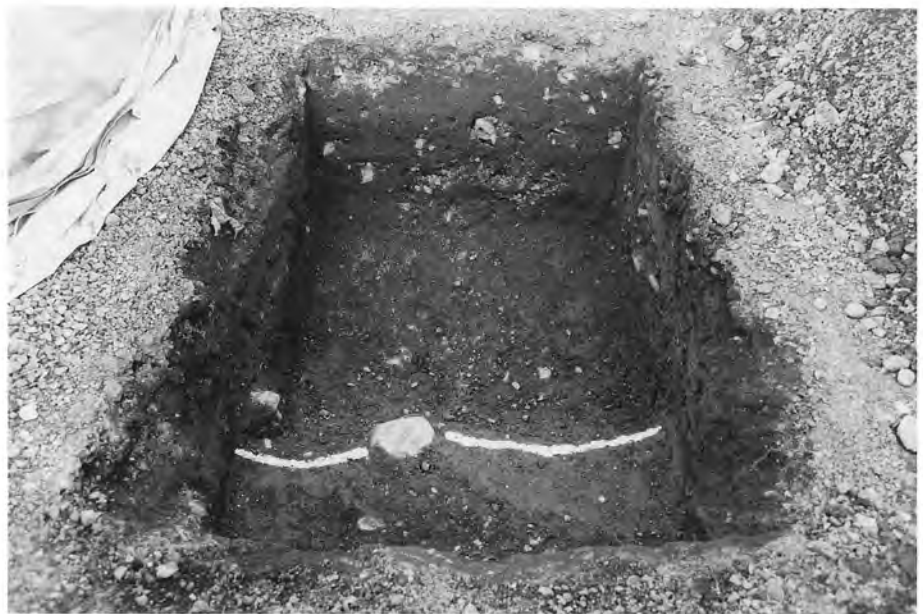
PL.14 岡田遺跡97-1・2区出土の遺物







97-1区  
(南から)



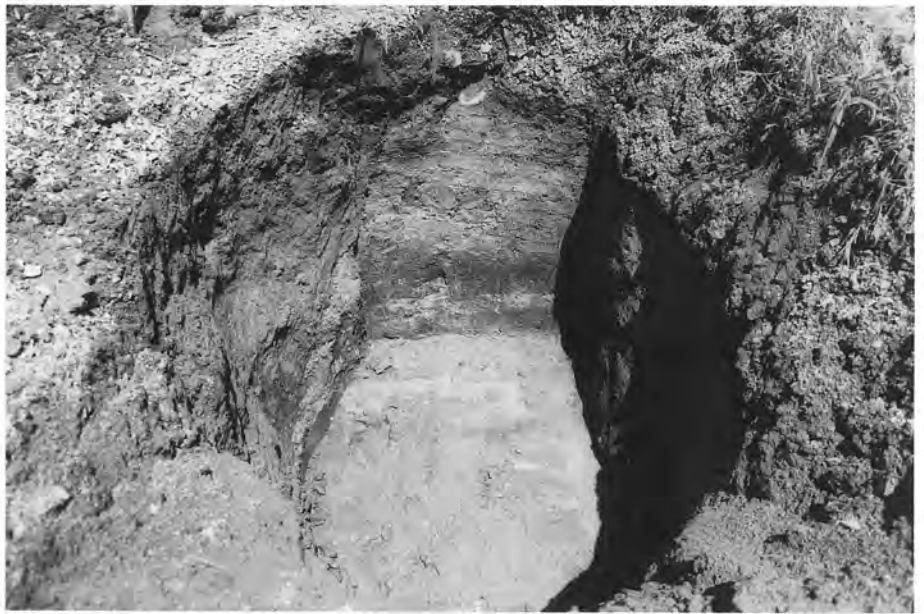
97-2区  
(南から)



同SK01断面  
(西から)



97-3区  
(北から)



97-4区  
(南から)



97-5区  
(南から)



全景（北から）



同上（東から）



ON96-18区  
(南から)



ON96-19区  
(東から)



KH96-1区  
(北から)



97-1区第1トレンチ  
(南から)



97-1区第2トレンチ  
(南から)



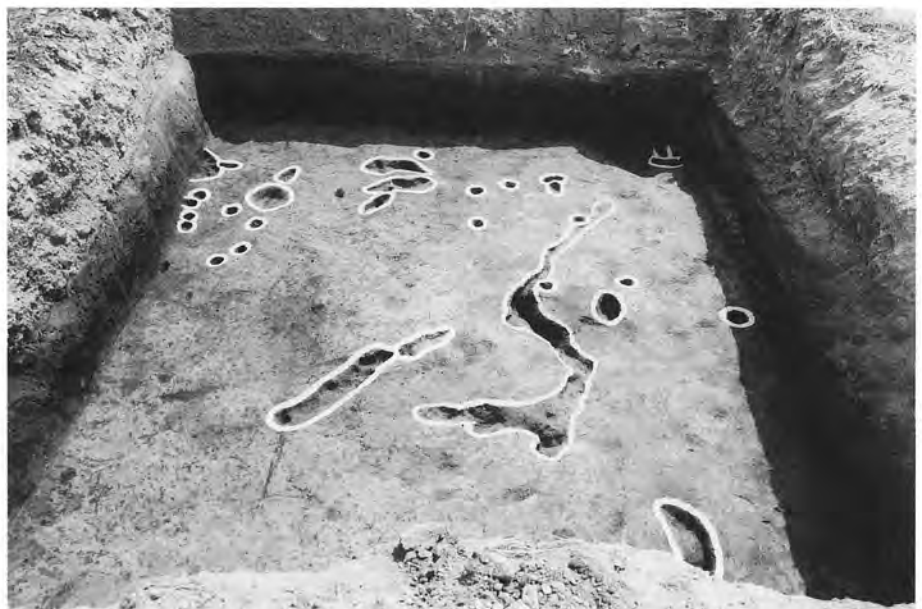
97-2区  
(南から)



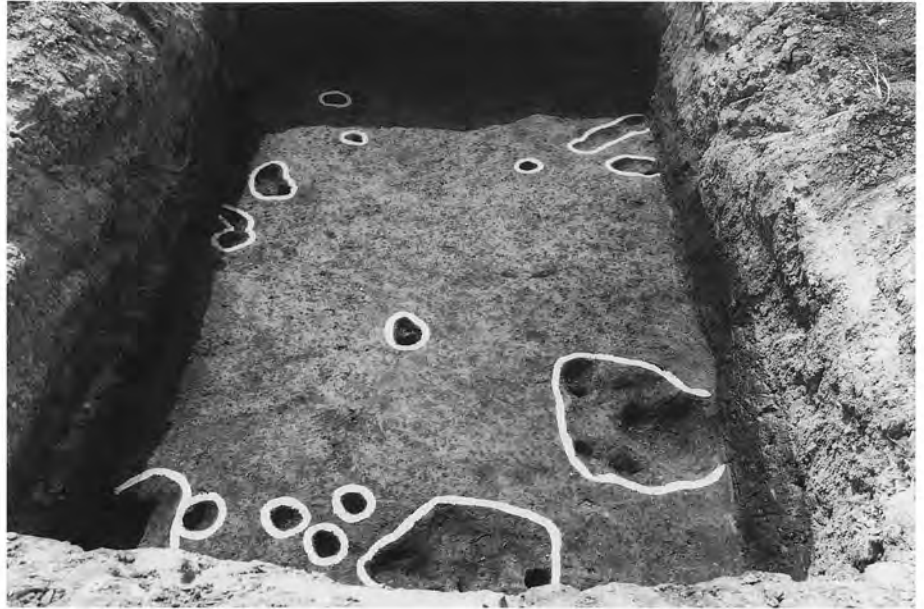
97-3区全景  
(北から)



同SK02  
(南から)



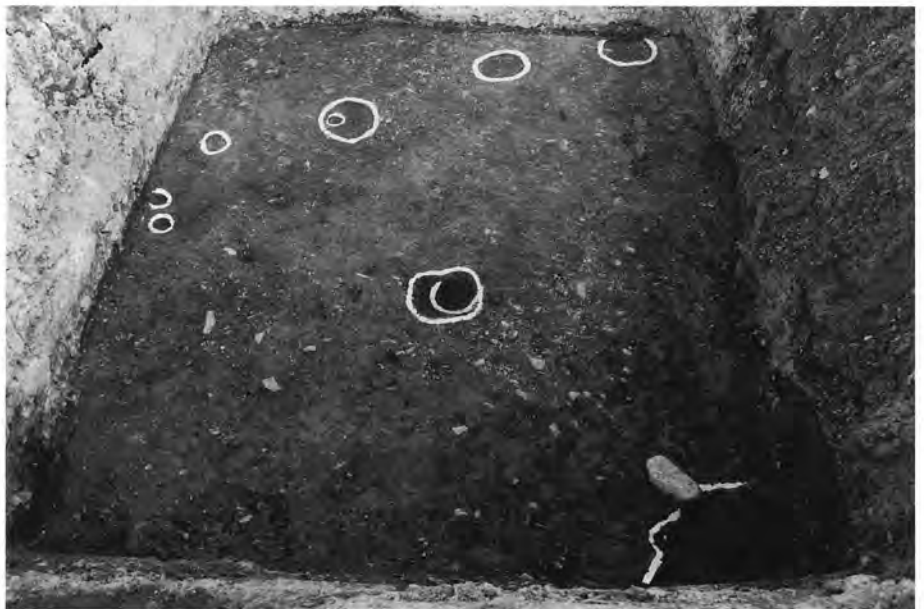
97-4区  
(西から)



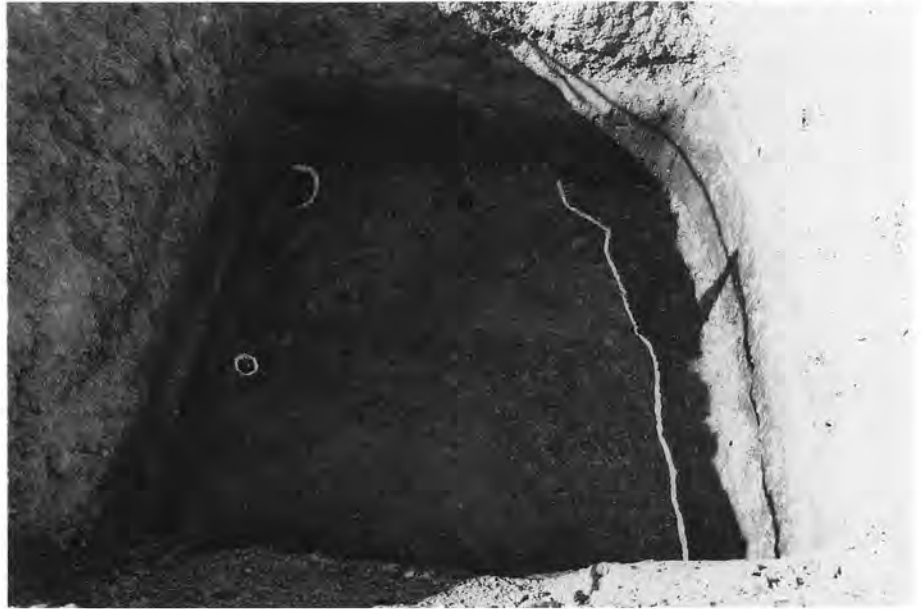
97-5区  
(東から)



97-6区  
(東から)



97-7区  
(西から)



97-8区  
(南から)



97-9区  
(東から)



97-10区  
(北から)

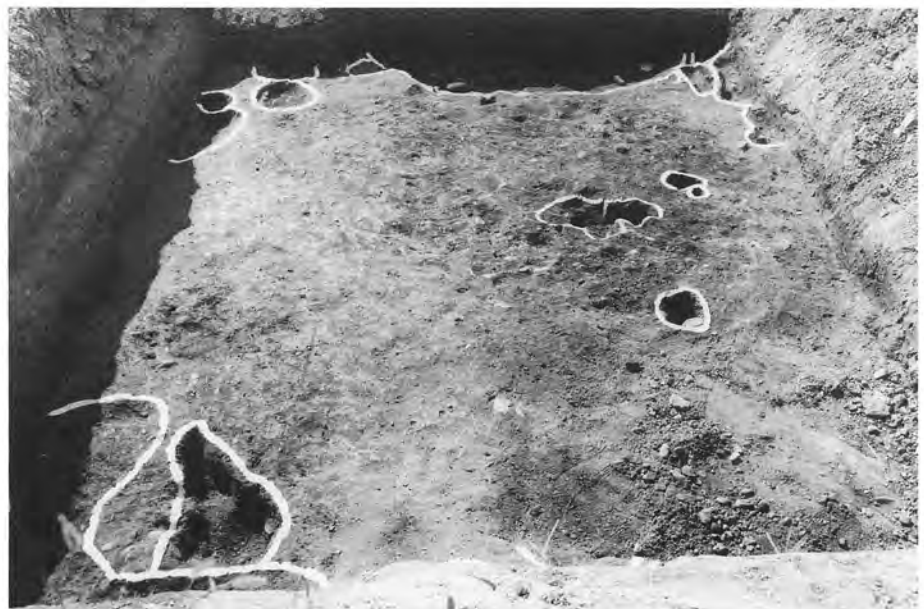




97-11区  
(南から)



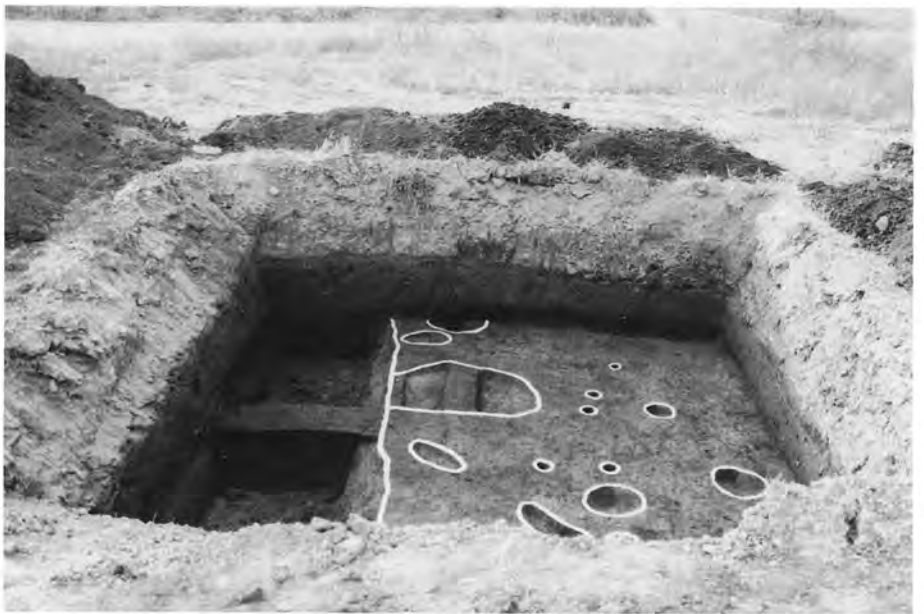
97-12区  
(南から)



97-13区  
(北から)



97-14区  
(北から)



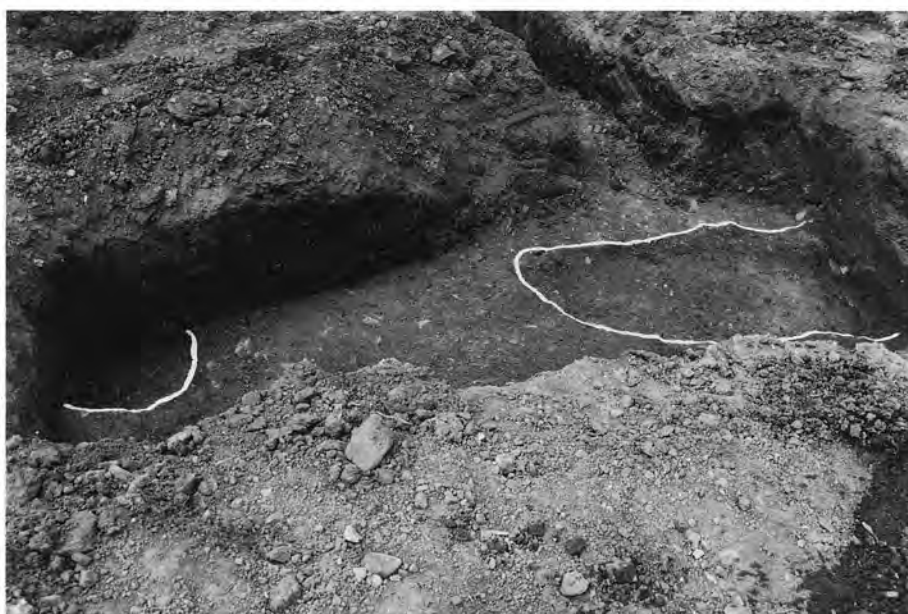
97-15区  
(東から)



97-16区  
(南から)



TN97-1区  
(南から)



ST97-1区  
(南から)



HT97-1区  
(西から)



96-1区  
(南から)



96-2区第1 トレンチ  
(南から)



96-2区第2 トレンチ  
(西から)



OK97-1区  
(東から)



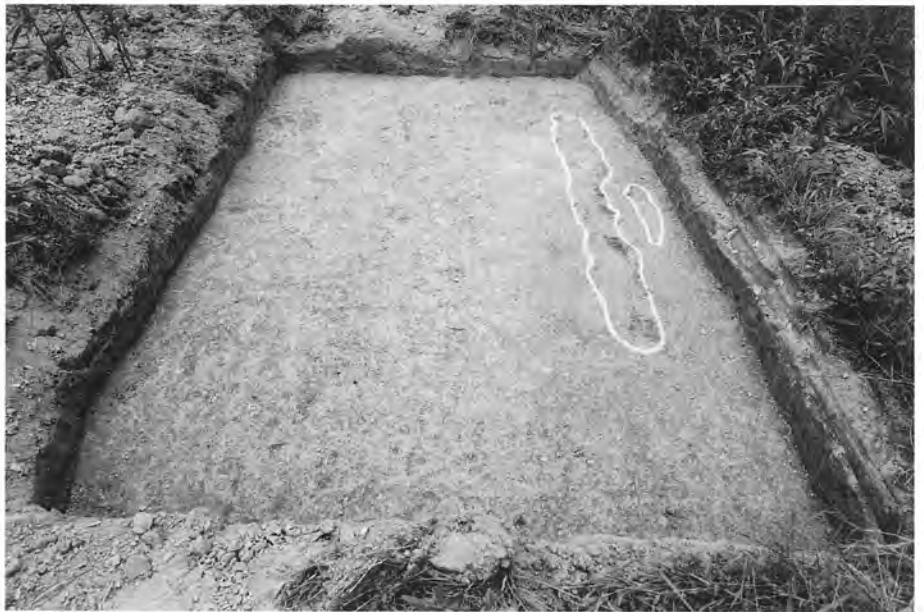
NG96-1区第1トレンチ  
(南から)



同第2トレンチ  
(南から)



J197-1区第1トレンチ  
(東から)



同第2トレンチ  
(西から)



OKD97-1区第1トレンチ  
(東から)



全景  
(南から)



同上  
(北から)



SD01土層断面  
(西から)



97-3区  
(北から)



97-4区  
(東から)



97-5区  
(東から)





OKD97-6区  
(東から)



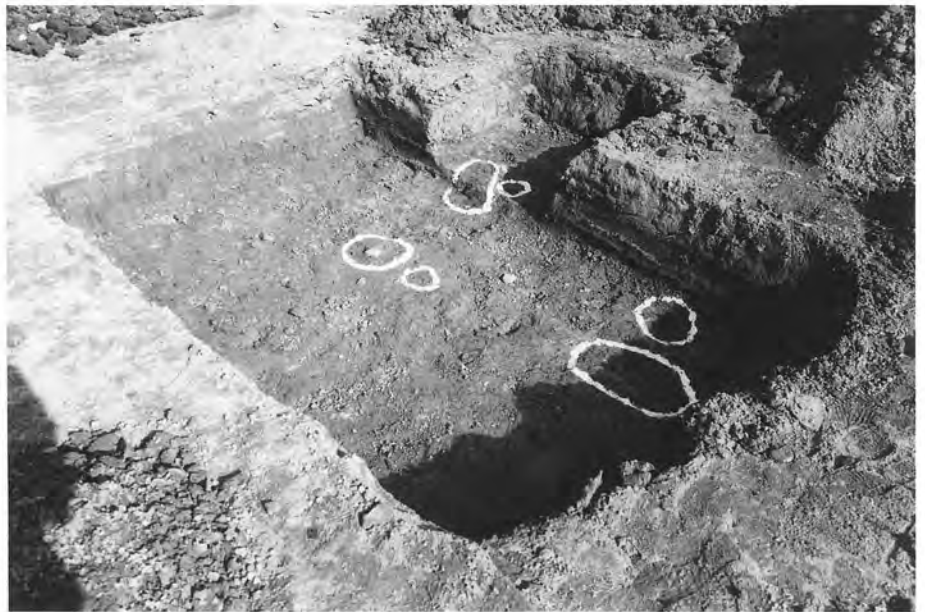
OKD96-8区  
(西から)



US96-1区  
(南から)



第1トレンチ  
(東から)



第2トレンチ上層  
(西から)



第2トレンチ下層  
(南から)



ON5



ON2



ON1



ON8



ON6



ON7



ST5



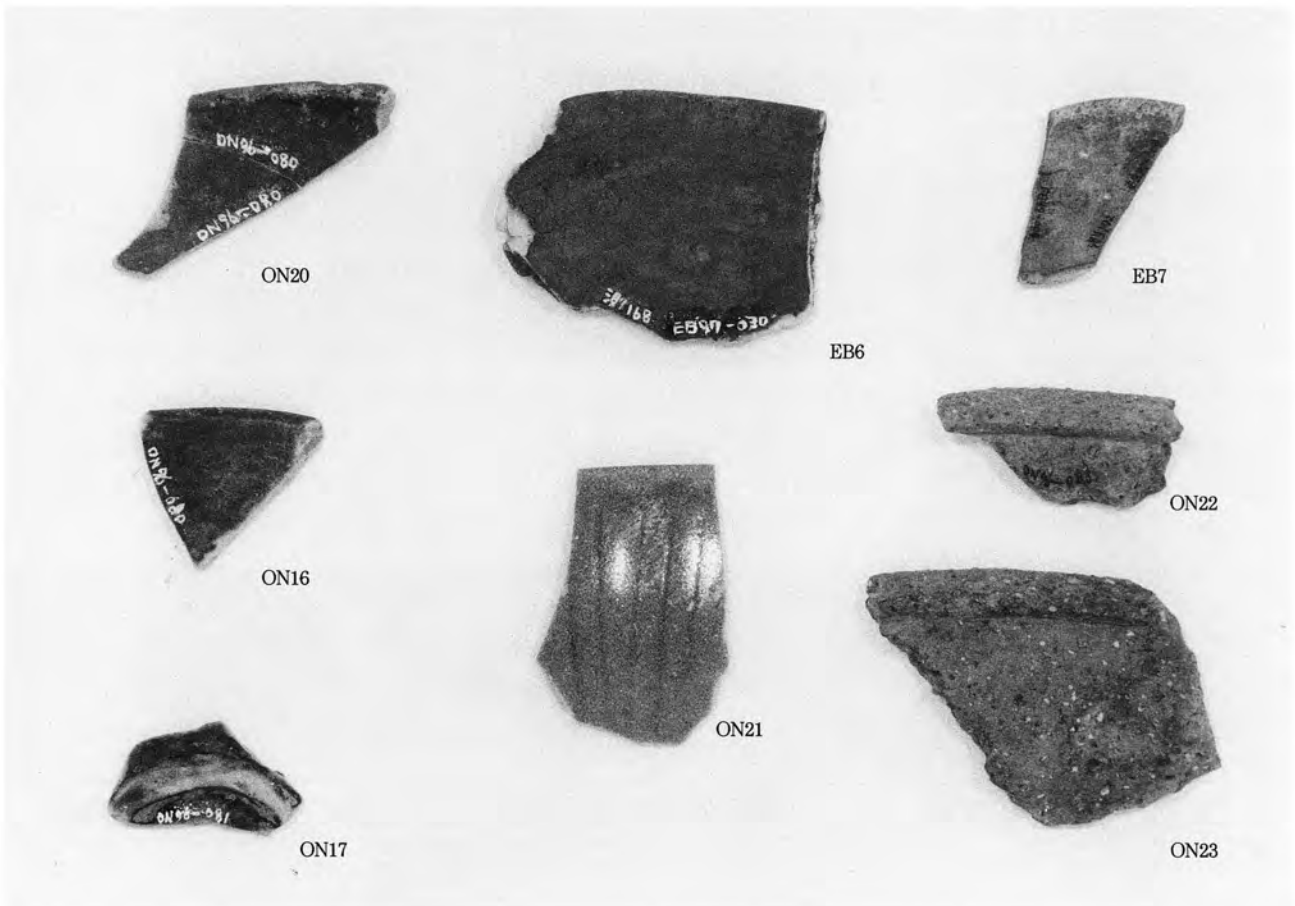
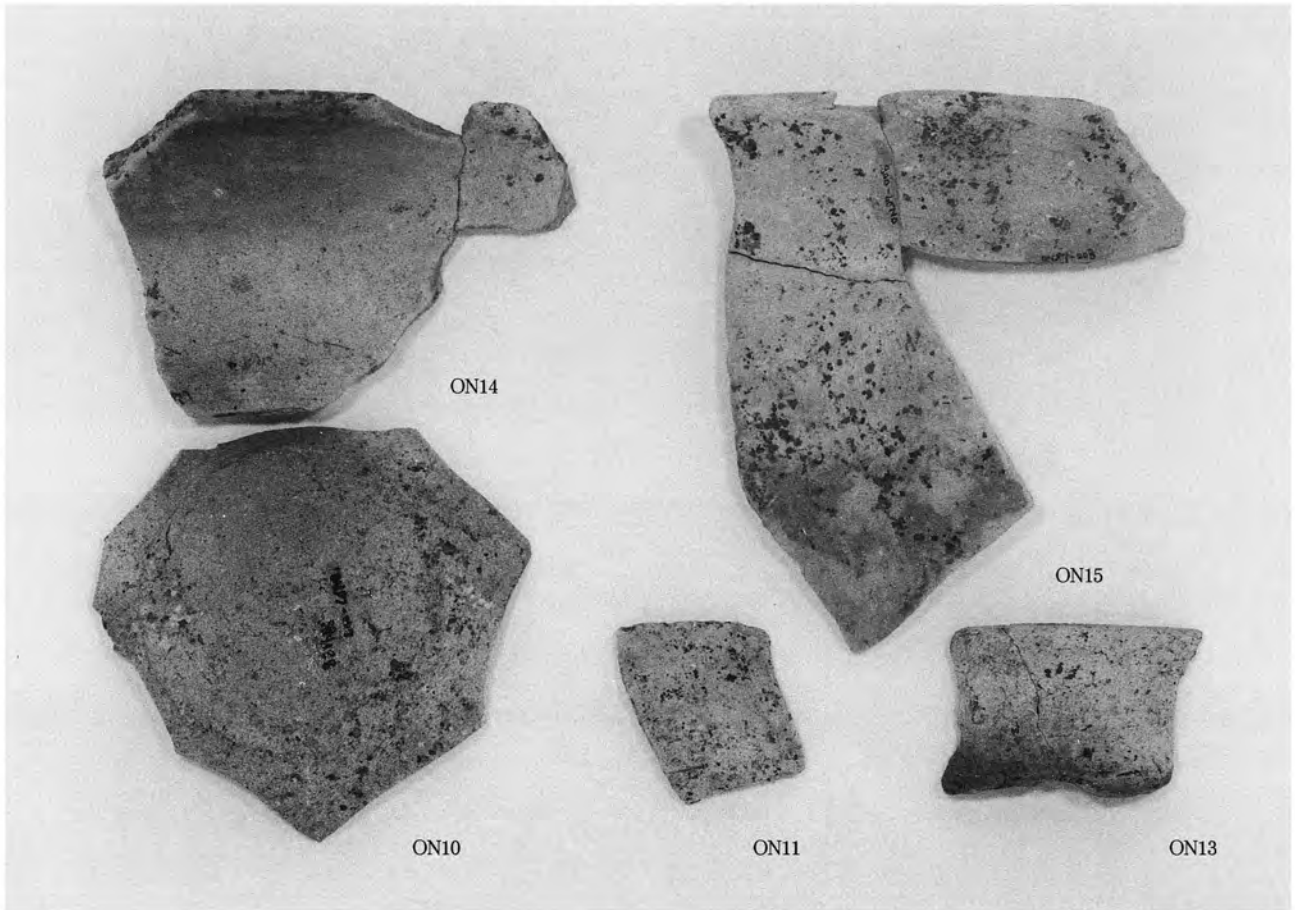
ST3

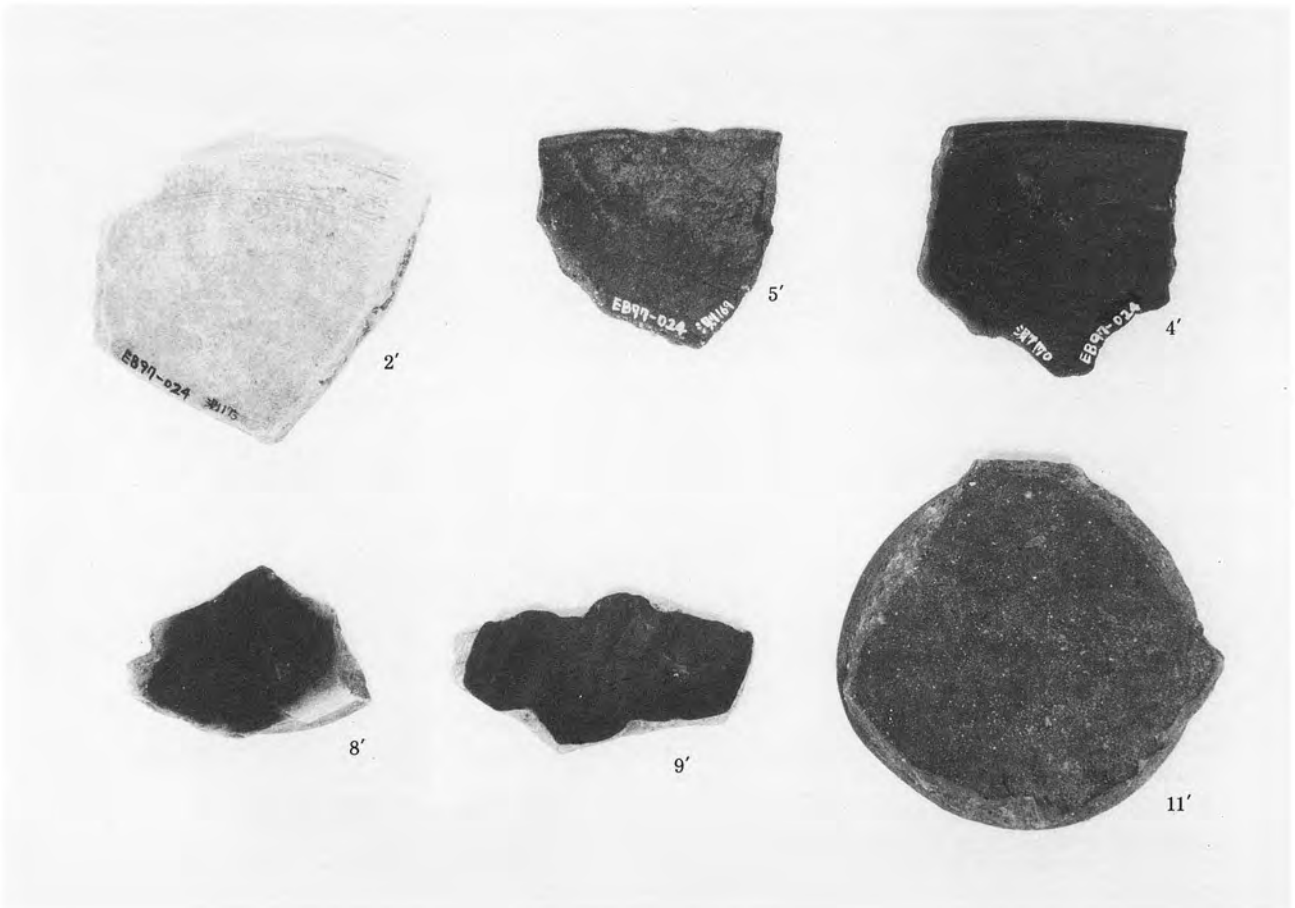
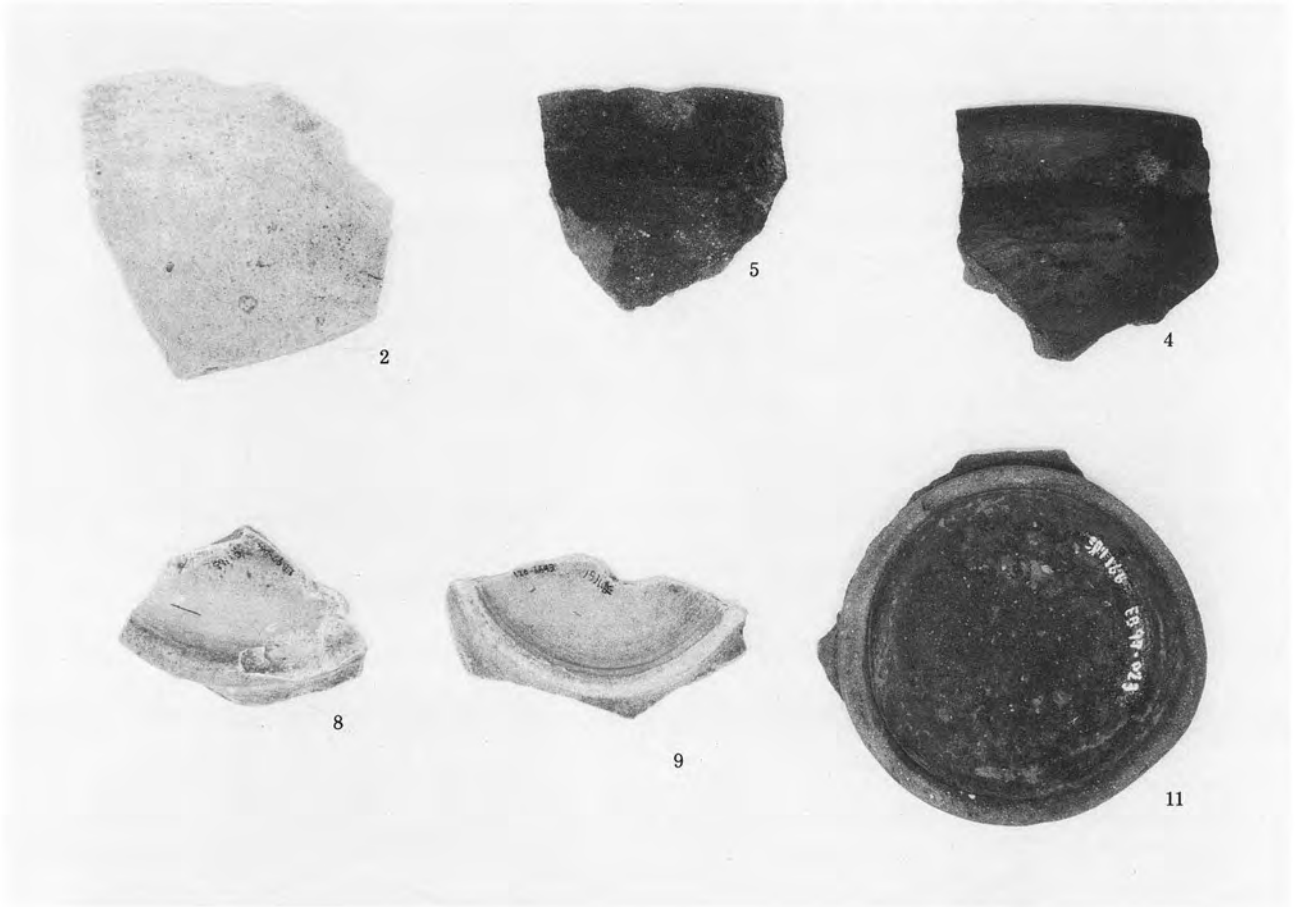


ST2

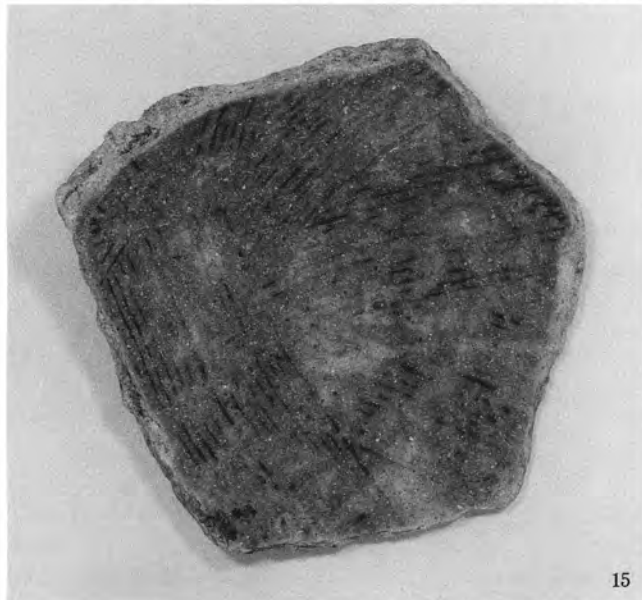
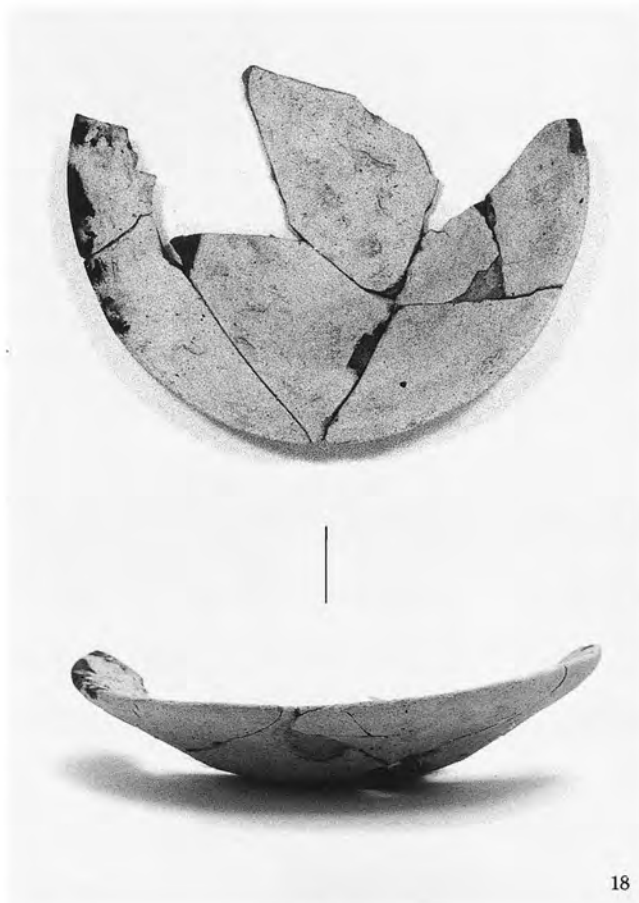


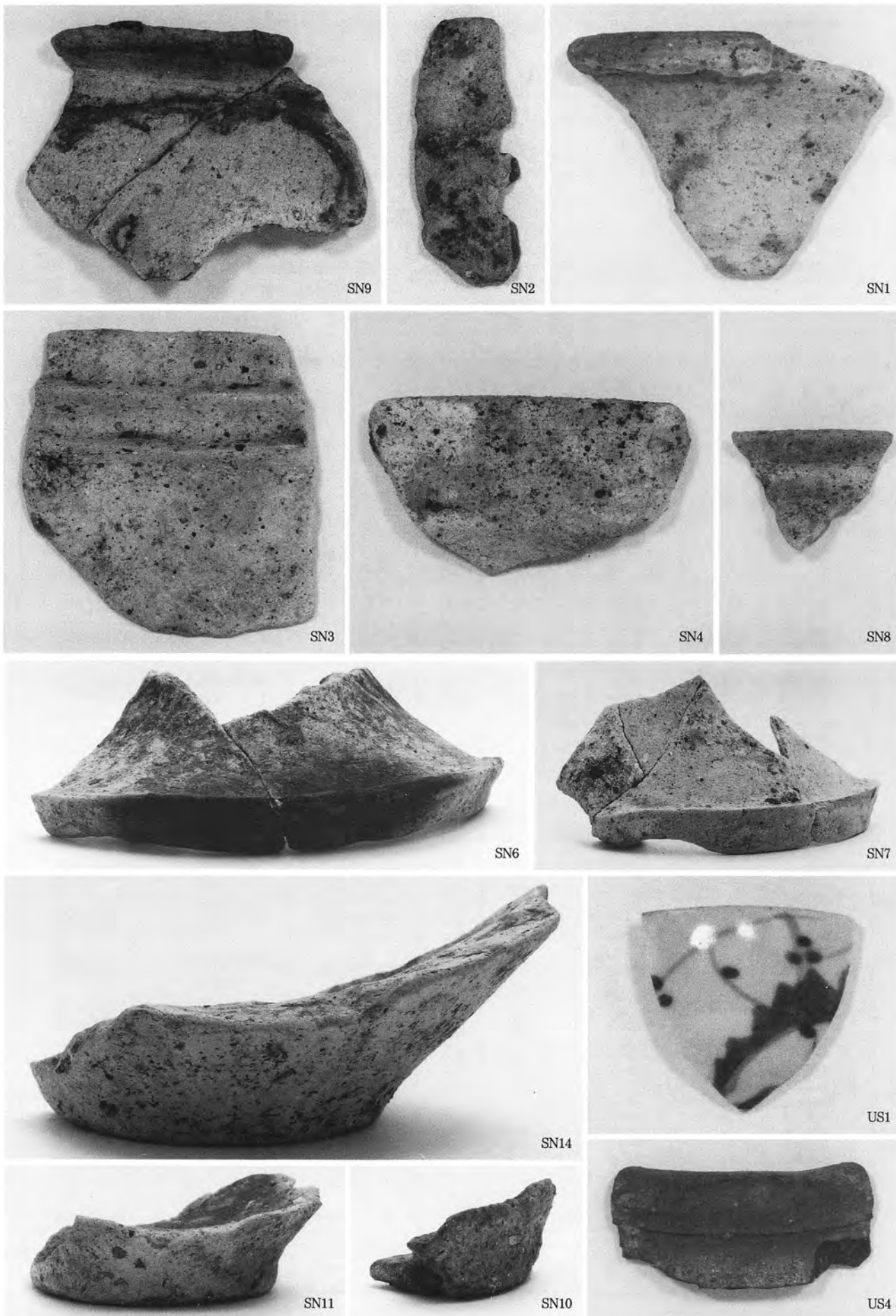
ST4













報告書抄録

ふりがな	せんなんしせきぐんはくつちょうさほうこくしょ 15							
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書							
副書名	—							
巻次	Ⅳ							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第三十一集							
編著者名	仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡 一彦・城野博文・河田泰之・大野路彦							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市樽井一丁目1番1号 TEL.0724(83)0001							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさと いせき 男里遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	ON	34度 21分 30秒	135度 15分 40秒	97-1 199705 97-2 199712 97-3 199709 97-4 199707 97-5 199712 96-17 199702 96-18 199702 96-19 199703	5 2 3 4 4 226 22 3	住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 事務所 給油所 共同住宅 住宅新築
こうへい じ せき 光平寺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	KH	34度 21分 30秒	135度 15分 40秒	96-1 199703	2	住宅新築
えびすばたいせき 戎畑遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 樽井	27228	EB	34度 21分 56秒	135度 15分 39秒	97-1 199707 97-2 199710 97-3 199708 97-4 199708 97-5 199708 97-6 199708 97-7 199709 97-8 199709 97-9 199709 97-10 199709 97-11 199710 97-12 199710 97-13 199710 97-14 199710 97-15 199710 97-16 199710	64 4 28 18 14 14 20 20 20 20 27 14 20 20 9 25 16	工場及び倉庫 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅兼店舗 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築
てんじん の もり い せき 天神ノ森遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	TN	34度 22分 02秒	135度 15分 25秒	97-1 199705	2	住宅新築
せんとく じ い せき 専徳寺遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 樽井	27228	ST	34度 22分 04秒	135度 15分 48秒	97-1 199704	8	分譲住宅
はたしろ い せき 幡代遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 幡代	27228	HT	34度 21分 09秒	135度 16分 08秒	97-1 199706 96-1 199702 96-2 199703	3 3 4	住宅新築 住宅新築 住宅新築
おかなか い せき 岡中遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 信達岡中	27228	OK	34度 20分 51秒	135度 16分 38秒	97-1 199712	4	住宅新築
ながやま い せき 長山遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 馬場	27228	NG	34度 21分 30秒	135度 16分 05秒	96-1 199702	18	宅地造成
じょうだい し づか い せき 上代石塚遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 信達牧野	27228	JD	34度 21分 33秒	135度 16分 39秒	97-1 199707	17	共同住宅
おか だ い せき 岡田遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おか だ 岡田	27228	OKD	34度 22分 39秒	135度 16分 45秒	97-1 199711 97-2 199705~06 97-3 199712 97-4 199705 97-5 199708 97-6 199709 96-8 199703	53 234 2 6 4 10 2	共同住宅 宅地造成 住宅新築 住宅新築 住宅新築 アンテナ設置 住宅新築
うさいだ い せき 兔田遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 うさいだ 兔田	27228	US	34度 22分 25秒	135度 18分 38秒	96-1 199703	5	住宅新築
しん げ い せき 新家遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 しん げ 新家	27228	SN	34度 22分 14秒	135度 17分 57秒	96-2 199701	9	住宅新築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男里遺跡					
97-1	集落	弥生時代末 ～中世	溝	土師器・瓦器など	庄内式並行期の土器が 多量に出土 近世集落の状況を知る 資料を獲得
97-2	集落	近世	落ち込み	土師質土器・瓦など	
97-3	集落・生産	中世	落ち込み	土師器・瓦器など	
97-4		奈良		土師器	
97-5		不明		土師器	
96-17		平安～中世	鋤溝・土坑など	黒色土器・瓦器・土師器な ど	
97-18		中世	落ち込み	瓦器など	
97-19	不明				
光平寺跡					
96-1		中世		瓦質土器など	
戎畑遺跡					
97-1	集落	不明	掘立柱建物・土坑・ 溝など	土師質土器	遺跡範囲の拡大
97-2	集落・生産	不明			
97-3		平安	土器焼成坑・溝など	土師器・黒色土器など	
97-4		不明	溝など		
97-5		不明	溝など		
97-6		中世	溝・土坑など		
97-7	集落	中世	土坑・ピット	瓦器など	
97-8	集落	不明	溝・ピット		
97-9		不明	ピット		
97-10		不明	土坑・ピット		
97-11	集落	中世	ピット	瓦質土器・瓦器など	
97-12	集落	平安	溝・土坑・ピット	黒色土器・瓦器など	
97-13	集落・生産	中世	土器焼成坑・ピット など	瓦器など	
97-14	集落	中世	土坑・ピット	瓦器など	
97-15	集落	不明	溝・土坑・ピット	瓦器など	
97-16		不明			
天神ノ森遺跡					
97-1		不明			
専徳寺遺跡					
97-1	集落	近世	土坑	陶磁器・瓦など	新規発見の近世遺跡
幡代遺跡					
97-1		不明			
96-1		不明			
96-2		不明			
岡中遺跡					
97-1		不明			
長山遺跡					
96-1		不明			
上代石塚遺跡					
97-1	生産	不明	鋤溝・土坑		
岡田遺跡					
97-1	集落	中世～近世	溝・土坑	土師器・瓦質土器・陶磁器 など	中世の遺構・遺物を多 量に確認
97-2	集落	中世	溝・土坑・ピット	土師器・瓦質土器・瓦など	
97-3		中世	溝		
97-4		中世	土坑	瓦器など	
97-5		不明			
97-6		中世		瓦器	
96-8		不明			
兎田遺跡					
96-1	集落	不明	溝・ピット	陶磁器・瓦など	遺跡内において初めて 近世の遺構を確認
新家遺跡					
96-2	集落	弥生・近世	ピット・落ち込み	弥生土器・磁器など	弥生土器が多量に出土

泉南市遺跡群発掘調査報告書XV

泉南市文化財調査報告書 第31集

1998年3月31日

編集 大阪府泉南市教育委員会

発行 泉南市樽井一丁目1番1号

TEL 0724-83-0001

印刷 中島弘文堂印刷所



